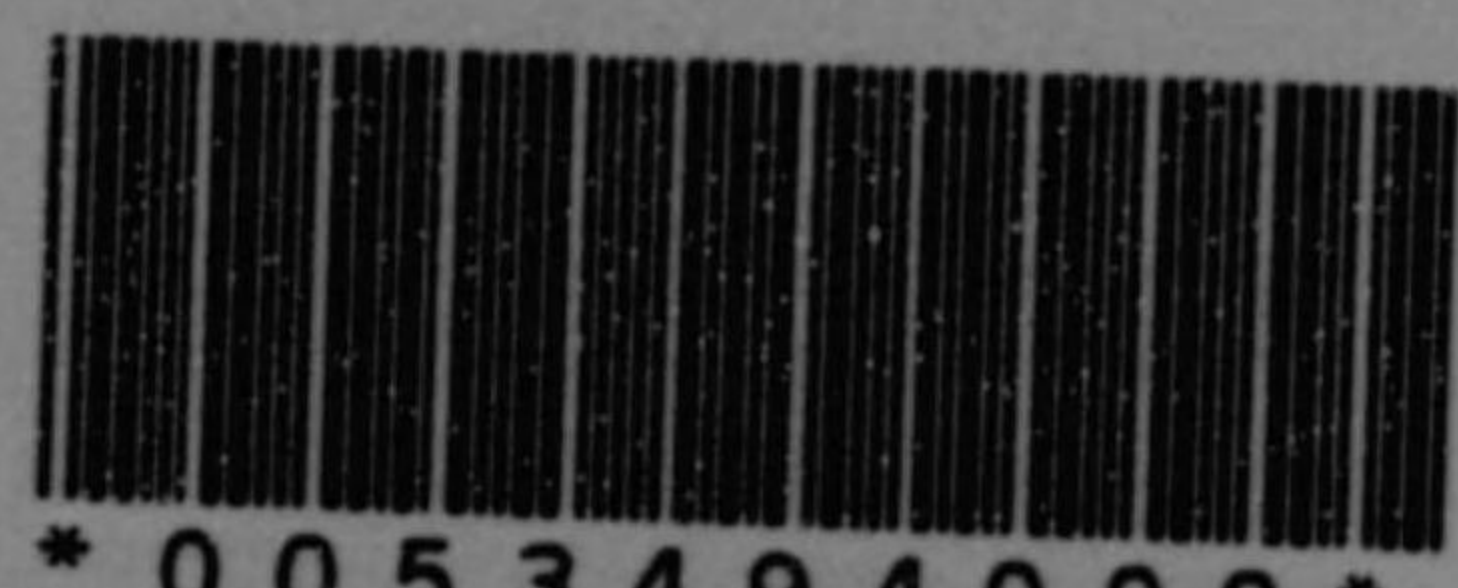


601  
35



\*0053494000\*

0053494-000

601-35

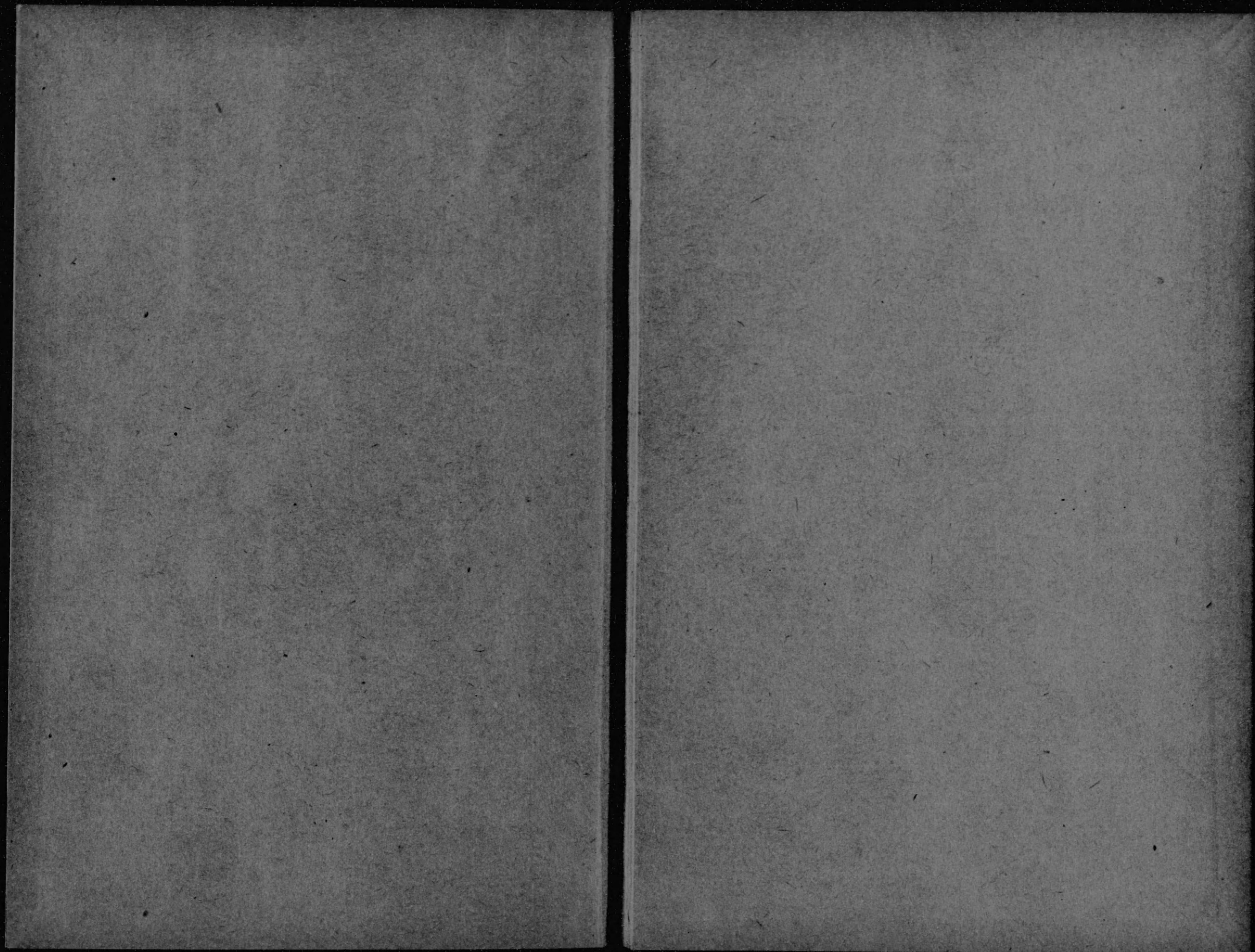
アチックミュージアム彙報

アチックミュージアム

第26

昭13

AIA



601

35

アチック ミューゼウム彙報 第二六

宇和島藩  
吉田藩

漁村經濟史料

小野武夫編

アチック ミューゼウム刊



257

アチック ミューゼウム彙報 第二六



漁村經濟史料

小野武夫



アチック ミューゼウム刊

## はしがき

今を距る十四年前の大正十三年一月に、私は舊宇和島藩の土地制度調査の爲に愛媛縣宇和島市に出張したことがある。出張本來の目的は土地制度調査にあつたので、滞在中道草を取る暇などは無論なかつたのであるが、其の節の調査に東道の勞を取つて呉れた宇和島市の郷土史家にして「宇和島吉田兩藩誌」の著者兵頭賢一氏が偶々氏の手許にある同地方漁村經濟史料を携へ來られ、實は此の史料を藩誌中に収録すべきであつたが、何分にも無数の漁撈繪圖が中にあり、之を入れることにすれば出版費が嵩んで到底實現し難いから已むを得ず中止した。若し東京に之を持ち行き、適當の方法で出版することが出来るならば、一切を任せてよいとの依託を受けて歸つたのである。

然るに近年澁澤敬三子爵が特に漁村經濟史の爲に研究所を經營せられ、且つ相當大規模の下に史料の蒐集をも始められたる由を聞き、此の宇和島吉田兩藩漁村經濟史料の出版方を相談したる處、同氏は快く之を引き受けられた。依て私は早速史料の整理に取り懸り、法政大學卒業後澁澤子爵の研究所に勤務中なる伊豆川淺吉氏を助手として、史料中の文書を分類し、且つ其の文字を校訂し、又語彙の書き出しをも試みたる後、全卷に對する解説

をも加へ、日本經濟史の水産史部門に於ける特殊史料として、之を學界に送り得ることになつたのである。  
此の有益なる漁村經濟史文獻が今日幸にして學界に送られるに至つたのは、兵頭氏の愛學心と、本書出版に對する澁澤子爵の厚意と、原稿整理の勞を取られた伊豆川氏の努力に負ふものであることを特記して、其の功績を後代に傳へたい。

昭和十三年八月

小野武夫識

## 解説

本書が今度出版せらるゝに當り其の内容を三分し、宇和島藩漁村經濟史料を其の上巻とし、之に附するに宇和島藩内四ヶ村の漁政取調書を以てし、下巻には吉田藩漁村經濟史料を收め、更に外篇として宇和島吉田兩藩の漁具圖並に其の説明を收むる事にする。

先の第一に宇和島藩の史料に就て見るに、古きは寛永廿年より、新しきは明治三年に及んでゐるが、此の期間に於ける同藩漁村經濟の推移を考ふるに、寛永頃には單なる漁村取締に關する布達書が多い。例へば寛永廿年編纂の那鑑には「藩より漁村内の網株に對して配付した網代は、其の網主の専用に屬するが、配付餘りの云はゞ將來に對する豫備の網代即ち公儀網代（別に葉網代ともいふ）に就ては地網（地元漁民）旅網（他村漁民）共に入會勝手たるべし」としてある。又船荷を積む場合には關係浦々の庄屋が船荷の種類數量を文書に認めて渡し置き、最後の浦の札頭（諸鑑札を取扱ふ庄屋）は右文書と共に此の船荷を吟味し、分一銀と稱する入港税を徴收すべしとし、更に又浦中に非常事變が起つたならば物組中の者が札頭と相談の上之を適當に處理すべし等々のことが散見



する。

其の後正徳年間に至れば、此の地方漁村内に経済的變化が著しくなつたやうである。漁業者が網代を買入したり、賣買したり、或は又漁業者の他郷退轉者を防止しようとした掟が頻りに見ゆる。即ち正徳六年の網方控には網株に附屬してゐる網代の質入賣買は之を禁止することとし、又元網（藩中最も古くより使用し來りたる鑑網）の持主は其の村を退轉する事なきやう古來の法度を守るべしとしてゐる。此の元網は此の地方に於て最も古き歴史を有するものであつて、新網所有者よりも其の権利が強く、それだけ藩でも之を重要視してゐたものである。左れば藩では網漁業を新に出願する者ある場合には、在來漁業者達の障害にならぬ程度で之を許可することにして、漁民仲間の秩序を維持する方針を採つたのである。

然も以上の如く、藩が古き由緒ある元網方を保護しようとした結果、却つて時日の経過につれて元網方の勢力を過度に増大せしむることとなり、現に天保三年の定書の文言には元網方の行動もすれば横暴に流るゝにより、藩が其の勢力を抑へようとしたる意志が現はれて居る。即ち個々の網株に附屬する網代に大小不同があるのは漁民の生活を不平等ならしむる原因であるから、之を矯正する爲に縱令元網たるものと雖一ヶ所以上の網代を所有することは出来ないこととしたのである。

又同年の定書中には一層注意すべき事項が記されてある、即ち庄屋や浦役人の所持する網株を以て他人に漁業を營ませ、其の使用料として漁獲高の一割を收得する者もあるが、斯ることをなさうとする場合には其の旨を逸

く當該役所に伺ひ出づべしと令した處から見れば、網株の貸付即ち漁業權の資本主義化も此の頃に至り若干程度迄發達し、藩主が之を承認せんとしたものゝやうである。之を彼の往年の網代の賣買は素より、質入等迄絶對に禁止した遣り方に比すれば、其の間に於ける時勢の推移が明瞭に窺はれるのである。

漁村生活が斯く複雑化し來る一方、藩に於ても漁村人口の増加に連れて新規漁業者の出願を許可する方針を取り、現に天保六年には鰯網三帖、同七年には鰯網一帖、同八年には鰯網一帖、同十年には鰯網一帖、同十一年には鰯近附網一帖を許可してゐる。斯く年を逐うて漁業者が増加するに至れば、漁場が狹隘を告ぐるのは當然のこととて、遂に安政四年以來沖論即ち漁場争議が此の地方に展開さるゝに至つたのは注意すべきことである。

尙明治年間の史料としては地方廳が舊宇和島藩領たる南宇和郡の内海村、西宇和郡の伊方村、同町見村、同三崎村の四ヶ村に對し舊藩時代の漁業に關する尋問に對しての回答記録たる漁業免許に關する事項、水族蕃殖保護に關する事項、漁業取締に關する事項、漁業者の負擔に關する事項、漁場入會水面專用に關する事項、區劃漁場に關する事項、漁場論争の裁定に關する事項、漁業者保護に關する事項の七項目を収録してある。明治時代に遺存せるものから徳川時代の漁業慣習を調査するものに有益なる史料である。

次に吉田藩の史料に就て見るに、大體は宇和島藩と同様の経過を辿つてゐる。即ち郡鑑元和二年の條には、魚荷や網代の取締に關するものが見え、同萬治二年には浦役所帳簿に登錄してある網株を廢絶させてはならぬとのことが見え、又享保十二年には網元と網子との間に於ける分配率其の他の關係を定めた文書も見える。斯して出

來得る限り漁民生活と其の經營の上に取締を加へつゝ元網方の營業妨害にならぬ限りは新網の増加をも許すの方針を取つたものゝやうである。

更に又家柄の古い網主が困窮に及ぶやうなことがあつても、其の稼業を廢することなきやう浦役人の仲介により他から資金を融通して再興を圖つてやつた例もある(寛政七年五月)。又文政二年には網一帖と其網株を永代に賣渡す旨の文書が見ゆるのは、網株賣買に對する藩の嚴重なる取締あるにも拘はらず、實際には賣買されたものであることの實情を示してゐる。天保九年四月蔣溯浦組頭十左衛門某が金三十兩を藩に献上して從來の網代以外に網代一ヶ所を新に貸與せられた記事は、同地方の浦方が貨幣經濟化への進展の一面を物語つてゐる。斯の如き傾向の中に立つて實力ある漁業家が年と共に漸次資本家的勢力を振ふことになつてから、網元と網子との間に屢々分配其の他の事由により争論を起し始めたのは當然であらう。

第三に外篇に収録した兩藩漁具圖竝に其の説明文は明治十五、六年頃に於ける舊兩藩の鯉釣、桵寄諸魚釣、一本釣、竿釣、配繩、による網、大敷網、鰯網、鱒網、蝦子網、鱈網、鯖網、手操網、飯網、鯉網、八田網、打網、珊瑚網等に關する實物の解説であつて、本書中に収録した文献と之を併せ見るによつて其の實證的智識が得らるゝのである。

x

要するに、上記三部より成る兩藩の漁村經濟史料は藩主の布達書類が大部分を占めて居る爲、一見政治史法制

史料たるの嫌がないではないけれども、然も此の史料中に含まれたる兩藩海岸地方に於ける徳川三百年間の網代の入會慣行、在來漁民の保護、新網漁民の生活保證、兩者葛藤の調停、沿岸舟航の監督竝に課税に關する統制、更に又貨幣經濟制度發達の影響を受けたる後、漁民仲間に行はれた網株と網代の賣買買入に關する記述等は向後の漁村經濟史研究者に取り其の利用性が頗る多くして、有益なる文献であることを立證してゐる。

語彙

本書に収載した史料中には、宇和島地方特有の漁村用語があつて一般讀者には了解し難いものが少なくないやうに考へられる、依つて難解と思はれる語彙を拾つてこゝに書き出して置くから、本文讀過の際の参考にせられたい。

結出網 元網(後出)につき定敷を限つて許可せられたる網  
葉網代 許可せられたる網に屬せざる漁場、即ち配付餘りの漁場をいふ、古稱は公儀網代、後に葉網代又は除網代  
裸廻し 小網は船一隻を以て陸から沖へ出で廻つて又陸へ歸つて魚を取り圍む、これを裸廻しといふ、尤も語源は、遠淺の漁場では舟を用ひず裸體のまま海へ入つて網を廻す故これより來たといふ  
番網 催合網即ち共有網  
番魚 たいし(後出)の手當として遣す魚  
濱狩 濱稼ぎ

高引 曳きあげた鯛の中から手傳手間に來た者に遣す分を見積つて引くをいふ  
村君 往古は網主、中古より網曳子を指揮する者を稱す、山にて指揮するを單に村君、沖合にて指揮するを沖村君といふ  
村組 村君に同じ  
請網代 一定額の請銀を納むることとして請ける網代をいふ  
除網代 公儀網代(前出)  
黒み 魚付の爲の林などをいふ  
前網代 吉田藩では控へ網代といふ、網株に附屬する網代を指す、然し又一つの網代に二つの網が來た時何れが前網代か、即ち先取權は何れにありやといふ場合にも用ひられる  
歩越 歩行越とも書く、陸路越のこと  
札頭 諸鑑札を取扱ふ者にして庄屋の内より兼務す  
札下 札頭なる庄屋の支配下か  
古網 結出網の内古く許可された方を稱す。諸網の中元網が最古のもので次に結出網が許可され、その結出網の新古を區別した時の稱  
小廻 或一定の浦から某々の土地へ船を廻す時遠きは大廻り近きを小廻りといふ

貳分もの 他國網が來て漁をする場合五分一以外に漁獲物の十分の二を天引する、漁場使用料か  
干加 ほか、魚類の干して肥料となるもの、總稱、鯛の干加が最も廣く製造された  
大引繩 大網の中先端の大目の網をあむ繩  
網子 網主に附屬してゐる網曳子  
搔鯛 鹽漬にした鯛  
家督 網家督を指す  
關網代 返上したる網代にして、未だ一定の網に許可せられてゐない網代を指す如くである  
海平 海平山平等の平はその側面といふ意に用ゆ、又良漁場といふ意もあり  
寄網 他藩又は他村浦より來る網  
旅網 寄網に同じ  
玉取り 大網が鯛を曳きあげた際、それを大擔を以てすくつて小船へ移すこと  
たいし 網子の中の當番の者の事をいふ、其仕事は例へば雨が降れば船の上の網にコモを覆ふとか、船の中に水が溜れば汲み出すとかいふ仕事である

小内 小職の漁民、尤も浦方在方の區別なく、一般に個々の者共を小内どもと云ふ  
合力銀 補助金  
揚株 返上せし株、廢業株  
網仕 網師、網主  
網旦那 前に同じ  
菜魚 副食物などとして、引上げたる魚獲物の内から貰ふ魚さびる 善悪混交の中から悪を除き去るをさびおとすといふ  
これから來たものか  
水魚 生魚  
尻付網 次に述べる尻付小網の略、又單に小網ともいふといふ  
尻付小網 鯛大網には一帖の小網を附屬することを許す、其稱なり  
しらみ、なだら しらみとは暗夜に見える魚群、なだら(又なだれ)は月夜に見ゆる魚群  
百姓網 庄屋や組頭などは必ず網を持つて居り、それは又世襲的である。これに對し臨時的に其の地の百姓に許された網を百姓網といふ。入會漁場にて使用する

引出網代 新に発見した網代  
 備合銀 共有銀  
 備合株 共有株  
 目關 目の密なる網  
 元網 又本網、藩中最も古くより使用する所の鯛大網株にして、新に營業許可されたる結出網等よりも權利稍厚く、專

用の漁場を配付されて居り、又入會漁場に於ては漁場の先  
 取權あり  
 清明 季節の稱  
 居る浦 他よりの入漁者には豫め領内便宜の地に居留場を定め置かむ、此の居留場を居る浦といふ

宇和島藩 吉田藩 漁村經濟史料目次

はしがき……………1頁  
 解説……………1  
 語彙……………6

上卷 宇和島藩漁村經濟史料……………1

史料番號

一	寛永廿七年七月廿三日
二	正徳六年二月
三	同 六年二月廿六日
四	文化六年八月
五	天保三年二月
六	同 三年三月廿三日
七	同 三年七月
八	同 三年七月

九	同 三年七月
一〇	同 六年四月
一一	同 六年五月十二日
一二	同 六年七月
一三	同 六年九月
一四	同 六年九月
一五	同 七年五月
一六	同 八年八月
一七	同 八年九月

八 同 八年九月  
 九 同 十年四月  
 一〇 同 十一年四月  
 一一 同 十三年八月  
 一二 同 十三年十月十四日  
 一三 同 十四年八月十日  
 一四 同 十五年正月  
 一五 同 同 十六年六月七日  
 一六 弘化四年六月  
 一七 同 四年十一月  
 一八 同 五年二月  
 一九 嘉永二年四月  
 二〇 同 二年四月廿九日  
 二一 安政三年九月十四日  
 二二 同 三年九月  
 二三 同 四年二月  
 二四 同 四年二月  
 二五 同 四年二月廿四日  
 二六 同 四年二月  
 二七 同 四年六月十八日  
 二八 同 四年七月二日

二九 同 四年十二月十日  
 三〇 同 六年二月  
 三一 同 六年五月一日  
 三二 同 六年六月一日  
 三三 同 六年十二月廿日  
 三四 同 五年四月廿四日  
 三五 同 同 十六年十二月十日  
 三六 慶應二年 月  
 三七 同 二年 月  
 三八 同 二年三月  
 三九 同 三年三月  
 四〇 同 三年三月廿四日  
 四一 同 四年三月  
 四二 同 四年四月  
 四三 同 四年十二月十八日  
 四四 同 四年十二月廿日  
 四五 明治三年正月  
 四六 同 三年 月  
 四七 同 三年二月廿七日

附錄

宇和島藩四ヶ村漁政取調書

南宇和郡内海村調  
西宇和郡伊方村調

下卷 吉田藩漁村經濟史料

一 元和二年十月  
 二 萬治四年正月  
 三 寛文三年五月一日  
 四 同 五年四月二日  
 五 同 五年八月廿二日  
 六 同 六年四月廿日  
 七 同 六年 月  
 八 同 同 年 月  
 九 享保十二年七月廿六日  
 一〇 延享二年六月  
 一一 寶曆四年二月五日  
 一二 同 四年三月  
 一三 同 四年十二月  
 一四 明和九年二月

一五 寛政元年十月廿三日  
 一六 同 七年五月日  
 一七 同 七年五月十一日  
 一八 同 八年四月十日  
 一九 同 八年四月十日  
 二〇 同 十年二月  
 二一 享和二年九月廿八日  
 二二 同 四年正月廿八日  
 二三 文化三年三月十五日  
 二四 同 九年三月  
 二五 文政二年正月  
 二六 同 二年十二月  
 二七 同 三年九月七日  
 二八 同 七年二月

西宇和郡町見村調  
西宇和郡三崎村調

元	同	七年七月
三	同	七年十二月廿四日
三	天保五年八月	
三	同	六年七月廿九日
三	同	八年二月九日
三	同	八年八月十日
三	同	九年四月
三	同	九年四月十三日
三	同	十一年八月
三	同	十四年八月
三	同	十四年六月
三	弘化三年	月
三	嘉永元年七月一日	
三	同	三年二月廿一日
三	同	三年十二月
三	同	四年正月
三	同	四年二月廿三日
三	同	四年四月一日
三	同	四年六月

元	同	四年六月
三	同	四年八月
三	同	四年十月十三日
三	同	四年十月十三日
三	安政元年二月十九日	
三	同	元年六月廿三日
三	同	元年七月七日
三	同	元年七月七日
三	同	元年七月十一日
三	同	二年正月十一日
三	同	七年三月五日
三	文久三年五月廿五日	
三	明治三年正月廿七日	
三	同	三年三月七日
三	同	三年四月廿八日
三	同	四年四月廿五日
三	同	五年
三	同	六年八月

外篇

漁具繪圖及漁撈解説

項目の上のローマ数字は原史料より採録して本書の巻末に収載した漁具繪圖の番號と對照する爲の番號である。因みに原史料には多數の漁撈繪圖が載つてゐたが、本書には學術的に參考の價値ある漁具に重きを置いて採録することとした。

1	第一	鯉釣船
2	第二	餌取網
3	第三	鯉魚釣(圖略)
4	第四	鯉釣の餌捕網
5	第五	鯉釣の餌を捕る圖(圖略)
6	第六	右 同(圖略)
7	第七	鯉を釣る圖(圖略)
8	第八	杖寄諸魚釣
9	第九	一本釣(圖略)
10	第十	鯉釣(圖略)
11	第十一	あぢか、すま、よこばの圖(圖略)
12	第十二	すま釣、横輪釣、目近釣

6	第三	配繩
7	第四	配繩拾遣
8	第五	による網
9	第六	による網(こしき網)
10	第七	大敷網
10	第八	右 同
11	第九	大敷網引上げの圖(圖略)
11	第十	鯛網船
12	第十一	鯛網つかひの圖(圖略)
13	第十二	鯛網
14	第十三	鯛地引網
15	第十四	餌床鯛捕獲網
16	第十五	鯛網
17	第十六	鯛網(圖略)
18	第十七	鯛子網
18	第十八	鯛立網
18	第十九	鯛地曳網全圖
18	第二十	鯛地曳網立て懸けの圖(圖略)
18	第二十一	鯛地曳網立切り魚を待つ圖(圖略)

19	第三	駿地曳網にて魚をとる圖(圖略)
20	第三	磯内引網
21	第三	蝦子打網
22	第三	鱸網
23	第三	手操網
24	第三	飯網
25	第三	鯨網
26	第三	鯨網を敷し體(圖略)
27	第四	八だ網
28	第四	鯛刺網
29	第四	鱸懸網
30	第四	目近網
	第四	ぶり手操網
	第四	鱸網

31	第四	はりメ網
32	第四	打網
33	第四	餌取網
34	第四	好網
35	第五	飯網(圖略)
35	第五	かぐら山にて網を巻き寄せる圖(圖略)
35	第五	鯨抄(圖略)
35	第五	鯨突
35	第五	鰯突
36	第五	珊瑚採網の圖(圖略)
	第五	珊瑚採の圖(圖略)
	第五	右同(圖略)
	第五	珊瑚生立の圖(圖略)

宇和島藩 吉田藩 漁村經濟史料目次終

上卷

宇和島藩漁村經濟史料



歩越礼、所蒙  
調、葉網代、札

郡 鑑

一 上灘分大洲領へ生魚にてかつぎ歩越、札頭庄屋何魚  
敷何程と野田、東多田、伊方越御番所へ切手遣、其  
敷を御番所にて改通、御算用極之時分其添切手此方  
差上可被申候、尤分一銀は書付渡候諸魚之直段  
を以、夫々直付にて銀當坐く、に札頭庄屋方へ受取  
書、算用時分無滞差上可被申候事

一 船に積荷何程、此浦より此船に積候と積始之浦之  
庄屋より一枚に書付、其紙の末々次々何の浦にても  
書付名判致船頭に相渡、積仕廻申所にて右之書付ひ  
かへ船頭致吟味、惣都合何端帆何程之下切手遣分一  
銀上可被申事

一 旅網主付不申網代又は葉網代にては地旅共に入相  
に魚引可申候、一番網之義は魚見付次第網置き始  
め次第く、に跡網置可申事

一 浦中諸事出入候は、惣組中札下庄屋共打寄随分致  
吟味、札頭相談之上にて相濟可申事

一 村君百姓中組合に仕互に請立置、登人も爲脊申間  
敷候、若走候は、其所之庄屋は不及申札頭共可  
爲越度候、訴訟之事候は、地方に付候義は郡奉行  
衆へ申出候共、此方には浦方之事可申出二事

一 他國より參候釣船之者共諸魚釣ため積荷にて分一改  
受取可申候、若釣ため生魚に賣候とも分一改受取可  
申候、子細は釣ため候生魚皆々爰元にて賣候得ば、  
御公儀無御役に釣船に成候に付扱如、此に候事

一 地旅船に荷物積出時、船頭共々札頭庄屋共より可  
申渡、義は、從御公儀出候御札佐田にては平右衛  
門、日振にては久左衛門方へ相渡可申由可申渡二  
事

一 佐田、日振へ申渡、諸廻船出船之時荷物書付御札改  
請取、船と札前之荷物引合、相違不審之船候は、荷  
役させ、荷物違の義に候は、此方へ注進可申事、  
右御書出之通、尤諸魚之直付其外御掟の品々儘に奉  
得、其意候面々書取受申候、則札下へも具に可申渡  
候、萬事越度仕出候は、如何様とも曲事可被仰付  
候、依て爲後日一如、件

寛永廿年未七月廿三日  
御町問、善右衛門 南君五右衛門 奥浦久五郎 白浦次  
助 法花津新藏人 有太刀孫右衛門 朝立五助 二及



忠兵衛 吉網代仁兵衛 八幡濱宇右衛門 伊方市兵衛  
三崎次郎助 三机太郎左衛門 佐田平右衛門 二名津  
藤藏人 磯崎源兵衛 九島久太夫 三浦彌兵衛 遊子  
清左衛門 北灘甚左衛門 下灘忠兵衛 内海久左衛門  
外海惣左衛門 沖島市之助 日振久左衛門 鶴來島彌  
二衛門

鬼生田主計様  
鈴木次太夫様

網方掟寫 (西字和郡大久浦、同四ツ渡浦  
同三机浦等より同標調出)

一 網代は其浦々の家督たりといへども、依時節其所  
より諸網の仕出於無之は、古來より他浦他村他所  
の者共も網仕出候得ば、當然關網代之内預け置候所  
網相止候ても網代は其者の家督之様仕成來候者共も  
有之候由、然則其浦の家督減じ追々衰へき事候條、  
自今以後是等之網代は其浦々を相返候様可被申  
付候、然共此節迄相續仕來候網は各了簡可有之  
候事  
一 古來の元網退轉無之様、如古法百姓網を第一に

存、庄屋、村君可精入儀專要に候、且又浦々に控  
來候網代、自分相對之定等并質入、賣買堅令停止  
事

一 浦々元網之内退轉網之網代、或除網代、引出之網代  
にて、何物によらず網之仕出望候は、其所各吟味  
之上被申付、相止候節は前體に可被返置候、勿  
論除網代にて地旅寄網致漁事候は、貳步物取立  
差上候様可被申付候、然共請網代に申付可然分  
は、各了簡次第之事

附り、居る網代に不拘して網仕出度望之者於有  
之は、依其所柄可被申付事

一 網遣方之義、古法有之といへども一致に無之於漁  
場、及爭論漁事之障有之由相聞不届之事候、一分  
之利欲計を不存、何れの網も成立候様可相心得  
旨、庄屋、村君共急度可被申付候、此以後我儘之  
仕形を以、漁事を妨候族有之は曲事可申付事  
一 浦々網遣様之義、彌古法之通夫々に仕出置、網附の  
網代にては前網を遣、其外は地下中入會に可被申  
付事

附り、他浦之寄網は地下網之跡可爲先勝事  
一 族網は何の浦にても寄網之可爲跡網候、併居る  
浦は格別之事候間、先規相極候通其前々の跡網可

被申付事

附り、吉田領の網と出合候節は、何之浦にても  
可爲前網事

一 吉田御領之網、御領分參候て網遣并に五步一等之  
義、前々の通可相心得候、將又御領分之網彼方々  
參候ても右同斷、尤法外成義不致様急度可被申  
付事

右條々舊章を考此度申付候條、被得其意堅相守候  
様可被申付候、自然格外之義有之に於ては至其  
時裁許可有之者也

正徳六丙申年二月 老中  
豊田丈左衛門殿  
松末 李兵衛殿

三

定

一 今度網方御掟、別紙御書出之通堅可相守候、若違  
犯之於有之は急度曲事可申付事  
一 漁事は浦方第一之家業に候得ば可精入事專要に候  
然共一分之利欲を恣にして、他の網を對し聊不可  
致邪間候、兎角いづれの網も成立候様可相心得

候、自然格外之義於有之は可申出、吟味之上裁許  
可申付事

一 銘々結出網計に精を入、百姓網を不可致疎候、  
若可及退轉網も候は、庄屋、村君働を以相續  
候様可致事

一 小網之義、前々の通元網をあるし不申内は勝手次  
第之事候、然共網家督無之者には小網爲仕間敷事  
一 浦々の網高に限有之様心得違候所も有之由相聞候  
先年之有網全格儀には不成事候、場所によりては  
過不及有之候間此旨を存、新網望之者於有之は  
有弊に可申出、自然當時之網師共妨に相成候子細  
も候は、吟味之上裁許可申付事

附り、網に可掛品有之は、新古之無差別當然  
之有網え割付可申事

一 網遣ひの義、前々より定雖有之、依浦々は私之  
仕形有之に付ては、於漁場度々及爭論漁事之  
障有之段相聞、不届之事候、向後は前網代たりと  
も、外之網置付掛網を取候は、無異議爲曳可  
申事

一 百姓網に組合候網子共之内、元網を離れ一分の働  
いたし、元網の障に成候族有之旨相聞候、不届に有  
之候、以來庄屋、村君聞届無之者は元網を不離、

水魚

百姓網相續之儀を第一に可<sup>レ</sup>致候、自然我儘申者候は、可<sup>レ</sup>申出<sup>二</sup>事

一先年網代改以後、引出網代出來候は、時々申出<sup>レ</sup>べき筈之處、近年は引出之訴無<sup>レ</sup>之候、不<sup>レ</sup>隱置<sup>二</sup>可<sup>レ</sup>申出<sup>二</sup>候事、浦により悪き前網代を扣網には、了簡も可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之事

一除網代にて地旅寄網引立候水魚の内にて、貳歩物相改候儀漁場にて紛無<sup>レ</sup>之様念を入、庄屋、横目方に帳を拵<sup>レ</sup>置き、時々其網主又は村君に判形致させ、銀子を取立庄屋添狀に而、月々可<sup>レ</sup>差上<sup>二</sup>事

一貳歩物取遣り之義は他浦の寄網を限<sup>レ</sup>し、其所中之網は取遣仕間敷事

一吉田御領之網此方へ參、漁事仕候は、先規の通其引立之水魚、たとへば魚拾艘有<sup>レ</sup>之候は、貳艘は網代之貳歩物に請取、殘八艘之内にて壹艘六合五歩一水魚に而其浦え請取置、殘分網主居浦え取戻り候様可<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>致候、併其水魚此方にて賣候共勝手次第之事候、右請取置候五歩一分は、庄屋、横目相談之上相場次第賣拂、代銀差上可<sup>レ</sup>申事

一浦によりて吉田御領の浦え申合、網遣押合に致所も有<sup>レ</sup>之旨相聞候、其浦斗りは相互之事にて可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之候得ども、御領内之網寄つどひ候時は外網之障に成

候間、向後自分之定堅致間敷事

一結出網仕候者共、村君并網子等に他國者雇候事彌以念を入、其所之庄屋手形尤寺手形見届可<sup>レ</sup>申候、當分之日雇たりとも烏亂成者差置申間敷事

附り、村君并網子雇候義、一分之勝手を存、外之障に成候仕形有<sup>レ</sup>之間敷事

一從<sup>二</sup>他國<sup>一</sup>入込候魚もらひ共別而可<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>念候、其者之往來手形并寺手形見届、儲なるものにて所の爲にも成り候は、可<sup>レ</sup>差置<sup>二</sup>候、身元儲なるものにて候とも用所無<sup>レ</sup>之者は差置申間敷事

一從<sup>二</sup>他國<sup>一</sup>入來候釣舟は、御領内にて居る浦を極引付出置候而、舟壹艘毎に印相渡置候間、印無<sup>レ</sup>之釣舟は吟味之上粉舟にて候は、追出可<sup>レ</sup>申候、總て浦々無<sup>レ</sup>所用<sup>二</sup>烏亂<sup>一</sup>之滯船候は、是又逐<sup>二</sup>吟味<sup>一</sup>早々出船候様可<sup>レ</sup>申付<sup>二</sup>候、然といへども海上風波難<sup>レ</sup>凌節は可<sup>レ</sup>致<sup>二</sup>用捨<sup>一</sup>事

一地旅商人他領え取越候諸魚歩行越之義は、前々の通り札改方より何魚何程何村誰越候と切手相添、東多田、野田、磯崎其外御境目御番所え納させ、歩一銀は時々札改方へ受取置算用無<sup>レ</sup>滯可<sup>レ</sup>仕候、尤右之切手月々御番所より御郡所え納候事

一諸魚引立五歩一井魚之大小寸尺、庄屋、横目、普紙

之上相改といへども彌以入<sup>レ</sup>念可<sup>レ</sup>申事

一諸廻船諸魚積立之節、其浦にては荷半分にて外の浦え參積合候は、荷物積始候浦の庄屋、横目方より何荷物何程積出候と送狀差添可<sup>レ</sup>申候、積仕舞候浦にて前の書付に荷物引合、歩一銀請取下切手差出し出船札可<sup>レ</sup>申請<sup>二</sup>事

一他國船俵物其外荷物積參、此方にて諸魚積合度と望候は、入船改之時分、其品々船切手書出荷物積合出船の節は右積參候荷物何々積戻候段、下切手に書加出船札可<sup>レ</sup>申受<sup>二</sup>事

一地旅廻船出入之節、船中改之義前々の通、念を入候無<sup>レ</sup>之様可<sup>レ</sup>相改<sup>二</sup>候、自然子細も有<sup>レ</sup>之ば其船を留置早々可<sup>レ</sup>申出<sup>二</sup>事

一地旅廻船荷物積出の節、佐田日振にて札を納候義如<sup>二</sup>前々<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>申付<sup>二</sup>候、他國船始而參候船頭へは別而念入國法之趣可<sup>レ</sup>申聞<sup>二</sup>事

一他國米、大豆、雜穀類從<sup>二</sup>先年<sup>一</sup>一度々申渡候通、無<sup>レ</sup>斷入候事堅御停止候條、彌地下人共え此旨急度可<sup>レ</sup>申付<sup>二</sup>事

一流寄物前々之通時々訴出可<sup>レ</sup>申事

一從<sup>二</sup>前々<sup>一</sup>申渡候通船送之義、誰人にて候共引付無<sup>レ</sup>之候者船送堅仕間敷候、若其人によつて庄屋致<sup>二</sup>變

應<sup>レ</sup>候は、百姓共に押手不<sup>レ</sup>申付、手人を以て送可<sup>レ</sup>申事

附り、庄屋御用にて渡海の節は押手三四人に不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>過候、自分用にて出候は、辨當料相應可<sup>レ</sup>相渡<sup>二</sup>事

一浦々の義に付何によらず出入の儀出來候は、組合の庄屋共打寄吟味の上下方にて不<sup>レ</sup>相濟<sup>二</sup>義に候は、訴出可<sup>レ</sup>請<sup>二</sup>差圖<sup>一</sup>事

右條々從<sup>二</sup>古來<sup>一</sup>前奉行中追々雖<sup>二</sup>申付置<sup>一</sup>、猶又今度如<sup>二</sup>紙面<sup>一</sup>申渡候條此旨急度可<sup>レ</sup>相守<sup>二</sup>者也

正徳六丙申二月廿六日 松末 左兵衛  
豊田文左衛門

浦々 諸庄屋中  
横目村君中

文化六巳八月

一小網の義は元網をおろし不<sup>レ</sup>申候内は勝手次第之事、元網おろし候は、爲<sup>レ</sup>引申間敷事、尤網かぶ無<sup>レ</sup>之者

は小網等も爲仕間敷候事

附り、小網と申義はしろこ網、夜引網、ふり網、

ざこ引網等之事に有之候

一受網代之義、御浦古御直之網代に而有之候へば、拜

借御断申上候者は受銀 御上躰差上候事

一網代之義は内々に而相互にかしかり不<sub>レ</sub>相成<sub>二</sub>事、併

居浦に而は相談之上不<sub>レ</sub>苦義も御座候得共、御法に

而は堅相成不<sub>レ</sub>申候事

一沖合惠網之義、惠網に而すいすくひを致候者留め

申事堅無用之事

一新網仕出候者有<sub>レ</sub>之候時は、其網主より願書指上申

候得ば御浦方御役人様より、組浦御庄屋へ其所之元

網村君中え相障儀は無<sub>レ</sub>之やと再御吟味被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候

間、其時分元網中より新網被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候而は元網中え

相障申候に付、新網は御免不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>成下<sub>一</sub>候様、相障

趣は其時々元網村君中相談之上、模様之趣次第を以

御願申上候事、是等之義も御法之義に御座候御庄

屋より被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>候、則此度於<sub>二</sub>御郡所<sub>一</sub>被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>候由

一新網無<sub>レ</sub>據御免被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候に付、其段元網中え被<sub>二</sub>申

付<sub>一</sub>候は、先御免被<sub>二</sub>成下置<sub>一</sub>候、相障義も御座候得

ば其節御願申上候間、御訴容可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>成下置<sub>一</sub>候、此

段御断申上置候、再御願可<sub>レ</sub>申上<sub>二</sub>候

五

天保三辰年

奉願上<sub>二</sub>御事

所中

一鯉網一帖

右の通所方近年來に人數相増申候に付、古網取合せ仕

成漁事一度奉<sub>レ</sub>存候、然る上は所方一同凌方にも罷成仕

合奉<sub>レ</sub>存候、此等の趣不<sub>レ</sub>苦御義に御座候は、何卒願

の通御許容被<sub>二</sub>仰被<sub>二</sub>成下置<sub>一</sub>候へば、重々難<sub>レ</sub>有仕合に

奉<sub>レ</sub>存候、此段偏に奉願上<sub>二</sub>候以上

辰二月

外海浦横目

惣三郎

松澤 與市殿

大塚仁右衛門殿

西村 嘉助殿

近澤與五兵衛殿

大塚 萬兵衛殿

六

一鯉網一帖

岩水浦組頭所中

右浦近事追々人數相増候に付、爲<sub>二</sub>渡世<sub>一</sub>古網取合せ鯉網

仕成度旨願出被<sub>二</sub>相達<sub>一</sub>候趣致<sub>二</sub>承知<sub>一</sub>遂<sub>二</sub>吟味<sub>一</sub>候、處中

相障筋無<sub>レ</sub>之に付、願の通承届候間編漁に不<sub>レ</sub>相障<sub>一</sub>様

網遣可<sub>レ</sub>致旨可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>申聞<sub>一</sub>候以上

天保三年三月廿三日

郡所

遠藤太右衛門

松澤 與市殿

大塚仁右衛門殿

西村 嘉助殿

近澤與五兵衛殿

大塚 萬兵衛殿

岩水浦鯉網仕出の處、別紙の通被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>候間此段可

被<sub>二</sub>申聞<sub>一</sub>候以上

三月廿二日

外海浦庄屋

淳左衛門殿

姓名同断

七

天保三壬辰年七月

網方控

一退轉網之網代は可<sub>レ</sub>かゝし置<sub>二</sub>處、警者貳帖之内壹帖

致<sub>二</sub>退轉<sub>一</sub>、矢張貳帖前の網代を前網遣候族も有<sub>レ</sub>之

由相聞心得違之事に候條、急度相改候様可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>申

付<sub>一</sub>事

一古來之元網退轉無<sub>レ</sub>之様如<sub>二</sub>古法<sub>一</sub>百姓網を第一に存

庄屋、村君可<sub>レ</sub>精入<sub>二</sub>義專要<sub>一</sub>候、且又浦々に招來之

網代自分相對之定等并買入賣買堅令<sub>二</sub>停止<sub>一</sub>事

一浦々何ものによらず網仕出望候は、其所各吟味之

上可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>事

一地旅寄網除網代にて致<sub>二</sub>漁事<sub>一</sub>候は、貳歩もの取立

差上候儀古法に候處、浦に依り辨違も有<sub>レ</sub>之由相聞

候、自今以後急度吟味之上取立差上候様可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>申

付<sub>一</sub>事

一網遣方之儀古法有<sub>レ</sub>之といへども一致に無<sub>レ</sub>之、於<sub>二</sub>漁

場<sub>一</sub>及<sub>二</sub>爭論<sub>一</sub>、漁事之障有<sub>レ</sub>之由相聞不<sub>レ</sub>届之事に候、

一分之利欲計を不<sub>レ</sub>存何之網も成立候様可<sub>レ</sub>相心得<sub>一</sub>

旨、庄屋、村君共々急度可被<sub>レ</sub>申付<sub>二</sub>候、此已後我儘之仕形を以漁事を妨候族有<sub>レ</sub>之は、曲事可<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>事

一 浦々網遺様之儀、彌古法之通夫々に仕出置網付の網代にて者前網を遺、其外は地下中入合に可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>事

附り、他浦之寄網は地下網之跡可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>先勝<sub>一</sub>事

一 旅網はいづこの浦にても寄網之可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>跡網<sub>一</sub>候、する浦は格別之事候間、先規相極め候通其所跡網可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>事

附り、吉田御領之網と出合候時は何之浦にても可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>前網<sub>一</sub>事

一 吉田御領之網、御領分え参り候て網遺并五分一等之義前々之通可<sub>二</sub>相心得<sub>一</sub>候、將又御領分之網彼方え参り候而も右同斷、尤法外成義不<sub>レ</sub>致様急度可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>事

一 浦々庄屋、役人始内分令<sub>二</sub>困窮<sub>一</sub>、所持之網株自力にて仕出差支、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>止外方之者え爲<sub>二</sub>仕出<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>株料<sub>一</sub>高一步等取候義有<sub>レ</sub>之由、畢竟困窮之義是等者無<sub>二</sub>余儀<sub>一</sub>事に候得共、近來追々新網株願出、外方之者え爲<sub>二</sub>仕出<sub>一</sub>高一步等取候義、右之趣相心得違之事候條、向後無<sub>二</sub>余儀<sub>一</sub>貸株に致候分は時々伺の上各吟味

可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之事

但新網仕出候者自力無<sub>レ</sub>之、他貸を以仕出終には貸株之姿に相成可<sub>レ</sub>申、是等之處篤と吟味可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之事

一 浦々網付之網代不同有<sub>レ</sub>之様相聞候、何れ之網も成立候様無<sub>レ</sub>之而者不<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>事故、各吟味之上なれや候様取計可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之事

右條々正徳年中申付候趣も有<sub>レ</sub>之處、辨違之族も有<sub>レ</sub>之由相聞候に付、改申付候條被<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>堅相守候様可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>候、此條々合之儀各了簡次第委敷可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>申聞<sub>一</sub>、自然格外之儀於<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之者至<sub>二</sub>其時<sub>一</sub>裁許可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之者也

多都味久之丞殿  
遠藤太左衛門殿

老中

一 網付網代不同有<sub>レ</sub>之に付、本網えは壹ヶ所宛前網代相渡、其余押合に可<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>事

一 新網之義は前網代不<sub>二</sub>相渡<sub>一</sub>、除網代之分一字新古網押合申付候事

但願番遺之儀も勝手次第尤兼て其旨達置可<sub>レ</sub>申事

右二ヶ條日振島井下灘浦之内申渡受浦分者格外之事

一 庄屋役人始所持之網株にて他人え網爲<sub>二</sub>仕出<sub>一</sub>、株料高壹步等請取候儀有<sub>レ</sub>之由、貸株之儀は無<sub>二</sub>余儀<sub>一</sub>入割有<sub>レ</sub>之候は、其旨親出可<sub>レ</sub>申、萬一無<sub>レ</sub>伺貸株等に取計候者於<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之は取上可<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>事

一 漁事者浦方第一之家業に候へば可<sub>二</sub>精入<sub>一</sub>事專要に候然共一分之利欲を恣にして他の網え對し聊不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>致<sub>レ</sub>邪候、兎角いづれの網も成立候様可<sub>二</sub>相心得<sub>一</sub>候、自然格外の儀於<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之は可<sub>二</sub>申出<sub>一</sub>吟味之上裁許可<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>事

一 銘々結出網計に精入百姓網を不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>致<sub>レ</sub>疎候、若可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>退轉<sub>一</sub>網も候は、庄屋、村君働を以相續候様可<sub>レ</sub>致事

一 小網の儀前々の通元網をおろし不<sub>レ</sub>申内は勝手次第の事候、然共網家督無<sub>レ</sub>之者には小網爲<sub>二</sub>仕間敷事<sub>一</sub>附、無願にて網仕出候者有<sub>レ</sub>之敷に相心得違之事に候、手操かせ網は些細網の是迄仕來の通、編網

に不<sub>二</sub>相障<sub>一</sub>様致<sub>二</sub>漁事<sub>一</sub>候義は勝手次第、其余之網は株無<sub>レ</sub>之而者仕出不<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>候間可<sub>二</sub>願出<sub>一</sub>、若株無<sub>レ</sub>之者網仕出候は、取上に可<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>事

一 浦々之網高に限有<sub>レ</sub>之様心得違之所も有<sub>レ</sub>之由相聞候先年之有網全く格儀には不<sub>レ</sub>成事候、場所によりては過不及有<sub>レ</sub>之候間此旨を存、新網望の者於<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之者有躰に可<sub>二</sub>申出<sub>一</sub>、自然當時網師共妨に成候子細も候は、吟味の上裁許可<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>候條速に可<sub>二</sub>申出<sub>一</sub>候事

附り、網に可<sub>レ</sub>掛品有<sub>レ</sub>之は無<sub>二</sub>新古<sub>一</sub>之差別<sub>一</sub>當然之有網え割付可<sub>レ</sub>申事

一 網遺の儀前々より定難<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之、浦によりては私の仕形有<sub>レ</sub>之に付て、於<sub>二</sub>業場<sub>一</sub>度々及<sub>二</sub>爭論<sub>一</sub>漁事之障有<sub>レ</sub>之段相聞不届之事に候、向後は前網代たり共外の網置付掛網を取候は、無<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>曳可<sub>レ</sub>申事、

一 百姓網に組合候網子共之内、元網を離一分の働いたし元網の障に成候族有<sub>レ</sub>之と相聞不届候、以來庄屋百姓網相續の儀を第一に可<sub>レ</sub>存候、自然我儘申者候は、可<sub>二</sub>申出<sub>一</sub>事

一 網代改以後引出網代有<sub>レ</sub>之候は、時々可<sub>二</sub>申出<sub>一</sub>管の處、浦に寄附無<sub>レ</sub>之心得違の事に候間以後速に可<sub>二</sub>申出<sub>一</sub>事

一 除網代に而地旅寄網引立候水魚の内にて、貳步等相

改候儀業場にて紛無之様念を入、庄屋、横目方に帳を拵置時々其網主又は村君之判形致させ、銀子を取立庄屋添状にして月々差上事

附り、本文の通前々より定有之處、惣而貳歩物差上候儀無之畢竟不レ尻の儀と相聞候、向後急度相守網付網代の外にて寄網致漁事候は、急度取立上納可致事

一貳歩物取道の儀は、他浦の寄網を限べし、其所中の網は取立仕間敷事

一吉田御領の網此方へ参り漁事仕候は、先規の通其引立の水魚たとへば魚拾禮有之者貳艘は網代の貳歩物に請取、殘八艘の内にて壹艘六合五歩一水魚にて其浦え取戻り候様可爲仕候、併其水魚此方にて賣候共勝手次第の事候、右請取置候五歩一の分は庄屋、横目相談の上相場次第賣拂代銀指上可申事

一浦によりて吉田御領の浦え申合網遣押合に仕所も有之と相聞候、其浦計は相互の事にて可有之候へ共、御領内の網寄つどひ候時は外網の障成候間向後自分の定堅仕間敷事

一、結出網仕候者、其村君并網子等に他國者の雇候事彌以念を入、其所の庄屋手形見届可申候、當分之賣用たりとも烏亂成者差置申間敷事

船札可申請事

一他國船儀物其外荷物積參、此方にて諸魚積合度と望候は、入船改の時分其品々宿切手書出、荷物積合出船の節者右積參候荷物何々積戻候段、下切手書加出船札可申受事

一他國米大豆雜穀類、從先年一度々申渡候通無斷入候事堅御停止候條、彌地下人共え此旨急度可申付事

一一流寄物前々の通時々訴出可申事

一從前々一申渡候通船送の儀、誰人にて候共引付無之船送堅仕間敷候、若其人によりて庄屋致變應候者、百姓の押手不申付一人を以送可申事、

附り、庄屋御用にて渡海の節は押手三四人に不レ可過候、自分用にて出候は、辨當料相應可相渡事

一浦々儀に付、何によらず出入の義出來候は、組合の庄屋共打寄吟味の上、下方にて不相濟義に候は、訴出可請差圖事

右條々正徳年中申渡候趣有之處、近來頼に相成候向も有之に付、猶又改申付候條此旨急度可相守一者也

附り、村君并網子の雇候義、一分の勝手通存外の障に成候仕形有之間敷事

一從他國入込候魚もらひ共別而可入念候、其者の往來手形并寺手形見届儲成者にて所の爲にも成候は、可差置候、身元儲と候共所用無者差置申間敷事

一從他國入來る釣舟は、御領内に居る浦を極引付出置候、且近來舟壹艘毎に印相渡置候間、無印の釣舟は吟味の上紛敷舟にて候は、追出可申候

惣而浦にて無所用一烏亂之滯舟候は、是又遂吟味早々出船候様可申付候、然といへども海上風波難凌節者可致用捨事

一諸魚引立五分一并魚の大小寸尺、庄屋横目相改といへども彌入念可申事

一諸廻船諸魚積立候節、其浦にては荷半分にて外の浦へ參積合候は、荷物積初候浦之庄屋横目方より何荷物何程積出候と送状差添可申候、積仕舞之浦にて前後の書付に荷物引合、歩一銀請取下切手差出し出

天保三壬辰

遠藤太左衛門  
多都味久之丞

浦々

庄屋中  
横目中

辰八月廿二日御浦方大塚氏御出役人中網仕中村君  
體押迄被召寄一被仰渡也

九

一浦々生魚主是迄所方差支無之候得者勝手に致來候所、此度吟味合有之左の通株銀相定候間改可願出

上四拾目  
中三拾目  
下二拾目  
生魚主株

一浦手商札所持の者共諸魚取扱定の事  
一上札干加仕來勝手次第  
一中札干加取扱同斷  
一下札諸魚取扱同斷  
但庄屋並網仕者は迄の通

其一切魚類取扱無用の事  
 一漁事の時分網子え分魚浦々區々趣相聞候、其時々一  
 宇濱揚四歩六歩に分け可取計事  
 附、業□魚の儀過分不ニ相散様重々締合可相定  
 事  
 一漁事の時分魚賣の者、數多有之趣相聞不ノ之事に候  
 以來其網付の外無用の事に候、右者獵場にて手傳等  
 致候者え者村君了簡次第の事  
 一干加計桶之義、兼て判付の分相用數旨申聞置候  
 處、不ノ之趣も有之歟の様相聞、猶又急度庄屋役人  
 心□付可申事  
 一諸魚御定直段の内左の分相改候間其旨可相心得事  
 大六匁  
 中四匁五分  
 小二匁  
 一鏝節  
 百挺に付八匁  
 十筋に付壹匁五分  
 一鏝節  
 一小鯛者火干壹斤に付壹匁三分  
 一催合銀以來左の通可ニ心得事  
 一干加類  
 一擡鯛始しらす類  
 豐俵に付壹分宛  
 豐石に付壹分より  
 右の通此度改申付候間、夫々分合相定候様重々心得可

被申聞候以上  
 辰七月  
 大塚仁右衛門殿  
 西村 嘉助殿  
 近澤與五兵衛殿  
 大塚 萬兵衛殿  
 別紙の通御沙汰有之候間、以後猥の儀無之様重々可  
 被申聞候以上  
 辰七月  
 大塚 萬兵衛  
 近澤與五兵衛  
 西村 嘉助  
 大塚仁右衛門  
 浦々  
 庄屋中  
 右夫々天保三壬辰八月二十二日御浦方大塚仁右衛門殿  
 手代之觸方兼役奥助殿御出、役人中横目中網仕中村君  
 釧押迄被召寄直々御書出御讀聞被仰渡者也  
 庄屋兵頭又左衛門出席

天保六未年  
 乍恐奉願上御事  
 網師中泊浦  
 喜兵衛  
 一網船元木二本  
 但目通り四尺余廻り壹本  
 五尺より五尺五寸迄壹本  
 右之通網船二帖年數相立、大に相破色々修覆候へ共最  
 早當年持は漁事方出来兼當惑至極に奉存候、御承知  
 被成下置候通近年來不漁にて自力に作替不得仕に  
 付、御時節柄奉恐入御義に奉存候へ共、何卒御立  
 山の内杉元木代上納を以て被下置候へば船造替、近  
 々漁事仕難有仕合に奉存候、不苦御義に御座候へば  
 御取成御慈悲の筋を以て、願の通御許容被成下置候  
 へば網相立重々難有仕合に奉存候、右の段宜敷様御  
 取成の程偏に奉願候以上  
 天保六未四月  
 中泊浦組頭  
 喜兵衛

右の趣願出申候、不苦御義にも御座候へば申出の通  
 御開濟被成下置候様、重々奉願上候以上  
 御浦方三人宛  
 一  
 一網船元木二本  
 但目通四尺余廻り壹本  
 五尺より五尺五寸迄壹本  
 右之通網船及大破候に付造替仕度、依て御山にて元  
 木代上納を以て杉如紙面被下置候旨、願出候趣致  
 承知一則相達置候處、近邊御山間引木の内目通り元數  
 共任有之、元木代上納を以網船木一掛分被下置候  
 段御開濟被成下置候間、此旨可被申聞候以上  
 五月十二日  
 森田三郎兵衛  
 松澤道之丞  
 大塚善右衛門  
 中泊浦 喜兵衛  
 一  
 一  
 外海浦淳左衛門殿

天保六未年  
奉願上御事

岩水浦組頭  
同 所中

一 鯛新網一帖  
右之通處方近年來追々人數相増申候に付、古網取合仕成漁事仕度奉存候、然る上は處方一同爰にも罷成仕合に奉存候、此等の趣不苦御義に御座候は、何卒願の通御許容被仰付被成下置候得ば、重々難有仕合奉存候、此段偏に奉願上候以上

未七月  
外海浦横目 惣太郎  
岩水浦組頭 忠左衛門  
外海浦庄屋 淳左衛門

大塚善右衛門殿  
松澤道之丞殿 (朱書願の通御聞濟有之候)  
森田三郎兵衛殿

一三

天保六未九月

一 鹽成浦中の網代、百姓中より此度新網一帖仕出度様

願出、處方及吟味候處すな所は強く差障様とも不  
相聞候付、願の通承届候、乍去及後年候ても何  
等差障義も有之候は、其節は取揚申付候、且又  
網造の義御定の通堅く相守候様可被申聞候  
右の趣夫々申付可被置候  
天保六未九月  
遠藤太左衛門  
武田仁右衛門

大塚善右衛門殿  
松澤道之丞殿  
森田三郎兵衛殿

一四

三机浦ノ内鹽成浦中ノ網代  
百姓中

一新網一帖

右之通仕出度旨願出候處、吟味の上差向相障筋も有  
之候は、差止可申候、網遣之義御掟の通堅く可相  
守者也  
天保六未九月  
遠藤太左衛門  
武田仁右衛門

鹽成浦庄屋  
菊地宇右衛門殿

一五

天保七申五月

一 修網一帖  
右は其方今度調義取に而仕出度旨願出、遂吟味候處  
相障筋無之に付願の通承届候、鯛漁に不相障様可  
致網遣者也  
天保七申五月  
遠藤太左衛門  
武田仁右衛門

九町浦庄屋  
安部傳左衛門殿

一六

天保八丙年願書口上書訴書  
口上覺

當村中より土州分浦々へ鯉出釣に罷出候節、釣高の内

大塚善左衛門殿  
松澤與市殿  
森田三郎兵衛殿

一七

天保八丙年  
乍恐奉願上御事

一 當御浦近年來人數相増、無家督者多人數に相成候  
處、外に働の手段も無御座漁事方斗専心掛出精仕  
候へ共、少々漁事にては平日暮方に差支多人數養

育も相成兼、當惑至極に御座候、右に付鱧網一帖仕出仕度何卒御免被<sub>レ</sub>成下、竝鱧網代當御浦扣ツテの鼻より船越鼻迄處中へ被<sub>レ</sub>下置候は、御蔭を以て春秋の渡世にも罷成、且は大網修復の助けにも相成重々難<sub>レ</sub>有仕合奉<sub>レ</sub>存候、不<sub>レ</sub>苦御義に御座候へば、可<sub>レ</sub>然様御取成被<sub>レ</sub>成下候は、御慈悲の筋を以て處中願出の通り御許容被<sub>レ</sub>成下候様偏に奉<sub>レ</sub>願候以上

天保八丙九月

船越浦處中  
同浦組頭

岩次郎

外海浦御庄屋  
淳左衛門殿

右の趣願出申候間御聞濟被<sub>レ</sub>成下候様奉<sub>レ</sub>願上候以上

外海浦横目 惣三郎  
同浦庄屋 順左衛門

大塚善右衛門殿  
松澤 與市殿  
森田三郎兵衛殿

一八

船越浦、中泊浦、近年來人數相増、無<sub>レ</sub>家督<sub>レ</sub>者共多渡世方難遊に付、鱧網一帖づゝ仕出度旨、竝網代の義も夫々願出被<sub>レ</sub>相達候趣致<sub>レ</sub>承知、差支向も無<sub>レ</sub>之に付鱧網の義は願の通承届候、網代の義は左の通申付候  
一春秋共鱧魚漁事仕候は、魚口網代初日内泊浦網遣に可<sub>レ</sub>致事

一二日目三日目は舟越中泊圃取にて前後相極可<sub>レ</sub>申事  
一四日目よりは順に代り合可<sub>レ</sub>申事

一諸漁事網代の義は是迄仕覺の通可<sub>レ</sub>致事

右の通申付候間鱧魚へ不<sub>レ</sub>相障<sub>レ</sub>様網遣可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>致、一方の利欲斗を不<sub>レ</sub>致何れの網も成立候様可<sub>レ</sub>相心得、自然我儘申出候者有<sub>レ</sub>之候は、鱧網株取上可<sub>レ</sub>申付候間、心得違無<sub>レ</sub>之様急度可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申聞置候以上

天保八年九月

遠藤太左衛門  
武田仁右衛門

大塚善右衛門殿  
松澤 與市殿  
森田三郎兵衛殿

四步 網子

一茶魚の義は、引立二十桶以上有<sub>レ</sub>之時は二桶網子、

一桶網仕

一同十桶より二十桶迄は壹桶網子、五合網仕、附り、六十桶以上相應溜り候節は、中魚に應じ時に見計を以て二桶三桶も余分に網子へ遣可<sub>レ</sub>申事、尤右魚は網子手元へ買取代物差遣可<sub>レ</sub>申事

一村君の者へは四步割合の外、五十桶引候時一人に付二合五勺宛、百桶引候時は一人に付五合宛、其余多分とも右割合にして遣可<sub>レ</sub>申事

一大染の節は、柏木代並大束シユロウ皮、大引繩、薬其余網付仕込の品々網主手元に而仕成可<sub>レ</sub>申事、尤素人手間の分は網子中より喰出立にして一字相掛り可<sub>レ</sub>申事

一漁事祈禱入用並焚寄松代、時に網子へ爲<sub>レ</sub>給候神酒或は飯米、其外網方要に付所々へ出役之節、修入用等四步六步割合、六步網仕四步網子相辨可<sub>レ</sub>申事  
一網船、手船繫修理並網取役、干修理等、一字網子喰出立にて仕成可<sub>レ</sub>申事

附、其余儀は一字右に准じ取計可<sub>レ</sub>申事  
右之通相定候條可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>其意候

一九

一鱧網一帖 天保十年亥四月

一鱧網一帖

鹽成浦組頭

與七郎

右之通仕出度旨願出、遂<sub>レ</sub>吟味候處相障筋無<sub>レ</sub>之に付願の通承届候、鱧網に不<sub>レ</sub>相障<sub>レ</sub>様網遣可<sub>レ</sub>致者也

天保十亥四月

遠藤太左衛門  
武田仁右衛門

三机浦庄屋

菊地宇右衛門殿

二〇

天保十一庚子四月

覺

一漁事の節魚歩分の義は、一字汕上にして左の通取計可<sub>レ</sub>申事

六步 網仕



天保十一庚子四月

御浦方

二

天保十三寅年願書

奉願上御事

一 駿近付網一帖

右之通近來沖合模様も宜敷御坐候所、是迄右株居浦に無御坐近邊魚寄候ても獵事不得仕立、依之私義一帖仕出度、不苦御義に御座候は、願の通御聞濟被成下度、右の段奉願上候以上

天保十三年八月

二宮淳左衛門

大塚善右衛門殿

賀來平兵衛殿

村上善右衛門殿

三

一 駿近付網一帖

外海浦庄屋

二宮淳左衛門

右は近來沖合模様有之處是迄右株無之に付、此度仕出度旨願出被相達候趣、致承知遠吟味候所網有之浦に口網代致用捨、其余差障向も無之に付願の通承届候間、鯛漁に不相障様網遣可致旨被申聞、此段申達候以上

十月十四日

星 彌一兵衛

武田仁右衛門

大塚善右衛門殿  
賀來平兵衛殿

駿近付網一帖仕出度旨被願出、則相達置候所、別紙の通御奉行業より被仰出候間此旨承知可有之候、尤鯛魚に不相障様重々網遣可致候、此段申達候以上

天保十三年十一月四日

加來平兵衛

大塚善右衛門

外海浦

二宮淳左衛門殿

三

天保十四卯八月

鹽成浦

與七郎

一 飯網一帖

右網仕出度旨願出被相達候趣致承知候處、則鯛方差向及吟味候處浦中差障向も無之に付、願出の通承届候間、鯛漁に不相障様網遣可致旨被申聞候、此段申達候以上

天保十四卯八月十日

星 彌一兵衛

武田仁右衛門

大塚善右衛門殿

加來平兵衛殿

菊地半藏殿

別紙の通被申聞候間此旨御承知可有之候以上  
月日

菊地半藏

加來平兵衛

大塚善右衛門

三机浦庄屋

菊地宇右衛門殿

二四

天保十五辰正月

一 鹽成浦中の網代小網此度大網に仕出度旨願出被相達、願の通大網株に承届候間此旨被申聞候以上

天保十五辰正月

星 彌一兵衛

武田仁右衛門

別紙の通御裁許有之候間此旨被申聞候以上

正月二十五日

菊地半藏

賀來平兵衛

大塚善右衛門

菊地宇右衛門殿

二五

天保 年六月

裁定状の寫

其浦の内鹽浦の畑の尻と申網代、伊方浦の者共網遣之節、九町浦なはば松と申網代と片手掛り之網代と申成、無理成網遣致候趣、既に此間も右様の網遣致双方共魚得取上不申趣、以ての外の事に付、兩浦境にて片手掛に相成候網代と網代改牒に其譯委細に記有之

右畑の尻網代と水戸突左右置附とも左の通の定に候間  
兩浦網出會之節は、右御定の外無理なる網遣は決て不  
相成候間、其旨網仕網子共へ可被申聞置候、尤九  
町浦より網乗出し不申節は、水戸突左右置附共其所  
之魚附次第に網遣及共不苦候得共、兩浦網出會の節  
は御定の通りの外は、少にても水戸突方角違候義は決  
て不相成候間、其旨相心得居候様可被申聞置候、  
此段申達候以上、猶以不都合之者共有之候は、御城  
下へ罷出相伺可申、御網代膝面を以て委細に可申候  
間、其旨分て可被申聞候以上  
昨日被申出候義、今日出勤之上網代帳見合申候處、  
左の通に相成居候間伊方浦別紙之通申達候間、此書狀  
早々可被相届候、此段申達候以上

天保

六月七日

松浦 源助

菊地市郎兵衛

九町浦

安部傳左衛門殿

伊方浦之内

豐之浦

辰巳向

一畑尻 袋寄一ヶ所掛引

但金山境より九町浦境迄之間水戸突穴井大谷見通し

九町浦

寅卯向

一なばへ松 袋寄一ヶ所掛引

但伊方浦境より申境迄立間水戸突瀬平見通し

右の通に候間、其旨網子中へも委細に可被申聞置候以上

二六

岩水浦組頭

所中

一銀四貫目

右の通網大破に付御願申上候處、御貸下被成下二儲拜  
借仕度、然る上は月五朱利足相加、來申暮より十ヶ年  
の割合を以元利共無滞返納可仕候、尤相應漁事等御  
坐候は、双割合に不相拘元銀納方可仕候、爲後日  
依て如件

弘化四年未六月

惣太郎

澤近忠右衛門

二宮淳右衛門

御浦方

御役所

二七

弘化四未年願書

奉願上御事

一銀三貫目

岩水浦網壹帖

一銀二貫目

同浦 壹帖

一銀三貫五百目

中泊浦 二帖

右之通大網修覆料御貸下被成下二度、御承知被成下  
候通無類の不漁にて、何分網仕出差支當惑至極奉存  
候、返納の義は如何成共御差圖の通漁事方に不拘、連  
印の面々より上納仕候間、格別の御吟味を以貸下被下  
候は、御蔭を以修覆等仕一統難有仕合に奉存候、何  
卒御慈悲の筋を以御開濟被成下置候様偏に奉願上  
候以上

未十一月

惣太郎

亮之助

澤近忠右衛門

二宮淳右衛門

御浦方

御役所

高の内岩水浦二帖は銀四貫目御開濟有之

十一月

二八

弘化五申年嘉永元年願書

口上覺

豐後國保戸島釣舟釣取候魚取歸り候節は、時々五分一  
銀相定帖面の仕出相納來候處、去未年より定五分一銀  
取立被仰付、則取立差出、深浦御番所より直御上納に  
相成申候處、右は當年より定五分一銀名目相願候て、  
御臨時の座へ仕出御勘定の節、處方の五分一銀と一處  
にして相納候様被成下二度、右の段御願申上候以上

申二月

二宮市右衛門

御浦方

御役所

二九

嘉永二丙年願書

奉願上御事

船越浦の内引船越大網繫場所無御座候て、甚以難遊仕候に付兼て存立波戸築立大網開來候所、荒灘の義にて御承知被成下候通及大破、右の儘差置ては大網繫場所難遊仕候様罷成當惑至極奉存候、右波戸修覆等仕度奉存候所、下地困窮の浦柄殊に近年來不漁續にて何分自力に修覆

御貸下被成

- 下置候様願敷奉存候、左候は、御陰を以て築立出來仕難有仕合奉存候、尤上納の義は月五朱の利足相添十ヶ年の御割合を以、不漁等に不拘年々無滯上納可仕候、此等の趣不苦義に御座候は、何卒願の通御聞届被成下置候様、偏に奉願上候以上
- 四月
- 船越浦 所 中
- 外海浦横目 喜三治
- 船越浦組頭 岩次郎
- 二宮市右衛門

御浦方御役所

三〇

船越浦より波戸爲修覆料銀札五貫目拜借の義願出、相達致承知候、無余義事には候得共此節不漁打續き網師中拜借余計願出、何分右等の所へ有合不申候に付、願書相下候間此旨可被申間候以上

嘉永二年閏四月廿九日

- 菊地市兵衛
- 賀來平兵衛
- 大塚善右衛門
- 二宮市右衛門殿

三一

御領中浦々新網之内、前々は網代付之網底有之候處天保度古來より之本網えは前網代壹ヶ所づ被相渡、其余は不殘御取上に被仰付候處、此度御吟味を以新網えも壹ヶ所づ相渡遣候間、此上漁事致出精候様可被申間候、此段申達候以上

安政三丙辰九月十四日

- 須藤段右衛門
- 井關又右衛門
- 比企藤馬
- 松澤 與市殿
- 横田儀兵衛殿

松浦 源助殿

別紙之通御奉行兼被仰聞候間、其旨御承知之上新網所持之者共え可被申聞、尤網代渡方の義に付新網所持之者ども相の日並之通御城下へ罷出、朝五つ半時御浦役所へ面付を以伺出候様可被申聞候、若病氣故障在之候は、網子之内頭立者壹帖前より兩人づ罷出可申、此段申達候以上

- 松浦 源助
- 横田儀兵衛
- 松澤 與市

尙以新網之内休株不届出、當時乗出不致網々も有之歟に相聞候、右等は御渡方差支候、追而乗出之節被相渡候様可被申聞候以上

三二

鹽成浦 (沖之網代) (くらかり) (三瀬) 阿部與七郎、金村 (伊助) 伊助

三一—三三

右三帖願番遣候

辰九月

御浦方

鹽成浦三帖之新網へ、前網代三ヶ所被相渡願番に網遣の管に申出置候、右三帖の内金松と申者網は乗出居、外二帖は未乗出無之趣右に付願番と申も定り兼候由に相聞へ、三帖乗出相捕迄は右三ヶ所の内何れ成とも金松望の場所前網代爲遣可申、三帖相捕候上は日番代共月代共申合次第に可致事と存候、疑惑無之ため此段申達候間、右浦新網所持の面々へ可被申聞候以上

辰十月十六日

- 松浦 源助
- 横田儀兵衛
- 松澤 與市

菊地宇右衛門殿

別紙通申來候間其旨御承知之上御取計可有之候、  
席に右紙面は御返脚可在之候以上

十月九日

菊地宇右衛門

阿部與七郎殿

三三

安政四年願書

口上覺

垣内浦

網子中

卯ノ暮より住吉西ノ鼻限り蝦網代御裁許の場所  
一、當浦家の前蝦網代の義、當浦に於ては垣内西の鼻より前住吉暮迄、網代差支無御座候様一同相心得罷有候所、當年に於ては岩水浦の網にて住吉ひら垣の内間にて漁事仕候、左候ては海横狭き所故當浦網に交申候間、此段宜敷様御裁許被成下置度重々御願申上候、此段宜敷様御取次御取斗被成下一度御願申上候以上  
巳二月  
垣内浦  
網子中

外海浦

御庄屋所

三四

口上覺

岩水浦垣内浦共此間内蝦漁事に相掛り候處、兩浦沖論仕、折節私義他出仕候、歸在否双方呼出委細承合候處垣

内分鶴の暮より岩水分住吉鼻を見通にて内は垣内浦にて漁事可仕存念、尤昨年御浦方御廻浦の節に右様被

二仰聞候様申出依て差留候趣、又岩水浦中分には御浦方より右被二仰聞候段無之承り不申旨に一同申出候、近年外海浦に於ては其浦々境引に漁事可仕旨御定被成下候に付、南手は岩水浦分故同浦に引候は不差支様相心得候段申出候、委細は御繪圖面御引合可被下候、同じ入江の内双方左右と浦違の所は此浦計に余には引合無御座候、海上境立の義は甚六ヶ敷御坐候故鶴の暮より住吉鼻へ見通し、夫より内は兩浦網隔日番遣に被成下候は、兩浦寄合不申、後世面倒も無御座候、左候は、關入にして當り候網を始一番に相定置、扱又岩水より罷出南手へ引、垣内より罷出北手へ引候時は、又々同様に寄集口論相止事無御座候、候て苦々敷奉存候、右様隔日に不被成下候ては自然と漁事の妨にも可相成候と残念至極奉存候、何も双方相立候様、尤此節引續漁事相掛候に付急々御裁許奉願上候以上  
巳二月  
外海浦庄屋  
二宮市右衛門

御浦方御役所

二宮市右衛門

三五

岩水浦垣内より蝦網遣の義に付、双方より申出候趣有之處取極候義は見分の上ならでは申建難く候得共、差向所は隔日遣又は番代にして双方論合無之様致すべき旨可被申聞候、此段申建候以上  
安政四年二月廿四日

松浦 源助

横田 義兵衛

松澤 與市

二宮市右衛門殿

三六

奉願口上覺

先達内より蝦相見へ、私共住吉鼻内にて漁事仕候處垣内浦より差留候に付沖論仕、今日御教導被成下置甚恐入申候、垣内浦より鶴の暮住吉鼻見通にして内は爲引不申候様申候に付、相尋候處去年御浦方より被二仰候様申張、私共は一向承知不仕候、領地引と近年被二仰付候上は入江の灘半分は岩水浦分の事故決て相

留り不申尤右鼻より内好参り候節は番替に夏迄漁事仕來右様の引合も御坐候、私共只今網遣不相成候様此後罷成候時は小内難遊仕重敷敷奉存候、何卒住吉鼻鶴の暮見通しより内にて漁事相成候様被成下置度何分宜敷奉願候以上  
巳二月  
岩水浦 百姓中  
五人組 甚太郎  
組頭 澤近忠右衛門

岩水浦 百姓中

五人組 甚太郎

組頭 澤近忠右衛門

外海浦御庄屋所

三七

外海浦の内岩水浦垣内浦兩浦より蝦網遣の義に付、兼て双方より申出候次第も有之差向處、隔日遣申付置候處、海は兩浦へ掛居候得共網代は太段垣内浦の網代に候へば、以來兩日垣内一日岩水網遣致候様申付候間其旨相心得可申候、此段可被申聞候以上  
安政四年六月十八日

安政四年六月十八日

須藤段右衛門

松澤 與市殿

松浦 源助殿

三八

岩水垣内浦帳網遣の義に付委細被<sub>二</sub>申越<sub>一</sub>候趣致<sub>二</sub>承知<sub>一</sub>、則相伺候處丁度被<sub>二</sub>申越<sub>一</sub>候通、兩浦共何れへ魚寄候共當番の方にて致<sub>二</sub>網遣<sub>一</sub>、非番方は不<sub>二</sub>出合<sub>一</sub>様無<sub>レ</sub>之ては後年面倒可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候間、前文の通相心得候様可<sub>二</sub>申聞<sub>一</sub>候以上

安政四年七月二日

松浦 源助  
松澤 與市

二宮市右衛門殿

別紙の通御奉行衆より被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>候間其旨可<sub>二</sub>申聞<sub>一</sub>候以上

六月十八日

松澤 與市  
松浦 源助

二宮市右衛門殿

三九

安政四年願書

奉<sub>レ</sub>願口上覺

一外海浦の義は兼て御承知被<sub>二</sub>成下<sub>一</sub>候通、一方は土州分にて釣漁の外は決て入相差支、元來外御浦々とは事相替難遊の場所柄に御座候處、近頃所に入相漁事被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>多く乗込甚難遊仕候得共、御免被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>候儀故差留候事相成兼、度々打寄唯々當惑而已申談相敬罷在申候、尤御領中所々より乗込色々の小網類或は瀬付の魚等取候得共、太段不案内の場より妨に相成候計にて十分の所務は無<sub>二</sub>御坐<sub>一</sub>、只今の向にては幾千人數相増外海浦の難遊彌増に罷成、鬪且青魚類に相障候故、手操網杯は所方にさへ過分には乗出不<sub>レ</sub>申仕榮に御坐候處、前文の通所々より乗込大網水戸付等用捨も不<sub>レ</sub>仕、大に相障當浦には數々配繩釣仕冬春渡世仕來候處、手操網過分に入込候故則當春分よりは配繩有來仕出も自然と相止候様罷成、鬪網乘子の外渡世の仕方無<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>彌以不安堵千萬に奉<sub>レ</sub>存候、冬春は何れの浦にも余所より夥敷入込漁事仕候得共、一向地方へは入船も不<sub>レ</sub>仕五分一銀上納も不<sub>レ</sub>仕、何方へか取歸、私共見聞仕候處土州よりも見習候て手操其他色々の小網仕出候様相聞、左候ては數百帖にも相及中々御締り合等も相立間敷、此上不漁

浦々入相漁事申付候に付、外海浦より難遊節申出被<sub>二</sub>相連<sub>一</sub>候處、難<sub>レ</sub>亘<sub>レ</sub>吟味願書相下候間此旨可<sub>二</sub>被<sub>二</sub>申聞<sub>一</sub>候以上

十二月十日

武田仁右衛門  
須藤段右衛門  
井關又右衛門

松澤 與市殿  
菊地 重兵衛殿  
松浦 源助殿

四〇

安政六未年願書

奉<sub>二</sub>願上<sub>一</sub>御事

久家浦所中

一鱧立網一帖  
右の通前以御世話筋申出候越、田龜倉網代御裁許通月十五日代りに漁事仕候様双方より申出候に付、何卒網株御免被<sub>二</sub>成下<sub>一</sub>候は、難<sub>レ</sub>有仕合奉<sub>レ</sub>存候、右の段奉<sub>二</sub>願上<sub>一</sub>候以上

未二月

外海浦横目役 源太郎

打被難遊に相成候上は當時柄の人氣如何に相成行候事哉、余所人等相手取沖論杯の絶間は御坐有間敷と役々の面々も心配而已仕罷在申候、委細被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>候間無<sub>レ</sub>間も御願申上候も恐多御坐候得共、諸漁に相障候事故不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>止事<sub>一</sub>御願申上候間、外海浦文の所へは他浦より入込不<sub>レ</sub>仕様被<sub>二</sub>成下<sub>一</sub>候は、小内一同重々難<sub>レ</sub>有仕合に奉<sub>レ</sub>存候、何分御許容被<sub>二</sub>成下<sub>一</sub>候様偏奉<sub>二</sub>願上<sub>一</sub>候以上

外海浦横目 喜惣治  
同 惣太郎  
垣内浦與頭 政 治  
宮山浦同 藤 藏  
内泊浦同 虎 一  
深浦同 辰三郎  
中泊浦同 亮之助  
久良浦同 久治郎  
船越浦同 岩次郎  
福浦同 吉田 彌多  
岩水浦同 澤近忠右衛門  
久家浦同 武久文右衛門  
外海浦庄屋 二宮市右衛門  
御浦方御役人所

久家浦組頭 直治郎  
外海浦庄屋 信次

四一

安政六未年 願書  
口上覺

當浦の内船越浦内泊浦中泊浦右三ヶ浦、鹽漁事の義に付是迄極り合も御坐候て、先網は内泊浦古株の事故右網へ爲取、夫より三ヶ浦圖取願番探廻り仕來候處、親勤役中に度々面倒相生じ魚取損じも有之處、昨年以來大に御世話筋相掛恐入義に奉存候、右漁事久良久家浦福浦三ヶ浦は是迄境取に仕來處、聊面倒も無御坐候に付可相成義に御坐候は、浦中一様に相成候様被仰聞候は、以後面倒に無御坐候と奉存候、何様右等の處御賢慮の上可然様御裁許被成下置候は、難有仕合奉存候、右の段奉願上候以上

五月一日  
御浦方御役所

松澤菊地御出張の上、内泊浦の者共被呼出御吟味有之  
五月十二日

四二

一 鰯立網一帖

久家浦所中  
同浦の内越田

右同浦總倉と申場所へ、月十五日代りに申合網株願出被相達致承知、願之通承届候間此旨可被申聞候以上

安政六年六月朔日

三浦 清助  
比企 藤馬  
井關又右衛門

四三

安政六未年  
口上覺

諸魚五分一銀の義は御物成に差續候旨、兼て被仰出

候に付其旨相心得、漁事方出精可仕旨恒に所方へも爲申聞、彌沖立無油斷仕候得共兎角近年は不引合、網師共外共前々と違ひ相應の漁事不仕難遊に罷成相察候處、御運上銀網十四五艘申合受負に仕相納、其餘網積下り候ても商賣差留候敷に相聞、夫故廣島並宇和網共格別高直に罷成、漁事方仕込迷惑に罷成申候、不苦義に御坐候は、他國より何十艘網賣船乗込候共、船毎に御運上銀相納高賣御免被成下置候は、自然と下直に罷成浦手一統爲筋に相成申候、買方の義は一艘にても賣船餘計の方勝手宜敷御坐候、前文の通御運上さへ相納候は、何國より參候共勝手賣拂御免被成下置候様、是等の趣可然様御取計被成下置一度偏に奉願候以上

十二月廿日

古傳次  
信次  
恒太郎  
實藤安次

松澤 與市殿  
菊地 市兵衛殿  
松浦 源助殿

四四

(同上指令安政五年)

他所より罷越候網賣船、近來町奉行兼手附にて運上銀取立賣事免許相渡候處、御吟味合有之來酉年より以來、他所より參候網船より運上取立の義被相止、無運上にて勝手次第網商賣被差免候間、此旨承知の上網師中へ可被申聞候以上

四月廿四日

松浦 源助  
菊地 市兵衛  
松澤 與市

船田平治兵衛殿  
赤松 忠兵衛殿  
實藤 安治殿  
信 治殿

四五

三机浦の内、鹽成浦組頭阿部與七郎、同浦伊助と申者所

持之網網株、此度讓受度段願出被<sub>レ</sub>相達<sub>二</sub>致<sub>三</sub>承知<sub>一</sub>、願之通承届候間其旨可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申聞<sub>一</sub>候、並に同人網小網一帖仕出度旨兼て願出置候處、乞下申出致<sub>三</sub>承知<sub>一</sub>則相下候間其旨可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申聞<sub>一</sub>候以上  
十二月十日(安政年度ナルベシ)

武田仁右衛門  
須藤段右衛門  
井關又右衛門

松澤 與市殿  
菊地 市兵衛殿  
松浦 源助殿  
別紙之通御奉行衆被<sub>レ</sub>聞候間、此旨御承知之上夫々可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申聞<sub>一</sub>候以上

三机浦  
菊地宇右衛門殿  
松澤 與市  
菊地 市兵衛  
杉浦 源助

四六

慶應二年願書

奉<sub>レ</sub>願口上覺

一ニヨロ網一帖 内泊浦組頭處中  
但此網代同浦の内鹿島ウドノ口  
右の通、今度新仕出度願出申候、吟味仕候處近邊網御網代等も無<sub>レ</sub>之差障無<sub>レ</sub>御座<sub>一</sub>候間、何卒申出之通御聞濟被<sub>レ</sub>成下<sub>一</sub>度、此段奉<sub>三</sub>願上<sub>一</sub>候以上  
御浦方御役所 外海浦庄屋 信 次

四七

一ニヨロ網一帖

組頭 處中

右の通、今度同浦の内鹿島ウドノ口へ仕出度、願出被<sub>レ</sub>相達<sub>一</sub>候處致<sub>三</sub>承知<sub>一</sub>候、差支無<sub>レ</sub>之場所付願の通承届候、尤網獵へ差障無<sub>レ</sub>之様網遣致可<sub>レ</sub>申旨可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申聞<sub>一</sub>候以上

慶應二年

水野所左衛門  
井關又右衛門

松浦 源助殿  
竹場 六兵衛殿  
柴田金左衛門殿

四八

奉<sub>三</sub>願上<sub>二</sub>口上覺

一ニヨロ網一帖 船越浦 組頭 處中

此網代廣浦

右の通新仕出度願出申候、吟味仕候處差障無<sub>レ</sub>御座<sub>一</sub>候間何卒御聞濟被<sub>レ</sub>成下<sub>一</sub>度、此段奉<sub>三</sub>願上<sub>一</sub>候以上

慶應二年三月

御浦方御役所

申出之通御聞濟有<sub>レ</sub>之

四九

口上覺

此節錫目近類前代未聞大寄に御座候處、何分御網代へは魚添惡敷浦に調議取仕候處、内泊浦の内鹿島へ同浦より参り、數日費罷在候處不<sub>レ</sub>斗漁事仕、既に此間網株をも願出吟味仕候處、網網に差障候場所にても無<sub>レ</sub>之、依て願書差出置申候、然る處段々右網代魚添宜敷漁事罷有候處、舟越中泊より被<sub>レ</sub>及<sub>三</sub>熟談<sub>一</sub>候次第も有<sub>レ</sub>之候得共難<sub>レ</sub>落合、内泊より申出候に付吟味仕候處、決て網網に差障り候譯には無<sub>レ</sub>之候得共、當時不漁に付ては網師始難避の義勘辨致貫、三ヶ浦順番にして網遣候義二ヶ浦より申掛候得共、内泊に於ては自分控浦にて數日試引出候場所候得ば、何分順番遣等難<sub>レ</sub>落合<sub>一</sub>申出候、尤二ヶ浦より熟談の義も一通無<sub>三</sub>余義<sub>一</sub>相聞候得共、脇に引合も可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候へば、先差向漁事は控の浦に爲<sub>レ</sub>取可<sub>レ</sub>然旨差圖仕置候處、二ヶ浦より又々内泊へ及<sub>三</sub>熟談<sub>一</sub>候次第も有<sub>レ</sub>之、就ては近浦の事故強て申張候ても不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然に付、漁事の高二步通差出一ヶ浦へ一步づ<sub>レ</sub>分け遣候趣、重々勘辨之上及<sub>三</sub>返答<sub>一</sub>候得共、何分二ヶ浦難<sub>レ</sub>聞入<sub>一</sub>今日又申出候次第御座候へ共、脇に引合にも相成忽面倒可<sub>レ</sub>相起<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>存候に付、何分初め及<sub>三</sub>差圖<sub>一</sub>置候通余に申聞方無<sub>レ</sub>之、左候ては難<sub>レ</sub>相熟<sub>一</sub>に付、若沖論仕魚取損候時は恐入事故、一ヶ浦より一人づ<sub>レ</sub>御城下へ罷出夫々申出、得<sub>三</sub>御差圖<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>申、御

否有之迄は三ヶ浦隔日に網遣候様強て申聞置御坐候間、御聞札の上早々御否可被成下候、此段御達申上候以上

慶應三年三月  
御浦方御役所

信次

五〇

内泊浦中泊浦船越浦面倒筋申出、其元にて被取扱候處何分双方共難落合に付、三ヶ浦五人頭被差出委細承候上申合相達候處、太段内泊浦の者共日敷を費し、試の上引出候場所、殊に其身共控の内に付内泊浦にて、最初引出候は、其行出の浦にて可致漁事一義に候へ共、左も無之上は前件の通相心得候様可被申聞旨、御奉行衆被申聞候、乍去近浦の事故右を意恨に相含み、重て面倒無之様重々心得方可被申聞候、猶委細の義は三ヶ浦五人頭へ申聞候間、篤と聞取の上夫々可被申聞候以上

慶應三年三月廿四日

竹場 六兵衛  
柴田金左衛門  
松浦 源助

外海浦庄屋

信次殿

五一

慶應四年辰年諸願掟  
乍恐奉願上御事

一兩浦共去五十年前より、毎春卯來島方へ相談の上鯨漁事仕來候、然る所漁事高二歩網代料可差出様彼方より被申付、畏居候處、何分遠方にて多分入用相掛難遊に及候に付、新網代引出候は、二歩物差出すに不及様相心得、六ヶ敷場所水島入汐方網代、卯來島日向、片下り網代、水島咄咄網代右三ヶ處中泊浦引出し仕候、右引出網代分は二歩物御用捨被下候様相談仕候へ共、少々の辨方無御坐、無致方、是迄渡海仕來候引出網代も不殘彼方へ引上に相成、例年借用網代同様相成申候

一十八九、廿日の頃より廿四五日迄は、夜半頃迄の漁事の節天氣悪く夜中改め斷出來不申、朝迄相扣にて浪荒々敷相成難義に及候事數度、魚小き節は痛に當感仕候

一其夜借用網代へ罷出、魚付け網敷込焼入の處卯來島

火船漁事差留め、其魚取逃候事數度御座候

一兩浦引出網代にて漁事仕候節も、自分網代同様二分

物の分沖合にて菜の魚數艘手自由に取候事度々の事

一其日順番の網代へ卯來島参り、兩浦の内姫島卯來島

網代へ参る節は久良浦より差留め、其夜一ヶ浦丈休

に相成多人數難遊仕候事數度御座候

右の通外是迄難遊數々御坐候、近年別て難用高直に相

成所中一同難遊仕候、何卒久良浦同様引出し網代は勿

論、借用網代も二歩物無之様相成候は、當一同難

有仕合に奉存候、不苦義に御坐候は、兩浦願の通御

取斗被成下候様重々願上候以上

慶應四辰三月

内泊浦 處 中  
同浦組頭 覺 兵衛  
横目 喜三郎  
中泊浦 處 中  
同浦組頭 吉田喜兵衛

外海浦御庄屋

二宮市右衛門殿

口上覺

別紙の通願出申候、右は兩浦に不抱先日日出初仕候節申上候通、兩島に於ては鯨餌魚に至る迄、入相漁事不爲被仕、統に先頃杯は錫寄候て浦内よりも罷越候處、鯨漁事に差障候趣にて張て差留障りに相成候は、相互に用捨不致ては不相成候得共、鯨暗錫は月夜の漁事尤闇にても夕方は漁事仕候へ共、鯨燒寄の時分は都て相止め差障候節は御坐有間敷、入相差留候ても其刻合漁事は得仕却て無情の基と奉存候、余右に準じての趣に御坐候、御承知被成下候通近時ふ漁續に御坐候へども、一同相勵海沖立不仕候ては難立行、土州杯へも專罷越候處彼方に於ては入相漁事仕候、右體故彌敷ケ敷申出候、島方に於ても地方同様相勵候は、最寄の事故多分漁事可仕義と奉存候、鯨漁事は勿論日々模様寄上網代一ヶ處引除自分共罷越、其余の場所漁事仕候義は不被差障、無歩にて入相取被仰付度願敷奉存候、仕榮の義とは乍申是迄魚取損候義數度相重り多人數兼々敷ケ敷罷在候事故、自然と差廻り終に不長敷沖論相起候程も難斗、ふ安堵至極に奉存候、何卒御賢案の上双方相勵靜謐漁事出精仕候様被成下度此段奉願上候以上

慶應四辰四月

二宮市右衛門

五二



御浦方御役所

五三

慶應四辰年諸願掟

口上覺

岩水浦垣内浦兩浦きびなご漁事の儀に付、沖論相生御達申上候處、差向隔日網遣致候様被<sub>レ</sub>仰付、其后別帝の通御裁許被<sub>レ</sub>仰付、双方へ申聞御坐候處、垣内は一帖岩水は二帖にて順番程遠難遊申出候共、重々教導御裁許恐入罷在、先月以來専漁事有<sub>レ</sub>之候處、多分垣内取務にて岩水二帖は不漁難遊仕候へ共、無<sub>レ</sub>致方罷在候趣、然る所當月も九日より模様有<sub>レ</sub>之候處、垣内に於ては先網見合網遣不<sub>レ</sub>仕、漸に十一日に網遣大漁仕、十二日は魚勢少故敷網遣不<sub>レ</sub>仕、十三日に相成岩水は一番の心得にて網乗出候處、前夜網遣不<sub>レ</sub>致に付、當番不<sub>レ</sub>相過と申候へ共、先漁より二日相過候上は意順相濟候様申張、終に沖論に相成双方網遣不<sub>レ</sub>仕候處、垣内浦組頭取扱にて垣内へ網遣御仕其夜三十二桶漁事、双方立合相改め組頭預り置き訴出申候、岩水浦よりは是迄難遊の義も御裁許恐入相罷罷在候上は、最早以前

の通浦控引敷隔日遺敷兩様の内不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰候ては難<sub>レ</sub>立行<sub>レ</sub>難遊申出候、右御回浦の節双方御聞御裁許被<sub>レ</sub>仰付一度奉<sub>レ</sub>願上<sub>レ</sub>候、毎月十日頃より十七日頃迄の漁事御坐候故、差向當月は相濟候へ共、多分來月も模様可有<sub>レ</sub>御坐、左候は、日廻りと網遣廻りとの面倒又々相生候程も難<sub>レ</sub>斗奉<sub>レ</sub>存候に付、御伺極申聞置候は、双方安神可<sub>レ</sub>仕、尤網遣の義も模様は有<sub>レ</sub>之時分、魚勢に寄先網見合候ては魚取損じも御坐有るべく候に付、模様有<sub>レ</sub>之最初双方寄合圖入先番相定候様相成度奉<sub>レ</sub>存候不<sub>レ</sub>苦御義に御坐候は、兩様此度御否被<sub>レ</sub>成下<sub>レ</sub>度奉<sub>レ</sub>願上<sub>レ</sub>候以上

十二月十八日

御浦方御役所

一宮市右衛門

五四

岩水垣内浦兩浦きびなご網遣方の義に付、小内争論も有<sub>レ</sub>之被<sub>レ</sub>相伺<sub>レ</sub>候義委細承知致<sub>レ</sub>候處、右は安政四巳年御奉行衆被<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>裁許<sub>レ</sub>通、日代りに致<sub>レ</sub>網遣<sub>レ</sub>候は、争論致候義も無<sub>レ</sub>之管の所、番代に小内にて網遣致候故双方共勝手筋申出面側に相立候間、以後は兼て裁許有

レ之候通、二日垣内一日岩水と日送り致<sub>レ</sub>網遣<sub>レ</sub>候様被<sub>レ</sub>申聞<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然義と存候、此段申達候以上

十二月廿日

赤松 源助  
竹場 六兵衛

網遣左の通

垣内浦

一毎月朔日二日  
右兩日魚模様無<sub>レ</sub>之都て網遣不<sub>レ</sub>致候共、順番相濟候事故三日は岩水浦へ相廻し可<sub>レ</sub>申事

一三日

岩内浦

右一日魚模様無<sub>レ</sub>之都て網遣不<sub>レ</sub>致候共、順番相濟候事故四日五日垣内へ相廻可<sub>レ</sub>申事

五五

明治三年御用掟

口上覺

姫島に於て鯉漁事の節、久良浦と卯來島双方魚焼分けと申義仕來り候處、元來右の島は多分久良の網代に御坐候處一ヶ所卯來島の網代有<sub>レ</sub>之爲に、多分の網代にて焼寄候魚を最寄卯來島より火の模様を見合、魚付候時分押掛参り即刻火を入双方魚奪合取損候義、年々數度

の事にて甚難遊罷在候、然る處是迄内泊中泊水島卯來島網代借受漁事仕來候處、島方仕方難遊の次第も御坐候間去る辰年歎願仕候に付、久良に於ても毎に難遊申出旁以申出候次第も御坐候處、御役人御出張双方御吟味の上同年夫々御裁許被<sub>レ</sub>仰付、一同難<sub>レ</sub>有御受申上罷在候處去春卯來島方に於て御沙汰不<sub>レ</sub>用仕方に付、既に沖論等も相生届出候に付御伺申上候義も御坐候處、其後久良浦へ御入割被<sub>レ</sub>仰付、候へ共近年の御裁許無<sub>レ</sub>間事に付何分落合不<sub>レ</sub>申、其内若年の者共は以前の通にても不<sub>レ</sub>苦申出候次第も御坐候得共、左候ては不安堵の見込も御座候に付、重々相誘引候處卯來島より差出候圖面之通、南大和の小善より北アヲ善見通東平一字と西平沙善網代振替網遣被<sub>レ</sub>仕候時は、焼分けの憂無<sub>レ</sub>御座<sub>レ</sub>候に付、東平卯來島へ差遣西平へは卯來島方不<sub>レ</sub>出合<sub>レ</sub>候様、尤双方出合不<sub>レ</sub>申候節は何れにても網遣勝手次第被<sub>レ</sub>仰付一度申出候、何様焼分け不<sub>レ</sub>相止<sub>レ</sub>候時は以前と人氣も違候事故、終に荒々敷沖論等生候程も難<sub>レ</sub>斗苦々數奉<sub>レ</sub>存候、尤焼分け魚取損候義は双方難遊可<sub>レ</sub>成義、久良計申立候譯柄は申上候迄も無<sub>レ</sub>御坐<sub>レ</sub>候へ共、御夫費用に不<sub>レ</sub>拘稀の漁事を見込遠島へ渡海仕居候故の義、島方に於ては居島井水島杯數ヶ所の網代に御坐候得ば、焼寄火勢を見合居水島網代并姫島模様宜

敷方へ参り、姫島にて焼分水島にては兩泊浦へ貸網代の事故相制し、自分計漁事仕候趣にて三ヶ浦共難遊仕候、右等の處は御推察被<sub>レ</sub>成下<sub>二</sub>焼分相止互に漁事出精候様被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>、此段奉<sub>レ</sub>願上<sub>二</sub>候以上

午正月

外見浦長

小幡進一

民政御局

五六

明治三年

奉<sub>レ</sub>願口上覺

垣内浦

組頭所中

一 鬮新網一帖  
右は前以乘子少にて揚株に相成居候處、追々人數も相増候に付乗出沖立仕度願出申候、不<sub>レ</sub>苦御義に御座候は、以前の通與株御免被<sub>レ</sub>成下<sub>二</sub>度、此段奉<sub>レ</sub>願上<sub>二</sub>候以上

月 日

澤近呈吉  
小幡進一

御局

五七

明治三年

口上覺

深浦組頭

所 中

一新大網一帖  
右揚株仕度段申出候間、此段御届申上候已上  
午二月廿七日

小幡健一

御局

上卷附録

宇和島藩四ヶ村漁業取調書

## 南宇和郡内海村調

### 一 漁業免許に關する事項

免許の有無 各漁業者へは免許を與へたるものなり  
免許手續 漁業を爲さんと欲する者は、其種類場所  
等を定め、口頭を以て組頭、横目等の手を経、所轄  
庄屋へ申立、而して庄屋、組頭、横目等は一應故障  
の有無を調査の上、故障無きと認むる場合、是等連  
印を以て御浦方へ免許の手續を爲す事  
免許出願書式 出願書式の令達及庄屋扣へ等、紛失  
せしか目下不<sub>三</sub>相見<sub>一</sub>  
鑑札又は類似許可書 御浦方に於て漁業出願者ある  
場合、各村浦巡回の節尙ほ障害の有無調査を遂げ、  
異議無き場合第六號書（漁場の記載あるものは専用  
網代を與へたるものにして、漁場の記載無きものは  
單り營業の許可を與へたるものなり、尤も是等の許  
可を受けたるもの數十有<sub>レ</sub>之と雖も、目下保存に係る  
ものは僅かに二通）の通、許可書を下付し、別途鑑  
札を付與せざるものなり

### 二 水族蕃殖保護に關する事項

水族の蕃殖上妨害ある  
故を以て、網袋底へ布類を用ゐざる事、又海藻へは  
諸魚卵子を産付するを以て、猥りに採藻を爲さざる  
事、水族の海岸へ群集するの妨害ある故を以て、海  
邊山林伐木及焚寄漁業は猥りに爲さざる事等、以上  
口碑に傳ふる處、且第三號寫書の通

三 漁業取締に關する事項 取締は第一號寫書の御掟に  
基き、第五號浦中申合書を設け、村君（村君と稱す  
るは各艦大網に二名の指揮者あり、之を云ふ、以下  
同じ）に於て取締を爲す事

四 漁業者の負擔に關する事項 納税 漁業の許可を得  
たるものは、網買入運上金（艦大網一ヶ年六匁、他  
網は三匁）を上納す、

献納艦 大網に限り毎年鹽艦を献納す  
公務 戦時の際には艦大網舟を以て、軍用船に用ゐ、  
漁業者之が水夫となる事

藩廳より與へたる特權 漁村浦一般に與へたる特權  
は無<sub>レ</sub>之、單り艦大網漁業者に對し、漁業上專用權を  
與へられたり

右に關する幕府藩廳等より下付せられし文書類は、  
明治改革の際紛失せしか目下不<sub>三</sub>相見<sub>一</sub>  
五 漁場入會專用に關する事項 漁場は海岸と沖合を不

問、其漁村浦に屬したる部分は之れに専用權を與へたるものにして、假令公の負擔ある漁民と雖も、他村浦の漁場に至り入會の漁權なきものなり

一 個人、又は町村に下付せられたる専用漁場免許に付ては、一個人に對するものは、第六號許可書の如き之れに記載ある漁場は當人の前網代と稱へ、専用權を與へたるものにして、則之れが免許狀に外ならざるものなり。其他の漁場は、(第一號寫し)當時御浦方御掟の上に於て、町村の専用の下附せられたるものゝ如く、鱈大網漁場の如きは天保二年御浦方に於て前網代(一個人専用漁場、以下同)、葉網代(町村専用漁場、以下同)調査の上、第四號寫書の通相定められ、其後(年月日不詳)各漁場一時藩廳へ引揚、更に元網新網を不問、各一ヶ所の前網代を下渡、其他のものは町村共有網代に下渡たるものなり、右に關する當時の書類等は、明治改革の際紛失せしか目下不三相見

六 區畫漁場に關する事項 更に無し  
七 漁場争の裁定に關する事項 争の簡易なるものは組頭、横目、村君等にて取捌、事の重大なるものは庄屋又は御浦方の裁定を乞ひ、此場合は双方の關係者は勿論、組頭、横目等と呼出し、事實調査の上曲直

を判定し、其曲者に對する處分簡易なるものは譴責又は損害要償、重大なる事に至ては營業上の停止を爲す等の事、其裁定及仲裁書の類は紛失せしものか目下不三相見

八 漁業者保護に關する事項 鱈大網に限り、不漁の年は藩廳より拜借金下渡の保護を與へられたり、之に依り保護を受けたる事數度有之と雖も、其際下附せられたる令狀等紛失せしか目下保存のもの無之、以上

### 西字和郡伊方村調

一 漁業免許に關する事項  
一 舊藩時漁業免許の有無 免許ありたり  
一 免許の手續 漁業者より庄屋連印の上郡奉行へ宛て出願し、其郡奉行に於て許否を決す  
一 免許出願書式 適宜なりし  
一 水族蕃殖保護に關する事項  
一 蕃殖保護に關する舊藩時の法令制度 麻布製の網を使用する事を禁ぜられたり、其他不詳

一 禁漁場、禁漁期及禁漁具公示の爲に設けたる制札、又は觸書の寫 本證及寫等もなし

一 漁業取締に關する事項

一 舊藩時取締方の仕組 取締役の根元は御浦方役に於て、其配下の横目役人に於て巡視取締をなせり  
罪人處分の方法 不詳

一 漁業者負擔に關する事項

納税は漁獲金高の五分の一 献上物は鱈大網師より、年毎に鱈を献上せり、其他の公務は、國に戰爭等ありて藩主及其臣士の出陣の時は、漁船を軍船に供用せられたり、亦、最合金なるものを漁業者一般より上納せり(此の金の趣旨は、漁業者保護に關する事項中にて了得す)而して之が報酬として、藩廳等より與へたる特權に於ては不詳

右に關し、幕府、藩廳等より下付したる文書なし

一 漁場入會専用に關する事項  
地方を離るゝ五十町以内の漁場は、其所屬村浦漁業者の専用にして、右以外の沖合は、其一郡内限りの入會漁權ありたり

右漁場の専用に關し、藩廳及幕府等より、一個人又は町村に下付したる免許狀、御朱印、御墨付は存せり

一 區畫漁場に關する事項 都て不詳

一 漁場争の裁定に關する事項

一 争論裁定の掛役は、横目、庄屋、浦方役、郡奉行の四あり  
一 取調手續及裁定の仕方 不詳

一 争論の起りたる時處分の振合 往々争論の起ると雖も、概ね横目役若しくは庄屋の處裁する處に確定し、其上司の浦方役及郡奉行の裁定を仰ぐ等の事なかりし

一 争論の裁定書又は仲裁書無し

一 漁業者保護に關する事項

漁業者中不幸を重ね、若しくは災厄に遭遇し、營業上困難の狀を呈せし者あるときは、救護として御浦方役より當該者へ最合金を下附せらるゝの制ありたり  
前項保護を受けし漁村浦に下付の令狀なし、右の外、別紙第二號寫の如く漁業發達の基因となる保賞金を下付せられたる事あり

西宇和郡町見村調

一 漁業免許に関する事項

舊藩時漁業の免許の有無 元網、結出網と稱呼するものは、何の時代に許可なりしものか、往昔の事故免許状、鑑札等所持するものなし。中古許可なりしものは、従来の元網、結出網の妨害ならざる漁場を、前付漁場に願出許可せられしものなり。其許可状所持するもの無し、獨り別紙許可状寫の通、口は終網故、鑑網とは事替り候得共、略之に準ずるものとす

一 水族蕃殖保護に関する事項

海岸にある山林伐木を禁ぜられ、或は舊二月迄は海藻採取することを禁ぜられ「又網の袋に用ひるものは八十齒迄のものを用ひ、八十齒以上のものは禁止せられし由」老碑の申傳する所なり

一 漁業取締に関する事項

舊藩吏には「浦方」「鑑方」と云ふ者あり、村浦には庄屋、横目専ら是に従事せり、取締方法は別冊の通り、罪人所分等は罪の輕重により營業停止、或は

一 漁場争の裁定に関する事項

争論裁定の掛官は、浦方、鑑方、村浦には庄屋、横目役等はに従事せり、取調を要する手續は、先庄屋、横目役是が取扱をなし、事落着に至らざれば藩吏出張するか、又は裁定書を以てするにあり、争論の裁定書は數通あるべきも存在せず、別紙寫を一葉上覽に供し候

一 漁業者保護に関する事項

舊藩より元網に幾許、結出網に幾許、其他新網に幾許の金を拾ヶ年、或は十五ヶ年賦拂に貸下られたり、又網船新調の節は官林を拂下げらるゝ制あり

西宇和郡三崎村調

一 漁業免許に関する事項

舊藩宇和島領主御墨付寫  
一 佐田平右衛門就「骨折」網致「赦面(免)」之事  
寛永四年三月九日 秀宗  
次右衛門殿  
(該氏は當時網奉行なりしならん)

遠慮等申付られし事あり、其書類は存在せず

一 漁業者の負擔に関する事項

納税は五歩一と唱へ、魚の種類により異なると雖も、其賣買直段の五歩一を薦運上と唱へ上納致し來りしなり、献上物は、舊藩公より舊幕府に献上になる鹽鑑を、鑑網業者より献上致候、公務に於ては、鑑網業者は戦争出兵の際は、網船をして軍用船に指出す可きものなる故に、網船には「みよし」に「さがり」を掛け、裝飾するものなりと口碑の傳ふる所なりしが、果して然る所以なるか、元治元年子年長州征伐の時、舊藩公御出陣の節網船を指出したり

一 漁場の入會専用に関する事項

漁場は、元網、結出網は往古は一株に付貳ヶ所の漁場を専有せしも、中古より一株一漁場持の制を置かれ専有し來りしも、維新後、漁場は輪番使用する事となれり、尤漁場を離れ、沖合に於ては從來より入會使用せり

舊藩より下附せられたる免許状は古網にはなきも、新網等は何れも所持致し居りしが、維新後輪番使となりし時引揚になりたりと云

一 區畫漁場に関する事項

不詳

右秀宗公御直書

佐田平右衛門は、西宇和郡三崎村大字佐田加藤善國の元祖

寛永四年より明治二十七年迄、二百六十八年間今に相續營業す

右口碑に傳ふ

一 水族蕃殖保護に関する事項

是は、文化年間藩政より御觸書の寫左記通、尤水族蕃殖保護に関する事項と、取締に関する事項と關聯するを以て、右二項の爲に左に記す

一 網袋底へ蚊帳の様成布を入候儀指留、目關に可限事

但、(シラス)を取候儀無益に付、目關へ掛り候迄は可致用拾候、乍去場所に寄、餌引不致候ては差支候に付相入可申事、尤餌魚余分取れ候節は、煮干等にも可致候、扱又はだか廻し杯と名付、小網の後引候儀は堅差留候

一手操ふり網に目關を入候儀は可致用拾候、尤場所に寄り、少々づゝは目關も相用不申候ては、指支候所は吟味の上相用可申事、但觸漁に相障り候節は、庄屋、村君吟味の上急度差留可申候

一海草へは諸魚卵を産付候様傳候へば、指留申度候へ共、場所に依りこやし等に指支候所は、少々づつ取、要の場所は可相成用捨可致事

一網へ焚寄之儀、地寄に相際(障か)、且火に付候魚は大引等抜、漁方不勝手に付指留候、尤地寄不致焚寄宜敷時節は、庄屋、村君中相談の上取計候、只今迄も右躰右様の處は、御當方吉田共申合有之趣に候得共、兎角申合相離勝手勝手に相成候に付、以後は急度申合□□に無之様、或は何日より焚始め可申段手合致、若相背候浦々は網等取上可申付候間、網の不勝手に相成らざる様重々相心得可申候

但鯛模様も無之時節、鯨類の類急に相見え、近村申合の義相届兼可申、是等の焚寄宜敷都合に候はば其取計に致、翌日に至り彌鯨等所務の所明白に候様、近村へ通達致紛敷儀無之様、勿論鯛模様有之節は本文の通り相心得可申、右通達の義自今六ヶ敷様にも有之候得共、抑より手堅く相定不申候ては、不遠内相流可申に付、吉田分入受所には彼方庄屋中へ得と示談致置可申候、御双方御一躰の事故決して區々無之様、實意に取計可申候

若し相違の義も候はゞ、急度吟味之上裁許可申付事

但吉田表には磯邊の育魚を取候故、指留申度旨も申参り、吟味の上小内指支に不相成留にて可然候はゞ可申出候

右之通り吉田表御掛合の上、御双方御同様被相觸候段被仰付候間、夫々御承知之上不間違様御取計可有之候、此旨拙者共より申聞候様被仰聞候に付、此段申達候以上

六月廿日

小川 五兵衛  
森 丈左衛門  
森田 三兵衛

浦々庄屋中

一漁業者の負擔に關する事項

一藩政の如きは網又は釣漁業等に對し、渾て無税、該漁業各個人收獲の内、夫々種類を區別し五歩一と唱へ、例ば鯛地干加壹俵の價額銀二十五匁と定め、其五分の一を藩廳へ納税す

諸魚五歩一御定直段  
一銀二拾五匁  
鯛地干加壹俵

一焚釣の儀は御停止に候得共、夜釣不相加候ては指支候所は申出、吟味之上承り置候

但網代近、竝に其外逆も鯛獵に相障り候時分、指留も前以申付候得共、猶又夜釣致候者ども、時々留め起り掛引相守候様申付置、網の少しなりとも障に相成らざる様取計べき事

一せんご網、磯邊にて少々づゝ引候義は指留め、多分入込候はゞ引可申事

一網子其外共、貫魚の分こやしに相用候分は、くさらかし灰搔等に致し候儀は勝手次第、其條は庄屋、網元並商人共賣渡可申候、小内にて地乾仕成の儀は堅く指留め候

一沖合にて調儀取の儀は前より御停止に有之候、彌以相守り可申候事

但時宜により、通り魚は取候勝手能候はゞ、最寄最寄相談の上、取計可申事

一五歩一惣改の儀前々申聞候儀に候得共、横目役は勿論庄屋、組頭、五人頭等迄申合入念、聊にしてみも不有り無之様取計可申候、不意に手附御役人差向候儀も可有之候間、此旨も御心得可申候  
一諸魚陸越古法之通り横目改を受け、少しにても不  
二相差様取計べき事

但水鯛水儲共  
一銀三拾二匁五分

鯛煮取干加壹俵  
但正三拾四匁入

一銀拾八匁  
搔鱈壹石  
但千六百喉尤儲共

一銀壹匁二分  
鯨餘拾俵

一御觸書之外記憶の儘

石算出上説明

舊藩字和島領銀札壹匁は正錢七拾文に當る、尤銀壹匁は銀札壹匁五分八厘

一鯛地干加壹俵の價格銀貳拾五匁と定め置き、夫々一五八を乗すれば藩政銀札三拾九匁五分となる、五分を上すれば四拾目となる、尤算出上渾て如斯

納税は當時の通用銀札にして上納す

一催合銀は干加壹俵に付銀札貳分宛、尤搔鱈煮取共壹石に付同斷

但個は網營業者より五歩一税金の外、別途上納し藩廳にて積金となし、而る後網方非常の際藩廳よ

り貸下の豫備金なりしと

一五歩一金御定直段、藩政中依然据居く者に無之、時々改正するも、五歩一銀は不絶納税せし由

一漁場入會専用に関する事項

一佐田平左衛門赦免網附屬網代高浦家前、同浦横浦、佐田浦袋寄、井野浦今替、以上四網代共に被附、右許可、尤不明なりしも、平左衛門方にて扣あり一赦面網に限り、網一帖に付特別を以て四網代充出願、許可網は貳網代充、藩政中古に至り壹帖に付壹網代充、廢藩の際漁場は一變して組合内の網押合漁場となる

一他村浦は自村浦網と異なり入會不許可一許可の書不明、申傳の儘左の通り

一本網壹帖

網代三崎家の前、清水ヶ谷、鳥井、都合三網代附屬

但元網の儀は、往古より大子相對雇入、指支候時は本村百姓中割合を以て乗出候權を被附、尤右元網は舊藩伊達家以前の古網なりしと云ふ

古網は三崎浦兵頭又右衛門所有の處、中古に至り悉皆地へ讓となる

一三崎浦兵頭又右衛門終網壹帖

文政元寅十一月二日許可、同網附屬網代三崎浦下波分

嘉永六丑十月廿四日三崎浦上波分を係り都合三崎浦中海面

舊三崎浦と稱せしは目下三ヶ村に跨る、右許可の書不明なりしも兵頭良三方に控書あり

一三崎浦の内、串浦、正野浦、右二ヶ村に限り同浦字早戸釣漁場専有許可の者なりしは、確乎たりしより今に特權を有す、乍併當時の許可書、持主に於て不始末より目下證左不明

一沖合釣漁場、當地方に於て他府縣及他村浦と入會漁場なし

一區畫漁場に関する事項

當地方に於て該件に對する件不明

一漁場争裁定に関する事項

藩政に左の役員あり

老中 郡奉行二名 浦方三名 庄屋役 横目役、營業者に於て紛議を生ぜし時は、横目役の取扱を申立和解方取扱ふも、承引無きに於ては浦方所へ訴訟し可否裁決となる、果して然る時は漁民より他へ訴訟するの道なし、然と雖も、然も重大の事件にして不正當の裁判なりと信すれば、郡奉行へ直訴願するを得、

個は客事(まか)に採用なり難き由申し傳への儘

一漁業者保護に関する事項

佐田浦加藤平右衛門網株之義は、舊藩領主より赦免網に付、網あは銀と唱へ年毎に銀七拾七匁分被下付、積荷に對し銀貳拾五匁八分、赦免網株には五枚帆一艘御免積に付無税となる

三崎浦庄屋

兵頭又左衛門

一銀七拾七匁五分

此舊藩札百貳拾貳匁四分五厘

一舊藩政往古より廢藩迄御下金なる控書あり

下  
卷

吉田藩漁村經濟史料



御浦々横目人数三十四人

元和貳年十月 日

二

郡 鑑

萬治四年正月

一自先年帳面に乘候諸網漬申間敷候、若漬候は、不  
 叶子細有之は其品此方へ可申斷、并獵前に成候は  
 必村君手前之網改可申候、網結出候は、遂吟味  
 網代壹ヶ所づ、遣可申候、若本網を捨其子細を以  
 結出候は、庄屋の儀は不及申村君可爲曲事  
 一地旅寄網共網置候義、前々如相定、前後置論無之  
 様に可仕候、依之浦手形遣品極置候上は、非分の  
 沙汰可爲曲事、并御藏網代無主所にて地旅共引  
 取候水魚五分一物、其所庄屋、村君、横目吟味仕、  
 受取之時相場に賣立代銀札頭へ相渡月々可納上、  
 并引出之網代於有之急度可申出  
 右ヶ條之趣堅く可相守、此旨若於有違犯之輩は  
 可爲曲事、但不依何事御定之旨相背もの於申出  
 は、縦爲同類共宿其科輕重に御褒美可被下置

郡 鑑

御浦方横目起請文前書寫

一從御公儀被仰出御法度之儀、違背仕もの御座候  
 は、縦雖爲親子兄弟早速御訴可申上事  
 一御浦中諸魚以積荷五歩一被仰付候通、庄屋、札  
 頭、村君、横目出船之砌、地旅共に遂吟味少も隠  
 不申改可申事、附、步越之儀御番所之外脇道等仕  
 間敷事、并干鯛搔鯛共俵に大小地旅共に仕間敷事、  
 尤俵の内不紛様可遂吟味事  
 一御公儀網代受網代無紛様、水魚貳歩物可遂吟味  
 事、沖合にて渡海船に隠賣仕間敷事  
 一從前々被仰付諸事寄物之事、其所中以吟味隠  
 不申注進可申上事  
 一、御浦中御物成方御定之御公物、其外網方之算用浦  
 中出合申遣、御庄屋百姓算用之間未埒之義、或不  
 寄誰人私用御百姓夫仕、或御役人衆庄屋方にて  
 御馳走仕入目は百姓へ割懸迷惑成義御座候歟、非法  
 之義等御座候は、御訴可申上事

者也

萬治四年正月

櫻田平左衛門  
井上 治兵衛  
田中徳右衛門

右之御掟、板札にて御浦庄屋所に有

三

郡 鑑

寛文三卯五月

諸魚拔荷有之、御番所にて御改出御浦奉行所へ注進  
重々吟味之上落着、大法之覺

一何魚何十

一同 員數

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一同 同科代

一御札判紙御老中より請取、則通帳有

一五分一銀納様は、札頭よりの添状諸廻船のもの御浦奉行所へ持参、此方にて魚直付算用當り無相違候得ば五歩一銀受取右之御札出す、佐田日振へ御札納諸廻船通る、右之御札兩所より月切に御浦奉行へ戻る、并他領へ諸魚歩行越五歩一銀は其札頭へ手前に納置、野多東多田御番所へ諸魚員數の切手遣す、其切手月切に札頭より右五分一銀御浦奉行所へ納候、右何も五分一銀御浦奉行所へ納る、集次第御銀奉行へ拂切手取置

一江戸大廻御香物、御老中より員數被二仰付二次第御浦々へ申付調候得ば、御老中御差圖次第大坂御留主居衆迄爲、登申候、御算用の義は江戸御役人切手にて仕來、切手不、参内は大坂留主居衆之切手にて御算用仕、重て從三江戸、参次第御勘定所へ切手見せ申候附り、黒漬桶入候時は御老中へ相尋ね候得ば被二仰付、輪竹入用之時竹役人より請取、江戸御香物荷物認候時は細越夫使之分立間尻より出る

一浦々押送り、御老中御差紙見届送り切手遣す附、船送之札拾枚此度引渡申候

一旅網來り候時は、御公儀網代一ヶ所宛被二下置候一御臺所に御看御拂底之時は、御老中御差圖次第御浦

御浦手形仕來書覺

右大法如此、併重々御吟味之上此外不届もの有之候得ば、夫々科代へ懸けて、他領へ諸魚歩行越拔荷之時も大法如斯

御浦手形仕來書覺

浦へ申付、御看屋にて賣申候

一木喜津廣早兩浦にて、布苔一ヶ年に四貫目程づ、納申候、右拂方は請取人表判に其時之裏判役人之裏切手にて相度候、是は去八月字和島より渡る、八ヶ浦之内之布苔受拂は字和島支配の覺なり

一御家中より他領へ諸看進物、五歩一銀御免御番所通切手御町問屋切手に御浦奉行裏判遣す、大分進物有レ之ば吟味仕候

一御當地にて黒漬俵罽御用之時は、受取人表判に、其時之裏判御役人裏判切手にて相渡候

一御浦方所々網代御受銀、如三前代、其年依三獲多少に、受銀差引仕來候、其外諸事御臨時物御浦々横目遂三吟味二納來る

一、御浦々札頭御合力銀、網一帖に付銀五匁づ、之積外船所持仕候は、帆一反に付銀三匁宛被二下置、但六反より以上之船之五歩一銀高にて百分一づ、被二下置、五歩一銀納之内にて渡し來る、前書之通、御浦方支配有増如レ此御座候也

寛文三年卯五月一日

櫻田平左衛門

戸田藤左衛門殿

田中徳右衛門殿

合力鑑

五

郡 鑑

一當巳年より初廻江戸へ被レ遣候に付、黒漬、甘漬、

四

郡 鑑

追引付覺

一銀拾壹匁喜木津浦庄屋忠兵衛方へ、去辰之年より被二下置候間、御浦方五分一銀之内にて被二相渡、毎年差引可レ被レ申候、是は諸魚歩行越、其外流寄物杯遂三吟味二諸事骨折申付如レ此也

一布苔四貫目づ、喜木津、廣早兩所より、去辰年より毎年納拂方可レ被レ申候以上

寛文五年巳四月二日

尾田五左衛門

尾川孫左衛門

御那奉行中

尾田五左衛門

尾川孫左衛門

御那奉行中

尾田五左衛門

尾川孫左衛門

御那奉行中

尾田五左衛門

尾川孫左衛門

御那奉行中

尾田五左衛門

尾川孫左衛門

御那奉行中

尾田五左衛門

尾川孫左衛門

御那奉行中

尾田五左衛門

尾川孫左衛門

鹽鱒、搔鱒之員數、此方より指圖次第御浦方へ申付調可被申候、代銀は御定之通五分一銀納之内にて差引可被申候、此外鹽鱒類藤御役人方より受取認可被申候以上

尾川孫左衛門  
尾田五左衛門

寛文五年己八月廿二日  
御郡奉行中

六

郡鑑

宮崎九右衛門、片岡傳兵衛、御浦奉行之時起請文前書之事

一浦中諸魚以積荷五分一に被仰付候通、庄屋、札頭、村君、横目出船之砌地旅共に遂吟味、少も隠不申改可申事、但歩行越、東多田野田越之外仕間敷候、宇和越之義は所改を以通可申事  
一干鯛、搔鱒、共に依に大小地旅共に仕間敷事、尤倭の内不紛様に可遂吟味事  
一公義網代、受網代、無紛様水魚貳分物可遂吟味事

事、附、沖相にて渡船海に隠賣仕間敷事  
一從前々被仰付諸事流寄物之事、其所中以吟味、隠不申注進可仕事  
一他國米、大豆(略す)  
右五ヶ條之通長奉存候、若相背者於有之者以下脱字)  
寛文六丙午卯月廿日  
惣札頭中  
同庄屋中  
同横目中

七

郡鑑

寛文六年

御浦奉行所へ御札申受參候時、下切手書様之事  
但、前廉に諸廻船荷物改積立其所之横目吟味之上に而  
一何端帆一艘、何國何右衛門船、人數何人、宿何右衛門所より積申荷物之事  
一搔鱒、何百何十何石何斗何百何十  
内何十何石何百何十 五分一

銀何百何十何匁

一何魚

右同、内同、

何々合銀何百何十何匁

右之通御役銀差上候は、御札被遺可被下候、此外荷物何にても積出不申候、仍如件  
年號月日  
何浦札頭  
何右衛門

御浦奉行御名字御名  
何々右衛門様

旅船は右之改切手と、此下切手と、御浦奉行所へ持參仕御札申受候、地船は改切手に不及

八

郡鑑

寛文

一鯨  
ながれ寄候時、直段は入札にさせ落札にて三ヶ一其所へ被下置、三ヶ二銀子にて公儀へ差上候事、附、身鯨油他領へ積出候時は、御札錢地船は壹艘三匁三分、旅船は六匁三分之事

五歩一なし、片岡傳兵衛岡田彦右衛門支配の時如此、一諸魚ながれ寄候時も右同斷  
銀一匁三分  
魚之油登升之直段、但町外右油直段、寛文十年戌三月二日極、御町問屋與左衛門判、立間尻庄屋八郎右衛門判、御看屋之權之進判  
銀一匁

鯨六百目づゝ、是は寛文十一年亥正月十日、立間尻にて生鯨子引申、大洲へ歩行越仕度由申出に付、如此に直段定、尾田五左衛門殿御判

九

享保十二年未七月廿六日  
大島浦網定之事

一年中干鯛仕立申節、濱にて四歩六歩に引分受取可申事、其内時々中間雜用入目銀者差引取可申事  
一年中引立之節、濱など差支生魚にて引分申時も右同斷  
一年中引立之諸魚、生魚に而賣申候は、其受拂右同斷  
一年中引立之儀、今年より六歩方へ引受干可申由申

大し玉取  
御郡

出候處、近年地下人痛申に付以了簡中干に申付候、若時節に寄六歩方不勝手之義も有之候時は、地下人より無異義一六歩方えも干させ可申事

一四歩方出し目、或者藁大引繩、其外從先規相定る四歩方入用分無三手支様可申事

一漁事之節網飯米者、四歩六歩より時々出し可申事

一、網中割方、井小遣銀等、無三手支様可申事

一役人利右衛門義、今年より四歩六歩之中間に而當銀遣し可申事

一交り魚有之節、鯖鱈諸魚共交り申分少々にても選出、賣立算用に入可申事、少し之交り魚等者先規世間之通六歩方次第に可申事

一網船手船之船床、以前定通可申事

一御用鯛之節、鹽用意者中間に而成共、四歩方にて成共、一手之鹽相調、面々取合之鹽調申間敷事

一網舟小舟たて修理、先格之通に可申事

一網買網染ぬひくより干修理、是又先格之通之事

一網中買物舟人遣右同斷

一袋底にて魚地下方へ遣申節も、六歩方えも引取申度候は、受取申候勝手次第、追而差引可申候之事

一たし玉取賃、御定八桶入にて受取可申事

一煎魚銘々に取申節は、四歩四桶取申候者六歩へ者六

桶取可申事

一網子入組之義尤しる付等之事、網且那、沖村君之見かひ次第に可相定候、面々かちに申違背仕間敷事

一地下人魚揚場に参り候節、釣船えゑば賣者不及申面々に取申間敷候、尤只今迄之通魚揚申節、舟人大勢干場へ寄申間敷事

一重て地下方へ仕入之者取申度候者、相談の上相極、其者へ請合證文差出可申事

右之通網定申付候間、自今以後網子共不精不仕、四歩方六歩方共網の修覆随分入念時々入用双方無三手支仕出可申候、尤網子者人数虚病又は出からかい仕間敷此以後双方不届之儀有之候は、吟味之上急度越度可申付者也

享保十二年未七月廿六日

御郡所

延享二年丑六月

享和元年酉七月十七日御郡所へ

此年三月十五日、御郡奉行高月織右衛門様御巡在御

晝休也、庄屋持参仕る

俵津網代引付際差出候様此度被仰付候に付、地網四狀并に結出貳狀御引付、酉七月十七日に御浦方御中見官右衛門殿へ差出申候御引附之寫書扣

一本網壹狀 俵津庄屋

此網代

一窪浦 但窪浦より東の鼻

横網とも云、但松崎より楠浦鼻之間大石あり

一楠之浦 尤海は大瀬限

外に

筋灘之内、帆ノ茂、うのくそ貳ヶ所、此網受網に相成受銀相定年々申付

一網壹帖 村君 喜惣兵衛

此網代 一坪井、但城ヶ鼻より片之門 村君 長助

一本網壹帖 仁兵衛

一本網壹帖 與一郎

此網代 一中浦、但坪井網干之間 村君 儀助

此網代 庄七

一網干、但俵津之内大浦より東の平新王前

一江刀網代 畑子大崎より西平小砂濱袋寄

一小網代 但水か尻と津みつき鼻の間砂濱袋寄

右貳ヶ所網代所網四帖之内網代に遣之者也

公儀網代

一水か尻網代 但小網代鼻より亥の浦鼻迄

地旅共獵事仕候得ば貳歩銀指上

網代數合八ヶ所 深浦俵津受

一子大崎網代

受銀 相定年々申付

右之通前々より定置候網代、此度相改夫々へ申付候條可申得其意者也

延享二年丑六月

佐藤 十左衛門

大森 庄兵衛

國安 什大夫

寶曆四戌閏二月 川名津

拾歩一證文之寫

差上申證文之事

一此度小網株乗出御斷申上候處、御吟味之上御願被  
ニ成下、勿論願之通被ニ仰付ニ難有仕合奉存候、然上  
は先規之通無役に而引立て拾歩一差上可申候、尤  
此度七月朔日より十一月晦日迄之引立に御定被ニ成  
下ニ承知仕候、右月切之間は本網小網に不<sub>レ</sub>限諸魚共  
差上可申候

一右月切の外たり共春夏小網に而も引候節、肥し等御  
入用候は、被<sub>レ</sub>仰付ニ次第時々之直段積を以差上、  
追而拾歩一算用に相立御拂可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候、若參過有  
<sub>レ</sub>之節は御手前より御渡可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候  
一、右月定之間は、漁事之節時々二日三日に一邊づ、  
引高御届可<sub>レ</sub>申上候、又は御尋之節無<sub>レ</sub>間違<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申  
上候、猶亦帳落無<sub>レ</sub>之様、随分入念算用仕出可<sub>レ</sub>申  
候

一後年に至り村君かわり申候節は、月定之義は如何様  
共御内談次第可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候  
右之通夫々全相違仕間敷候、爲<sub>レ</sub>後日<sub>二</sub>村君、網子、證  
據判仕差上置申候、仍如<sub>レ</sub>件

實曆四甲戌閏二月五日

村君

久兵衛

網子中

連印

御庄屋

文 藏殿

右之通私共承届、少も相違無<sub>レ</sub>御座候以上

組頭 甚九郎  
横目 次郎兵衛  
小頭 多七  
同 助 六  
同 喜右衛門

二

實曆四戌三月

川名津

五ニ相定る網遣事

一本網繰請候後は勿論、平生逆も壹番替えに網遣可  
<sub>レ</sub>仕候、尤先網は日之ちやうはん<sub>（おぼろ）</sub>に相極、兼而關取  
致置候事

一鯨曳之義は、日替えに網遣可<sub>レ</sub>仕旨相定候事

右は當年小網かぶ乗出候に付、互に内談之上を以、如  
<sub>レ</sub>斯相定候上は全相違仕間敷候、尤大網前網代家の前小

網前網代下の瀬と自<sub>レ</sub>先規ニ相極り居申候得共、銘々持  
切に致時は魚見え掛候節、兩方へ論じ合申程成事共に  
而、殊により可<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>不漁<sub>一</sub>哉と存候間、右之通内談相  
極置申候、併至<sub>レ</sub>後年<sub>一</sub>村君相替り申候は、其時々之相  
談次第可<sub>レ</sub>然候、全水格に相立申間敷候、爲<sub>レ</sub>後日<sub>一</sub>依  
如<sub>レ</sub>件

實曆四戌三月

大網假村君

助 六

小網村君

久兵衛

前書之通儲承届相違無<sub>レ</sub>御座候以上

横目

治郎兵衛

三

實曆四戌  
網子中口上書寫

口上書之事

一小網拾歩一之義は、是迄所に置は村組久兵衛網子中  
之かぶと心得居申候て、高十歩一指出申候得共、網  
子中之所に置は四歩分受のき仕候て、拾歩一之儀は

四歩分之處は得出不<sub>レ</sub>申候様、何も申候間右之段以  
ニ口上申上候、爲<sub>レ</sub>後日<sub>一</sub>仍如<sub>レ</sub>件

戌十二月

小網

網子中

一四

明和九辰年二月

引付之事

狩濱浦之内廉の脇にて、此度新網壹帖兩人願仕乗出指  
免、御領分有網數令ニ加入<sub>一</sub>網役申付候、依<sub>レ</sub>之嶋の本  
網代壹ヶ所添遣候、右は只今迄本網壹帖乗出來候所、  
網子の者共多人數に相成及<sub>レ</sub>難儀<sub>一</sub>候旨聞届、如<sub>レ</sub>斯候  
條狩濱浦中之有網一致に漁事出精可<sub>レ</sub>仕候、尤有來候  
網方龜末無<sub>レ</sub>之様可<sub>レ</sub>相心得<sub>一</sub>者也

明和九辰年二月

松崎與左衛門  
芝 安左衛門

狩濱浦組頭

七郎右衛門  
六郎兵衛

一五

寛政元西歲十月  
引付之事

白浦之内、於筋灘、ほのも鵜のくそ貳ヶ所之安代、元祿四年より其方を請安代申付置候所、白浦新網追々出来候に付繰合之義有之、ほのも安代壹ヶ所爲指戻候、然共數年來貳ヶ所之請安代差免來り候儀故、猶又了簡を以右同所脇にてかきケ尻壹ヶ所新安代に申付、其方請安代に差免候間鵜のくそかきケ尻貳ヶ所之可爲ニ支配候、尤受銀之儀は年々模様次第可ニ申付一者也

寛政元西歲十月廿三日

小島源太夫  
横田茂右衛門  
依津浦庄屋  
三之進どの

一六

菜魚

寛政七年五月  
網方定之事  
一常々網乗出候時分、朝夕共網子共一統無遅参相捕可申候、將又大風之節者不及言、平日網船繫たて修理も外網繕等迄、諸事龜末之儀無之様入念可申候  
一引立諸魚、貳步通者網子之者共へ配分可申前格に候得共、右之銀子三貫目之元利返辨不相濟内者、網子之者共貳步魚迄も右元利之内へ拂込可申心得に罷在候故、粗承及置而神妙之事に候、乍然無據筋にて及ニ難義候義も有之節者、庄屋、村君相談之上致ニ差操、引立度數有之節者以了簡程能相渡遣候様可取斗候、追て渡方御浦下代え可申出候尤諸魚引立候節水魚にて直段宜敷方を賣拂候共可爲ニ勝手次第候、乍然御領分出賣商人之外を賣渡候義は堅く停止之事  
一右貳步魚之外、前々より菜魚と名付網子共え遣來候由前格之通配分可申候、乍然猥成義無之様網子頭取之者より請ニ差圖配分可申事  
一、引立之諸魚、干鯛者不及云、鹽物、干物等迄も網方にて仕立可賣出、事勿論に候、雖然天氣相之模様によるか又者漁事繁多にて手廻惡敷事有之

節は、水魚にて賣拂可申候、尤何に不レ限賣出候初は庄屋へ相届、閉届之上賣立之際面を庄屋令ニ印形一  
一諸魚引立之際面、庄屋并十左衛門召連れて正月より四月まで、五月より八月まで、九月より十二月迄、年中三度づ御浦下代中へ指出可申候、尤廉々え庄屋可爲ニ員數判一  
一諸魚賣出代銀是又際面と一所可ニ差出候、自然其限月積出無之分も候は、其譯右際面之奥え記指出可申事  
一網方にて無據入用節前廣に御浦下代中迄可申候、諸事彼面々可隨ニ差圖一  
一沖村君并體押之者共は、前以網子頭取之者に候得共猶又此度改頭取申付候間諸事を配り、網方無ニ手披ニ様可ニ差圖候、尤不審之義有之節は庄屋并十左衛門へ聞合可申候、品により候而者御浦下代中迄直々にも罷出相尋可請ニ差圖一  
一此度網乗出候譯、格外之了簡を以銀高之内を御浦下代中よりも令ニ世話遣候義、不レ輕事に候、依て網方諸向之義者不レ及申、十左衛門より儉約等之義、右此度借用之銀高元利相濟候迄は格外心得筋之義第一之事に候、若不慎不埒之儀於有之者十左衛門家

督にも可ニ相障候間、此度之義は十左衛門家再興之端と相心得、晝夜無油斷可令丹誠候事  
一網子之内たいしと名付、又玉取と名付候而、網船繫修理致候之者漁事之節魚すくひ候者杯え、爲ニ骨折と引立水魚少々づ前々より遣來候由閉届候間、前格の通村君見合を以可遣之事  
一諸事前格之通申渡置候に付ては、少々之漁事たり共委引立際面え記可申候、此外平日の心得等にも自然疎略に相成候義洩聞候得者、十左衛門者不レ及云網子頭取之者共迄其咎甚以可被レ重候條、兼て其旨相心得入念可ニ相勤一  
右拾壹ヶ條之通定置候上者、若違背之輩於有之者吟味之上稠度可申付候、尤前書に相洩候儀者時々伺出可受ニ差圖候以上

一七

寛政七卯年五月十一日

大島浦  
十左衛門  
并網子中え

大島浦十左衛門網子之者申渡覺

一十左衛門内分困窮に付近年網乗出不相成、漸借網を以令漁事候之條、其儘差置候て者自身に網仕出候時節可有之體にも不<sub>レ</sub>相至、殊更借網之義も年相談等際取程能時節をも取後候由、大島浦之義者別而漁事專要之場所、右躰拾置候て者網子之者共迄も可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>逼迫候旨相聞候、因<sub>レ</sub>茲御浦下代中へ申付銀一貫七百目口入致させ、外に壹貫三百目庄屋役人口入、都合三貫目之銀子を以賣網爲<sub>レ</sub>相調<sub>レ</sub>網乗出申付候之條、諸事別紙定書之通相心得、庄屋并に村君、網子頭取之者共指圖に不<sub>レ</sub>相洩<sub>レ</sub>漁事出精可<sub>レ</sub>仕候

卯五月十一日

一八

寛政八年四月

大島浦組頭  
十右衛門

其浦網方之義、兄十左衛門代乗出申付爲<sub>レ</sub>頭取<sub>レ</sub>作配方申付置候之處、漁事方不<sub>レ</sub>仕合に而網船共及<sub>レ</sub>大破<sub>レ</sub>乗出

不<sub>レ</sub>相成體に罷成候に付、庄屋役人中判斷之上伺出候之趣尤の義に付、任<sub>レ</sub>其意<sub>レ</sub>寛政二戌年より當辰年迄七ヶ年之間、庄屋幸右衛門へ引受作配申付置之處年限相濟候に付、此度乗出之網一帖其方申付候間出精可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>作配候、大島浦之義者漁事場所柄之義に候之間、無<sub>レ</sub>油斷<sub>レ</sub>相働追々成立候様可<sub>レ</sub>心掛<sub>レ</sub>候

寛政八年四月十日

一九

寛政八年四月  
申渡覺

蔣淵浦庄屋  
組浦  
下波浦庄屋  
北灘浦庄屋

一大島浦十右衛門網之義、去る未年以來引立之諸魚時四步六步割府たるべき旨、裁許を以網子并に十右衛門庄屋役人中へ先浦役中より申渡何も得<sub>レ</sub>其意候、然る處近年不<sub>レ</sub>漁相重り網支配難<sub>レ</sub>成に付、十右衛門存寄願之趣組合庄屋中迄不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>止事<sub>レ</sub>申出候、依

之組浦庄屋中加<sub>レ</sub>了簡、双方無<sub>レ</sub>差別<sub>レ</sub>一樣相考以<sub>レ</sub>書付<sub>レ</sub>願出候子細聞届候處、近年不<sub>レ</sub>漁打續追而網及<sub>レ</sub>破却、當然之仕入等届兼網可<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>斷絶<sub>レ</sub>而已ならず、數代之十右衛門令<sub>レ</sub>微録<sub>レ</sub>付ては浦中却而難義に相成、永々御爲不<sub>レ</sub>宜候、依<sub>レ</sub>之御裁許之上双方不<sub>レ</sub>直無<sub>レ</sub>之様被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候間、何も左の通可<sub>レ</sub>相心得<sub>レ</sub>事  
一正月より六月迄者、引立之諸魚時々其場におゐて究之通四步六步曳分け可<sub>レ</sub>申事  
一七月より極月迄は、引立之諸魚一切十右衛門へ受込網仕込可<sub>レ</sub>仕事  
但七月より極月迄、四步方諸事入用出<sub>レ</sub>目銀無<sub>レ</sub>據承<sub>レ</sub>り届十右衛門より出し、暮に至り指引可<sub>レ</sub>申事勿論、七月より極月迄十右衛門手前へ引受、銀子は暮に至り算用致し四步方へ戻<sub>レ</sub>べき分には無<sub>レ</sub>滞相渡可<sub>レ</sub>申、若令<sub>レ</sub>遲滞<sub>レ</sub>候は、其段組合迄申出譯立可<sub>レ</sub>申事、附り、十右衛門請込之諸魚賣拂候時者、横目判形取置、暮に至て惣銀子勘定、庄屋見届可<sub>レ</sub>申候  
一漁事之節、袋底水魚分け之義七月より極月迄地下人共飯料の便と相成程宛、其時々見合を以相渡可<sub>レ</sub>申事、尤隙面記置暮に至り可<sub>レ</sub>差引<sub>レ</sub>事  
一葉繩大引、其外一切四步方にて可<sub>レ</sub>仕込<sub>レ</sub>分、諸色買

一九—二〇

入之時者十右衛門より時々相渡暮に至り指引可<sub>レ</sub>申候、勿論七月より極月迄の間、其外網格之義去る未年御定之通可<sub>レ</sub>相守<sub>レ</sub>事

右之通被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>書面之趣得<sub>レ</sub>其意、地下網子急度可<sub>レ</sub>申渡<sub>レ</sub>候、就<sub>レ</sub>中大嶋網之義近年我儘之者有<sub>レ</sub>之、及<sub>レ</sub>論義<sub>レ</sub>漁事妨<sub>レ</sub>に相成趣に候、是等之義急度可<sub>レ</sub>申付<sub>レ</sub>候、右之通得<sub>レ</sub>其意<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申候、若違亂におゐては早々可<sub>レ</sub>申出<sub>レ</sub>者也  
寛政八年辰四月十日  
御 郡 所

二〇

寛政十年年二月網方メリ合之義  
に付、御郡所へ指出し書付左之通

口上覺

近年網方古法猥に相成、本網、尻付小網之差別相分がたく御座候、依<sub>レ</sub>之白浦之本網奥浦へ入込候時分は猶以中網に見紛、甚だ網遣難<sub>レ</sub>仕御座候に付、古法之通尻付小網之義は小船操にかぎり横上相立不<sub>レ</sub>申様相談

催合株  
小内

仕候  
一尻付小網之株、他浦へ名代をかし申候もの御座候而其借主居浦之網へ相障申儀間々御座候に付、自分他浦へ名代をかし不申様網持申合、尤借網之儀は勝手次第取計候様相談仕候  
右之趣御嘆申上度如斯御座候以上  
法華津内六ヶ浦庄屋中

渡江深浦催合網に左之通相違  
近年催合株にて乗出相仕成之儀、小内指支筋も有之趣、格別之用捨を以當分所方限指免置候處追々古法に相障るに付一統相談之上、隔日網遣之儀は指止可申管之所、是又近年仕成來候得者元入等いたし居、迷惑之儀も有之段無據承受重々操合用捨を以て當年中指免、來正月元日より隔日網遣之儀は指留候に付、以來心得差無之様急度相慎可申候

二一  
享和二年九月  
一浦々網代黒み伐り拂間敷事

一浦方筑出し濱致候者、新畑に願出で得御裁許可申事  
一鯛干濱者依願被下候事  
一有來鯛干濱并に濱に有之古地畑等之石垣、致被損取繕候節は届出得差圖取計可申事  
右之條々時々伺出可申管之事に候處、近來獵に相成不之儀共相聞候に付、猶以後辨違無之様委可被申聞置候以上  
享和二年九月廿八日  
少梁川主膳  
多都味衛守

中田久右衛門殿

二二  
享和四年四月  
一網代受銀別紙書拔之通右夫々被得其意、網代之名此方より書拔遣候通牒面被相認間違無之様御取計可有之候  
一五歩一御勘定帳二月十五日より廿五日迄無間違御差出可有之候

番魚  
高引  
小廻

一七歩三  
一菜魚  
一\*番魚  
一交魚  
中魚  
時見合  
右同斷  
年中の苦代

文化三寅年三月  
網方譲り状

九島より日振迄

一網買入運上銀差紙、大網小網共何某網并落々何浦と申儀書分ふり餘網にも書分け可被差出候  
一越返り是又横帳にメ浦々俵數諸魚共委數書立積出、残り有之候は、其旨も相記可差出候  
一當年分御役管二月廿日迄に無間違可被相納候、尤管仕立入念候様可被申付候  
右夫々無間違之様御心得可有之候以上  
享和四年正月廿八日  
森文

西村、嘉助  
森田三郎兵衛  
竹場六兵衛

一高引 定之通  
一玉取 供六人廻り  
但壹人づゝ、尤手船より壹人出之、右廻り當番之者えは村君より見合にてほね折可遣  
一小廻 壹人づゝ  
但壹桶遣之時見合 之内可指遣  
一代參は村君中供六人 三歩方より仕出  
一荒手分 七歩方より仕出  
一船一字  
一多がい不殘三歩分方より可指出  
一たで草 右同斷  
一網藏 屋根替へ  
手飯米之事、藁繩三歩方より可指出也  
一村君え分口 不仕出之  
右夫々天和年中相極居申候處、年久敷相成今度網方相讓申候に付、當月十五日網子共え申渡候間可被得其意候以上  
文化三寅年三月十五日  
御手洗庄兵衛  
實道 花押  
御手洗庄 吾殿  
表書之通御譲りに付、網方御定書奉得其意候以上  
村君



彌平	彌七	右網供 長兵衛	左網供 六三郎	右網せがい 善太郎	左網同 吉兵衛	右網片 政右衛門	左網同 吉五郎	横目 半兵衛	組頭 小兵衛
----	----	------------	------------	--------------	------------	-------------	------------	-----------	-----------

表書之通奉承知候

海平

二四

文化九年  
 一文化八年八月廿五日、當浦へ六ヶ浦庄屋中役人村君中出會之上、焚寄之儀相談之上九月二日迄指留三日より勝手次第之事、然共趣に寄指留之儀も可有之事  
 但夜分釣之儀指留可申事、尤居浦沖合に他所焚釣致候は、其所より指留可申事  
 一布を袋底に入候儀相止、もじ目せきを以漁事仕度奉存候  
 但餌引たりとも布を相用ひ候儀は急度御指止被成下一時々横目相改候之様被仰付、尤小網之外に小さ小網など捨、又ははだか廻し杯と名付小網引候節、跡を助け申もの間々有之、古法之通急度御指留被下置候は、締合宜敷様奉存候  
 一手線網に十四目入候て者網のふくらし悪敷候に付、魚入不申故、少々宛之目せき相用ひ申度候、ぶり網も同様仕度奉存候、尤鱒漁に相障節は、時々庄屋中申合指留候儀自由に相成候様被仰付可被下置候  
 一海平之儀、成文用拾仕候様相心得申候  
 一夜釣之儀、業前ものに付御免と申候而は締り合兼可申と奉存候、御浦手遊漁と申儀は無御座候、

右に付焚寄焚釣とも是迄仕榮え通被仰付被下置度奉存候、尤御試と被思召候儀に御座候は、焚寄焚釣とも一兩年堅御指留被成候而御試可然奉存候、然共渡世之釣舟を御免御座候時は焚釣のもの計勝手筋に相成無詮事に奉存候、釣は身共計勝手之筋に相成、惣所中之潤には相成不申候、網方漁事は惣所中之潤に相成申候、網持は庄屋役人重方に御座候得共、網子は惣て百姓に御座候  
 一ぜん網之儀は、相止候様可相心得と奉存候  
 一沖相にて調儀取之儀は、従前之御停止之處、近來は間々調儀取仕候網々も御座候間、敷網は不及申其外焚寄たりとも、途中にてくり候儀堅不仕様被仰付被下置度奉存候  
 但春分鯉魚參候而も、兎角地寄不仕ものに御座候得ば、沖相途中引仕候方宜敷奉存候御浦々にも御座候、鯉は此邊にて育申魚にても無御座通り魚の儀に御座候へば、外漁事に相障り不申時は途中引仕候方を奥三ヶ浦は相好申候、此儀は時宜に寄取計申度奉存候  
 一鯉釣之儀御指留被成候は、網方漁事可有御座と奉存候得共、一向御差留被成下候而は、小内迷惑可仕候間、其御浦々網持相談の上魚筋相障り

二四

候場所相除き、釣場所相定置其上網々より時々指圖仕、萬一相背候は、釣上之魚所方取上候様被仰付可被下置候  
 一がせ網の儀磯邊に育魚を取申候に付、急度御指留可被下置候  
 一歩分之儀、七三・八二・四六・或は廿人網様之浦々に而仕榮御座候に付、只今相改候時は至て及面倒可申と奉存候に付、小内にて干鯛仕候儀急度御指留、水魚にて網元を買取、中魚と一所に干立、五歩一吟味方に手抜無之様相心得り合申度奉存候  
 一小内こやしの儀は、成丈灰掻に仕候儀は格別、其余貫魚等水魚にて網元商人を賣渡、五歩一改方張りに相成不申様仕度奉存候  
 一五歩一改之儀、近年微細に相届兼可申哉と奉存候儀も御座候間、以來は庄屋、組頭、横目、小頭、五人組迄随分申合吟味仕候様可仕候、尤横目役杯に別而大切に入念相改候様、猶又改被仰付被下置候得ば、メリ合可申と奉存候、五歩一銀之儀は古法之通買人より相納、賣人直段等相極め候時は、其心得を以て相定候様被仰付度奉存候  
 一歩行越之儀は随分メリ合、古法之通横目所へ持參仕改受抜荷に相成不申候之様メリ合可申旨被仰付

度奉存候

一諸魚とも沖合にて賣買仕候儀、古法之通堅相慎、沖中賣不仕様被<sub>レ</sub>仰付<sub>二</sub>被<sub>三</sub>下置<sub>一</sub>度候得ば、メリ合可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>奉<sub>一</sub>存候

一御領分出買商人へ水魚賣渡候節、横目同士水魚切手取遣仕置、積出之節引合相改候は、メリ合宜敷と奉<sub>レ</sub>存候

右之通網方筋爲<sub>三</sub>締り合<sub>一</sub>申候儀御尋に付、六ヶ浦相談仕候處存慮如<sub>レ</sub>是御座候、尤も古法之儀は格別、其余之儀は是迄之仕榮之通被<sub>三</sub>仰付<sub>二</sub>被<sub>三</sub>下置<sub>一</sub>候得ば、此邊の勝手筋には相成可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>奉<sub>一</sub>存候、程能様被<sub>三</sub>仰付<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>三</sub>下置<sub>一</sub>候以上

申三月

狩濱浦

助右衛門

彌平治

法花津浦

祐右衛門

深浦

庄兵衛

白浦

赤松佐左衛門

鈴木治兵衛様

二五

文政二卯年

永代賣渡證文事

一小結出網乗出壹帖株共

代六々錢八貫七百目

右之通永代其許え賣渡候所實正明白候、尤網代之儀は御上御引付帳之通相渡可<sub>レ</sub>申候、并網子拾八人相添申候上は子孫に至候ても少しも違亂申間敷候、爲<sub>二</sub>後證<sub>一</sub>一札如<sub>レ</sub>件

文政二卯年正月

賣主庄屋

兵左衛門

加判横目

庄右衛門

與頭

善右衛門

同

六郎兵衛

同

七之進

金 藏殿へ

前書之通相違無<sub>レ</sub>之候以上

渡江浦庄屋

彌平治

二六

文政二卯年

引付之事

一本網一帖

右之通從<sub>三</sub>先年<sub>一</sub>乗出申に付、小狩濱家の前すの崎右二ヶ所の網代網付に申付候條、其方可<sub>レ</sub>爲<sub>三</sub>支配<sub>一</sub>候得共、今度網方一統相改候に付如<sub>レ</sub>是候者也

文政二卯年十二月

高月繼右衛門

森川與惣兵衛

安達甚右衛門

狩濱浦村君與頭

忠三郎へ

右は天保五年午四月廿日御庄屋所より引付差出候様仰被<sub>レ</sub>越候に付如<sub>レ</sub>此うつし置候

二七

文政三年

網遺定の事

一庄屋請網代にて、庄屋本網貳帖前網遺候義、以前之通網遺可<sub>レ</sub>致事、尤尻付網は外本網に相障不<sub>レ</sub>申様、以後可<sub>レ</sub>被<sub>三</sub>相心得<sub>一</sub>事  
一此度庄屋役人中内にて世話等申結候義、拙者共迄申出、御重役方え申上候節者面倒成義も出來候に付、組合庄屋中よりは是非内済に願下<sub>レ</sub>與候様被<sub>三</sub>申出<sub>一</sub>候に付、兩人え相任せ候間以後心得違無<sub>レ</sub>之様可<sub>レ</sub>被<sub>三</sub>相心得<sub>一</sub>候事  
一貞兵衛新網の義、内々被<sub>三</sub>斷出<sub>一</sub>候へ共、故障之義も有<sub>レ</sub>之候に付、先此度者其儘に指置可<sub>レ</sub>申候  
一役人中内々申出候義、其子細難<sub>三</sub>相分<sub>一</sub>候に付、先致<sub>二</sub>延引<sub>一</sub>以前之通相心得可<sub>レ</sub>申候事  
一尻付網の義我儘成網遺致間敷候事、尤本網に相障候義堅く仕間敷候事、以後者駈と申合世話等出來不<sub>レ</sub>申様申合置候事  
一小尻付網の義堅く無用之事

右之通双方共心得違無之様、得と御申付置可有之候以上

文政三年辰九月七日

鈴木作兵衛

下波浦

古平治殿

北灘浦

清五郎殿

二八

一文政七申年二月廿二日、依津浦へ六ヶ浦庄屋中並網持中寄合相談左之通

一本網相仕成之面々勝手筋を申立、貳帖に致し隔日之網遣ひ等有之、漁事之節は難見分け、指支に相成に付催合株之分は壹帖乗出可限事

但無據分は其子細庄屋所へ斷出之上、隔年可相仕成一事勿論、其株より壹帖之乗出御法之事故、永々之格にも不相成候に付、隔年仕成之面々は格別之元入等致間敷候、何時差留候とも指支に不相成候様可相心得之事

一法花津内は元來網敷之事故、焚寄等之節は火敷に相成漁事不勝手之儀も有之候に付、以來は本網之外焚寄等致間敷事

右之通相談相極候處、小網焚寄之儀は寄々相談之上可被相極一事

催合株別に網隔日網遣之儀は、白浦嘉平治、藤助、渡江勇藏、祐三郎、迷惑之趣に付、網持中より喚出も有之に付、今日參會之面々より斷等之儀は如何敷候得共追而所方喚出も候は、再會之上承合可申段申聞候て一統退出致事

一追々斷出も有之趣に付參會可申管に候處、諸用差支延引相成候内漁事之時節相成候故文通相談之上左之通相極候事

一渡江勇藏、助三郎、深浦七兵衛、半兵衛、網遣之義其所限當分用捨を以て隔日致置候處、指障相成候前相談之上相極候處、右之者共迷惑之趣喚出候に付、當六月晦日迄隔日網遣之儀用捨、七月朔日より網遣は六ヶ浦相談之上相極可申事

附り、白浦嘉平治、藤助、網遣ひ之儀は、庄屋手網二帖之内、鼻組網相止め右兩人へ借付に付、網遣ひ之儀指支無之事  
文政七年二月

二九

文政七申年

一文政七申年七月二十一日、法花津浦へ參會之上相談左之通

一催合網隔日網遣ひ之儀、於依津浦相決候通、當月より急度指留可申處、小内無據指支筋も有之趣難三歇止重々以用捨當年中隔日網遣指免候に付、漁事之節心得違無之様浦々にて可申付一事

一尻付小網催合株之面々、隔日網遣致し浦々も有之之儀之事候間、以來前文に相定候本網之通可相心得一事

一はだか廻網之儀は前度被仰出も有之處、近年獲之儀も有之以來急度指留可申事  
文政七年七月

三〇

文政七申年

川名津

一銀五百三十七匁貳厘貳毛

但網之數二帖、一帖に付貳百六十八匁五分一厘一毛右之通儲受取申候、尤安永五申年網方へ被下銀當着御割渡被成下難有銘々頂戴仕候、則判形仕指上申候、仍如件  
文政七申年十二月廿四日

庄屋

與左衛門

村君

政右衛門

鈴木作兵衛様

三一

天保五巳年八月

引付之事

其方義安永六酉年依願結出網一帖乗出指免候、依之其浦にて網代一ヶ所可指遣處、其節は網付の外網代無之に付渡江浦の内にて大小島網代一ヶ所網付申付置候、此度彼網代爲指返、右代に其浦之内水ヶ尻網代一ヶ所結出網付申付候條其方可爲支配候、若結

出網令二懈怠候は、右之網代返上可申者也

天保五巳年八月廿四日

柴田金右衛門  
小島源太夫

俵津浦

吉郎兵衛へ

三三二

天保六未年七月

網方定之事

- 一 一しらみなたらは網代取候網引可申事
- 一 焚寄の節、網代に壹艘寄せ暫く後の火船を待申間敷事、其船壹艘分引候事は不苦事
- 一 横せより通り筋にかゝり焚寄致間敷事
- 一 貳番網は取かけ繩迄押かけ取可申事
- 一 自分の網代の時は、前網繩をはなしみやうし沖へ向候は、外網へ爲引申間敷事
- 一 外網安代の時網遣いの節は、前網はなしみやうし沖へ向候は、其網代取可申事
- 一 外網の安代にてをきはなし、萬一魚廻り不申時、前網はなし候は、とれ不申事、右跡をねらは、網

しらみなたら  
漲がり

は内へ押込可申事

一 外網の網代にておきはなし、魚廻り不申時、網取上不申候は、其網代とれ申間敷事

一 干濱之事、大染網ぬい上げ候翌日も網干不申候は、三日目より外網干候而も不苦事、又打續染候は、不苦候

一 新網切候か又は切替網等干候時はかわ桶水染之網等にて持參候は、とれ可申事、雖然よく日より相續干不申候は、とれ申間敷事、三日目より外網干候而も不苦事、尤不天氣成ば致方もなく候へ共、天氣ならば一日も懈怠なく干上可申事

一 自分大染之時外網より濱かりに參り候は、右濱へ押上げ候網かへし可申事

一 島の元濱は小谷濱へ付可申事

三三三

右之通相定置候もの也

天保六未年七月廿九日

庄屋所

天保八年

網二歩分け之事

- 一 大網小網漁事候節高引残四歩六歩定
- 一 一六歩は網方へ受取四歩は網子中へ相渡、尤四歩の内貳歩は網方へ年中買戻し、残る貳歩は水魚に而網子の方へ時々相渡事、此内も肥しに余り候節は不致脇賣網方へ賣拂可申事
- 一 肥の時節に相成候時は、網方へ時々斷出四歩水魚にて受取候事
- 一 貳斗貳升入にて桶回しの定、時之相場にして直段相極候事
- 一 肥に致候節はいかきにして干置事
- 一 魚貫杯に袋の内にてすいで等入る事堅不相成事
- 一 魚貫は濱揚之時分網方網子中見計にて遣事
- 一 沖役并體押、梶子たりとも魚遺獲に致間敷事、右之通村君中井網子中一統承知之上相定候上は、聊獲之義無之様精々申合、勝手ケ間敷義不致様相心得可被申候以上

天保八酉年二月九日

立間尻浦庄屋

御用掛 清兵衛

下波浦庄屋

組合 徳之充

三四

天保八酉年

川名津

御断申上候事

昨九日當浦九兵衛網芝山に而網置申候所、上泊網植木より押懸指留、双方論じくゝり合候所、外網より参色々取計候而網者爲繰申候、夫より九兵衛上泊浦に乗込居候に付、上泊横目藤右衛門私方へ參候に付、與頭彌左衛門兩人指遣、網は當方に乗歸り明日より漁事仕候様申遣候所、御裁許受度よし申候而何分歸り不申、今朝も與頭彌左衛門指遣候而双方共ぬれ網之事故干候上にて不苦候様申聞候得共、網子ども何分承知不仕此儘御裁許受度よし申候而承知不仕候に付、乍恐此段御伺申上候以上

酉八月十日

伊尾喜春野宛

久右衛門

一 此間御断申上候上泊浦と網論之義、甚左衛門へ被仰聞候趣承知仕候、右に付與合昨日被參候而双方共與合え爲相任候に付、右様御承知可被成下候、尤



網干候義者甚左衛門歸り不申内私計にて爲干申候、右之段與合よりも申上候得共役使御坐候に付此段申上候以上

八月八日

久右衛門

伊尾喜春野宛

與合十一日夕被參夜五つ頃上浦へ被參候

三五

天保九年四月

御郡奉行中々

蔣淵浦組頭

十左衛門

近年小網仕出し候處相應漁事も有之に付、爲冥加金子三拾兩指上度段申出神妙之事に候、則聞届候條指出候様可被申付候

蔣淵浦組頭

十左衛門

其方小網にて漁事度毎に引初穂として少々宛除置、此度取都め金三拾兩指上度旨申出甚神妙之趣を以御請納

有之候、依之何等賞筋等も可申付一處實意を以申出候次第も有之重々奇特之事に候、乍併小網出精之上指上候事故ちぎり外平引出し候網代一ヶ所、當分其方小網付申付候條猶此上相勵可令出精候

天保九年四月

三六

天保九年四月

態と申達候、然者此度蔣淵浦十左衛門小網にて漁事度毎に引初穂として除置候銀、此度取都め金三十兩指上度旨申出、甚神妙之趣を以御受納有之候、右爲御賞、蔣淵浦の内ちぎ利外平引出網代壹ヶ所當分小網付被仰付候間被得其意、漁事之節網置論等無之様沖村君并網子之者へも可被申付候、此狀印形候而順達留より組頭十左衛門へ可被相渡候以上

天保九年四月十三日

青野久太夫

伊尾喜貞五兵衛

立間尻浦

南君浦

天保十四年

蔣淵浦組頭

源左衛門網

各通 村君網子中

同上

源左衛門新網

各通 村君網子中

當年稀成漁事に而、格外令出精候趣聞届一段之事に候、依て奥書之通酒指遣候條尙又出精可相勵候

酒六升

蔣淵浦組頭

又左衛門網

村君網子中

同上

同上

三九

天保十五年辰年六月

庄屋格

下波浦  
北灘浦

三七

天保十一年八月

引付之事

一本網登帖

此網代

落網代

畑之浦網代

右之通前々より乗出申に付、右網代網付申付候之條其方可爲支配候、尤前々より定置候得共此度網方一統引付相改候に付如此者也

天保十一年八月

國府寺 只八印

松下 求馬印

狩濱浦村君商人

金 藏え

三八

蔣淵浦

十左衛門

舊臘江戸表御屋敷御類焼に付、御物入之程奉<sub>レ</sub>恐察<sub>二</sub>金高七十兩指上則御受納被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>候所、速に皆納令<sub>レ</sub>免候段差以出精之事に候、右爲<sub>レ</sub>賞其方尻付網格別以<sub>二</sub>評議<sub>一</sub>結出網に相直し遣候條可<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>候、尤網遺之義所方之義者、是迄之通指置寄網出引參候節前網遺候義者、何之子細も無<sub>レ</sub>之候之條、尙又漁事方出精可<sub>二</sub>相勵<sub>一</sub>候

天保十五辰年六月

右之通此度被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>候間、各被<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>網置論等無<sub>レ</sub>之條、村君并地下人共々駈と可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申付<sub>一</sub>候、此帖印形候而留より蔣淵浦十左衛門へ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>相渡<sub>一</sub>候以上

辰六月十五日

森口 幡治  
伊尾喜貞五兵衛

下波浦  
北灘浦  
右庄屋中

四〇

弘化三年

蔣淵浦組頭

源左衛門

當秋御觸御用に付豊後白杵之指遣候所、御用高も相捕令<sub>二</sub>出精<sub>一</sub>候に付爲<sub>二</sub>心付<sub>一</sub>遣<sub>レ</sub>之

米貳斗

四一

嘉永元年七月

態と申達候、然者手操其外沖相にて調議取之義者、本網之障に相成候間前々より御停止被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>候處、不漁之節は及<sub>二</sub>難儀<sub>一</sub>候御百姓共も有<sub>レ</sub>之候に付、御郡奉行衆思召を以十月より翌五月迄御免被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>、六月中より九月迄御停止被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>候處、御用捨筋を以御免被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>候間可<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>候、尤本網相障義有<sub>レ</sub>之候節は早々申出候様御申付可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候  
一本網乗出候爲、見分近日之内御觸方被<sub>レ</sub>指遣<sub>一</sub>候之間其節不審無<sub>レ</sub>之條可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申付<sub>一</sub>候

右之通網持中へ御申付可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候以上

嘉永元年七月初日

兵頭 官右衛門  
伊尾嘉貞五兵衛

四二

嘉永三戊

川名津

態と申達候、然者近來御浦手網遺網代境網干場等の儀に付、彼是故障之義も不<sub>レ</sub>少趣粗相聞候、御浦に仕業先規より相極候通可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>相心得<sub>一</sub>候、新に御庄屋役人又者村君勝手筋に相泥み、一已に相改候義者決而不<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>候之間、若心得違の義有<sub>レ</sub>之候得ば見聞之上急度相糺、御裁許可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>候

一御浦手近來不漁に付て者、村君中難澁相迫り候面々も不<sub>レ</sub>少儀一統承知之事に候、然に網子中には何等と名を付酒吞候而、網方之難澁者指置、定格之外に度々酒宴相催、彌増網方不<sub>二</sub>相立<sub>一</sub>趣相聞、右様之義は網子中にも勘辨之可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之義本意の所無<sub>二</sub>其儀<sub>一</sub>苦々敷事に候、漁事等致候節は格別、祝酒其外定例之外臨時の酒宴等相催候義は相控可<sub>レ</sub>申義勿論之事に候、別而近來不漁に付者網方拜借等被<sub>レ</sub>嘆出、格別之

以御評議御下げ金も有<sub>レ</sub>之候得共、彌増不漁に而又返上方年延嘆出者有<sub>レ</sub>之、右之様の時合に候得ば猶又一統にも網方取行候之義、平常之儉約をも相加へ斟酌をも可<sub>レ</sub>致事候前顯之趣網子中にも駈と相心得候様可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申付<sub>一</sub>候  
一漁事之節、近來別而貴人多く網元之迷惑相成候様粗相聞、手數有<sub>レ</sub>之面々者網乗を嫌、貴人に參候而手數に<sub>レ</sub>貴魚之余計有<sub>レ</sub>之心掛て甚不入氣之族も有<sub>レ</sub>之由、太段漁事之節は村君勘辨を以菜之魚を遣し候義其時々引立之多少に寄り取計、元來網仕入等は格別之銀高を以て仕成有<sub>レ</sub>之、不漁打續候時は彌増困窮相迫り、然ば引立候魚偶々有<sub>レ</sub>之連、菜之魚并貴人え多分ちらけ候而者網方不<sub>二</sub>立行<sub>一</sub>義にて、是等之譯合者網子中者勿論所方之面々斟酌致事にて、以來急度相心得可<sub>レ</sub>申様可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申聞<sub>一</sub>候  
右之趣可<sub>二</sub>相達<sub>一</sub>様御奉行衆御沙汰候之條、心得違無<sub>レ</sub>之様急度可<sub>レ</sub>申付<sub>一</sub>候、以後心得違等閑の族有<sub>レ</sub>之においは、御庄屋役人越度之御沙汰可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>及候間可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>候、此段申達候以上

戊二月廿一日

兵頭 官右衛門  
伊尾喜貞五兵衛

四三

嘉永三年  
口上書之事

一小網拾歩一之義は、是迄所に置は村組久兵衛網子中之株と心得居申候は、高十歩一指出申候得共、網子中之所に置者四歩分受のき仕候て、拾歩一之義者四歩分の處者得出し不申候様、何も申候間右之段以三口上申上候、爲後日仍如件

戊十二月

小網

網子中

四四

嘉永四年

奉願口上書之事

一網方近來不料(漁)にして、分けて去成年むごひ(酷ならん)不料、然る所御庄屋様より前々指出し候十分一之義、計立指出候様被仰付候處、其時私御断申上候には當年は御承知之通大不料之事故、御連めん

嘉永四年亥年正月

當浦村君

久兵衛

御用所

嘉永四年二月

川名津

口上書

當浦小網株より引高拾歩一、先年より庄屋方へ受取來申候、右小網株寛保二戌年より懈怠仕居候處、寶曆四戌年村君久兵衛祖父久兵衛右小網株にて本網乗出仕度御願申上候御座候、其節も先規之通七月朔日より十一月晦日迄、本網小網不引高拾分一庄屋方へ受取管にて、村君久兵衛網子中連判之證文御座候而、一昨年迄受取來申候、去暮久兵衛并網子中拾歩一算用仕持參候様申聞遣、其後久兵衛參り此間被仰聞候拾歩一之義、當年は不漁にて拾歩一と申も聊之義に御座候間用拾致吳候様申出候に付、私より申すに者多少に不拘趣意相立置候申聞置候、然る處網子中より申出に者、只今迄村君者久兵衛にて網株者網子中之株と相心得居申候處、此度久兵衛之網株と相決し申候に付、拾歩一之義者網子中者得出し不申段申出候、并久兵衛義も網子中得出し不申候は、私計指出申義も迷惑奉存候、其内駈と指出不申様申上候義も申上兼候様申出候、且前々者秋三月と申傳候處、此頃者五ヶ月之間被仰付候義は迷惑千萬に奉存候、并他引之分者用拾致吳候様是又申出候に付、追々勘辨も可仕と奉存候處親義者病中にて右様之引合難仕候に付、其儘拾置申

候處無間も死去仕、被是取紛其儘に指置申候、此間者上泊浦友左衛門へ及相談被是取扱實候得共、何分網子中承知不仕、私義も當春相續被仰付無間も右様之義御伺申上候義も、重々恐入次第と奉存候に付可成者内々に而爲相濟申度、前文之通色々取扱實候得共網子中承知不仕、無是非御伺申上候、猶又久兵衛并網子中口上書前度指出し、證文寫掛御目申候間御勘考之上宜御指圖被成下度、此段御内々御伺申上候以上

嘉永四年二月廿三日

川名津浦庄屋

久右衛門

伊尾喜庄藏様

へ一通

伊尾喜貞五兵衛様

へ一通

兵頭官左衛門様

四六

嘉永四亥

川名津

態と申達候、然ば網方之義に付御法も有之、度々相觸候通に而心得違無之筈之所、近來漁事之節網代數を持候者共、一網代をかまへ候上又外網代へも手船を

乗付、網代取等致候者有之敷に粗相聞、以の外之事に候、以來右様の義不<sub>レ</sub>相成<sub>一</sub>候間若<sub>レ</sub>不心得のもの有<sub>レ</sub>之においては、急度御裁許可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>候間猥<sub>レ</sub>之義無<sub>レ</sub>之様、村君中へ駈<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申聞置、右之趣御奉行衆より被<sub>レ</sub>仰聞<sub>一</sub>候間此段申達候以上

亥四月初日

兵頭官左衛門  
伊尾喜貞五兵衛

四七

嘉永四亥

川名津

嘉永四亥年六月、御浦方伊尾喜貞五兵衛殿、郷目付宇太夫殿御郡渡候、御廻在之上役人中、小頭中、出買商人中、船持、御百姓惣代御呼出之上被<sub>レ</sub>仰渡<sub>一</sub>候

浦々

庄屋  
役人  
商人  
船持  
百姓中

浦手五歩一銀の義は、御物成に指續候御收納物にて、

御締合御定法前以申渡置、分而去る文化九申年、其後文化十四申年、弘化二巳年、宇和島表へ被<sub>レ</sub>仰合<sub>一</sub>候次第も有<sub>レ</sub>之、御浦方役廻浦之上申渡、庄屋役人請書致し印形指出候、近頃は追々五歩一銀も相増候之處、近來不漁打續彌増難遊押移候所、當年は稀成漁事と相成然る所五歩一之義は未御締合相立候と申にも無<sub>レ</sub>之、間には公之御政道抔と心得違之者も有<sub>レ</sub>之哉に相聞、以之外行違之義と苦々敷事候、畢竟札頭、横目共、積出不<sub>レ</sub>吟味<sub>一</sub>故之義には無<sub>レ</sub>之哉、仍て向後漁事有<sub>レ</sub>之節は御浦方役、并手附之面々爲<sub>レ</sub>見合<sub>一</sub>廻浦申付、庄屋役人精不精之處相札候様申付置、且出船札断出候時分積荷物不審有<sub>レ</sub>之節は札取之もの留置、不意御役人指向船中改方<sub>一</sub>相違之義有<sub>レ</sub>之においては、急度札明之上賣人買人は勿論、札頭、横目嚴重之裁許可<sub>レ</sub>申付<sub>一</sub>候、右様申渡候義御吟味強きよふ存成候而は、以の外之義に而皆下方之者心得違にて、其罪に被<sub>レ</sub>相行<sub>一</sub>候之様押移候は不便之事に候、仍て心得方猶又改申渡候條、不實之義以後聊にても無<sub>レ</sub>之様庄屋役人相心得、地下人共へも精々可<sub>レ</sub>申聞<sub>一</sub>、  
一御浦中諸魚以<sub>レ</sub>積荷<sub>一</sub>五歩一銀被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>候通り、庄屋札頭、村君、横目出船之節、地旅共違<sub>レ</sub>吟味、少も不<sub>レ</sub>申隱<sub>一</sub>改可<sub>レ</sub>申事、附り、步行越之義御番所之外協道等仕

り、抜荷物少も爲<sub>レ</sub>致申間敷候、并干鯛、搔鯛使之大小地旅共爲<sub>レ</sub>致不<sub>レ</sub>申、尤俵之内不<sub>レ</sub>紛様可<sub>レ</sub>違<sub>一</sub>吟味<sub>一</sub>事一字和島御領之網、當御領にて致<sub>一</sub>漁事<sub>一</sub>候之節は、貳歩銀取立、公儀網代之分は御勘定之節仕出可<sub>レ</sub>申事  
一右引立之水魚居浦へ取歸候は、五歩一銀取立置、是亦御勘定之節御臨時に仕出可<sub>レ</sub>申事  
一公儀網代、請網代無<sub>レ</sub>紛様、水魚貳歩物違<sub>一</sub>吟味<sub>一</sub>事附り、沖相に而渡海船へかくしうり仕間敷事  
右貳ヶ條、古法之通横目役申付候時分、神文前書有<sub>レ</sub>之内則午王に血判致有<sub>レ</sub>之候故、承知之事に候得共忘却は不<sub>レ</sub>致哉、前文申渡候通當時之横目勤方、神文前書に致<sub>一</sub>齟齬<sub>一</sub>候様相聞候、役義之本躰不<sub>レ</sub>取失<sub>一</sub>様無<sub>レ</sub>遠慮<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>違<sub>一</sub>吟味<sub>一</sub>候、又所方之者ども横目勤方相辨吟味強きよふには存成申間敷候、決而此度新法を以<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰出<sub>一</sub>事には無<sub>レ</sub>之、往古より之御定法に候條堅可<sub>レ</sub>相守<sub>一</sub>事に候、右之趣夫々得<sub>レ</sub>其意<sub>一</sub>出精可<sub>レ</sub>令<sub>一</sub>漁事<sub>一</sub>者也  
亥六月

四八

嘉永四年

別紙口達  
一御浦手漁事に付見聞に渡候處、間々には不人氣相慕り網乗組を嫌ひ、網々を廻り貫人に心掛け候より、引揚之節は多人數罷越網主及迷惑<sub>一</sub>候由、第一五歩一方に相拘り、仍て近頃申觸候得共不<sub>レ</sub>相用<sub>一</sub>趣に相聞苦々敷事に候、其網に乗出之家内は格別、其網へ罷越手傳等いたし爲<sub>レ</sub>筋可<sub>レ</sub>相成<sub>一</sub>様心を盡し可<sub>レ</sub>申事に候、御百姓中は只敷心に不<sub>レ</sub>傾様實義に可<sub>レ</sub>相心得<sub>一</sub>候  
一乗組之網子共、處々仍て殊之外法外之致方有<sub>レ</sub>之哉に相聞、元來漁事之節魚分ち方之義は仕榮之通子細無<sub>レ</sub>之事に候、外に茶之魚と名付銘々取候義は、太段小内定も有<sub>レ</sub>之哉に相聞、然るを右魚貫之多少を論じ心に不<sub>レ</sub>叶時は網船を隨意に乗歸候など悪心を含、網主難遊に及致方も有<sub>レ</sub>之哉に相聞、言語同斷不届至極之事に候、若哉網主之仕向欲心敷道理に不<sub>レ</sub>相當<sub>一</sub>義は能々取調相斷可<sub>レ</sub>任<sub>一</sub>道理<sub>一</sub>候、以來右様漁事之時合を妨、卒爾に網船等乗歸り、法外之致方等於<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之は急度相札可<sub>レ</sub>及<sub>一</sub>裁許<sub>一</sub>候、勿論菜魚之名目に候得ば多分取候義無<sub>レ</sub>之、網登帖之乗出も容易に出来候事に無<sub>レ</sub>之、引立之魚法外之引方有<sub>レ</sub>之時は無<sub>レ</sub>是非<sub>一</sub>網元も不<sub>レ</sub>相立<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>據仕込等も疎に相成、



終には漁事も不致様不仕合に成行、然る時は網子共難澁相迫可申故、夫等之處は第一網子共可相心得一事に候、決而不人情に不相成様可申合候

一漁事之節小内にて賣魚干立之儀は、前に灰掻に限り白干不相成旨は一統承知之事に候、近來猥に相成決而御定通り不相背様急度可申付候、若相背候族有之おいては見當次第其品取揚可被仰付候

但賣魚干立之上、萬一隠賣等致候者有之おいては、殿敷御裁許可被仰付候、役前之面々心掛遂心味、其所々商人共へ買取候之様無油斷可令心配候

一水魚にて他浦商人へ賣渡候儀、可相成其浦之出買商人に而買取候様爲致可申候、若無據他浦商人へ賣渡候節は、双方札頭、横目承届遂心味、俵數腕と相改紙面に相届置、追而御臨時仕立御勘定可遂様可取計候

一字和島御領より水魚にて相調候而、彼方横目改之越手形附に有之、又當方にて五歩一銀相立可申事、是は專漁事有之節其見分け難致、紛敷義も有之に付、二重之運上に相當候得共、前々仕榮に付如斯、近來間々辨違之所々も有之、心得違無様猶又改申渡候一字和島御領より干鯛積合之節は、彼方横目役越手形

見届、無運上にて仕立之義是迄の通、尤彼方俵敷改前之所重々入念船中改可申事

一出船毎度積切手指出則裏印相加相渡候、決而右員數改方之義間違無之様、猶又入念可申候、彼御領より入津之頃改有之、何等相違之義有之時は荷主は勿論御掛合にも相成、面倒可押移故無油斷改方可申付事

一先頃被相觸候通當年稀成漁事に付ては、別而網方合は勿論銘々考辨を盡し、則書面之通決而等閑に相心得申間敷事

右被仰出候趣、并別紙之趣共得と致承知、無間違様相守可申候、只御取箇(取り方敷取りけ敷)に相拘候様決而相心得申間敷候、五歩一方之義は前以殿重之御法相立、近來間々等閑之義も有之一統心得違之事共有之に付、改申渡候條一統御筋法相守出精漁事可相勵候

夏六月

右様被仰出候に付ては六月十三日當浦へ寄會之上相定

網方合之事

一近來網方不締に付、此度御違之趣も有之、左之通

相定

一網引立之節袋底へ少も付不申、引かへしに致候事

但菜之魚喰用程遺義は格別之事

一賣人は村方に限にて、他浦よりは一切參候事不相成事

但網主より菜魚遺時、賣魚少々迎不足申候事不

相成、網主存慮次第、但他浦之網參候節貳歩見之外一切參不申事、但手傳に參候者は格別之事

一賣人も其網之網子之又内等にて、其餘のもの參候事用捨之事

一賣人へ遺候儀、網船又は手船にて一所之外遺事無用

一近來網方酒扱多く猥之義有之に付、以來印酒之外一切相用申間敷事

但手船に足不申候は、印建候事不相成候事

一五歩一銀の義は、煮取豊俵に付六々四匁貳歩づ、尤小内より商人買取候節、網方之直段同様に買取可申事

一煮魚としては迄賣來候所々も有之由、以來決而遺不申、若沖合にて喰事致候之節は、鍋に二盃限遺し可申事

一袋底にすいでを付候義、都て無用之事

一魚貨之ものへは不同無之様、桶に計候て遺可申事

尤賣人働次第多少可有之事

四九

口上之覺

川名津浦小網、同浦網代、他浦網代たり共引立十分一御庄屋手元へ取來り申候處、去暮より久兵衛内分指支候に付用捨筋致吳候様斷出、并網子共者久兵衛網株と相定候は、一錢も得差出し不申様申出候由に付、當六月上泊浦友左衛門度々罷越内熟取計候得共、何分落着も不仕候間此度秋共立合、久兵衛難澁者之事故壹ヶ年に付銀三十目宛、二拾ヶ年の間引立之内にて差出可申旨申間候處、右者承知仕候、左候は、村君網子中より、貳拾ヶ年先者以前相戻すとの證文差出置可申様、申付候は、不得心御座候間、無據御伺申上候、然る處賣曆四戌年御庄屋へ受取御坐候證文には、七月朔日より十一月晦日迄の十歩一差出可申と御坐候處、元來久兵衛の網株にも御座候、且者村君相替候は、月限者如何様共御相談可被下と書入御座候事故、七月朔日より九月晦日迄三ヶ月之間、何方に引寄候共本網小網に不限十分一御庄屋手元へ取立候様、被仰

付被下置候は、趣意相立候様奉存候、又者十歩一御庄屋へ一錢も取立不申様被仰付候は、小網網代、御庄屋網代、是迄打込隔日に網道仕來り候處、右銘々持網代引分候様被仰付可被下置候、尤村君網子之手元如何様共被仰付候而も、致方無御座候段申出に付、此段御伺申上候以上  
亥八月  
安土浦  
庄右衛門  
上泊浦  
友右衛門  
朝立浦  
菅長右衛門

中井平左衛門様  
御浦方宛

五〇

嘉永四亥年十月十三日御郡所にて御達之寫  
川名津  
上灘内横目中え別  
而申渡候口達之覺

宇和島御領より水魚にて買受取歸候分者、當方にて五歩一銀相立御札受候様兼々相達置候處、間々に者心得違の者も有之哉に、當時別而煮取干加と相斷、彼浦横目等之越切手を以多分斷出有之趣相聞甚疑數事に候、彌相背者於顯者横目とも越度之沙汰に可及候條此旨急度相心得可罷在候也

五一

嘉永四亥年十月十三日御郡所にて御達之寫  
川名津  
口達之覺  
浦々庄屋  
横目中

今年は一統稀成漁事にて一段之事に候、然る所其沙汰而已に而一向積出等少く甚以不審之所々も有之、元來五歩一方之義は度々横目共へ合之義急度申付有之事故、不都合之義は有之間敷候得共、粗等閑之者も有之哉に相聞、係る時合別而心懸、役前之本意不<sub>二</sub>相失<sub>一</sub>様急度可<sub>二</sub>相勤<sub>一</sub>候、度々右様申渡候上は、若何等疑數事も於有之者急度可<sub>二</sub>及<sub>一</sub>糺合候條、聊油斷無

之様心懸可<sub>二</sub>相勤<sub>一</sub>候

五二

兼而御伺申上候川名津浦久兵衛網十分一之義に付、此度久兵衛網子手元承糺候様被仰聞候に付、得と申聞候得共右證文者得差出不申段申出候、右に付而者何分手段に難及御座候間、此上者何等御糺之上可<sub>二</sub>然様被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>被<sub>二</sub>下置<sub>一</sub>候様奉<sub>二</sub>伺上<sub>一</sub>候以上  
寅二月十九日  
上泊浦  
友右衛門  
毛利又左衛門様

毛利又左衛門様

五三

兼々御伺申上候久兵衛網十分一之義、此間出勤之節被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>候通、上泊浦友右衛門へ相頼久兵衛并網子中手元承糺候處、別紙之通御座候て如何様取計候而も

内熟難仕奉存候間、乍<sub>レ</sub>恐何卒急々御裁許被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>被<sub>二</sub>下置<sub>一</sub>候様御斷申上候、此段御伺申上候以上  
寅六月廿三日  
川名津浦  
久右衛門  
毛利又左衛門様  
兵頭官左衛門様

五四

態與得<sub>二</sub>御意<sub>一</sub>候、然者川名津浦久兵衛義實曆年中より網乗出御免被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>、其頃より御庄屋手元え引立之十分一指出來別紙證文も有之候處、此四五ヶ年以前久兵衛義網子中と故障筋申立之義有之、其節より網子之者共申出候者、右十分一者久兵衛一人より指出可<sub>二</sub>然、引立之内に而得指出不<sub>レ</sub>申、又久兵衛義引高之内より指出向之證文にも相成居候得者、惣高之内ならでは得出不<sub>レ</sub>申様申立、彼是及<sub>二</sub>面倒<sub>一</sub>上泊浦友右衛門にて色々取扱候得共何分譯立不<sub>レ</sub>申、依而兩三年前被<sub>二</sub>伺出<sub>一</sub>、其頃貞五兵衛より右十歩一之所何故指出來候と申趣意も惣而不<sub>二</sub>相分<sub>一</sub>候故、左之向々可<sub>二</sub>及<sub>一</sub>内熟一段申聞、依而友右衛門義右等之處諭し方取計候得共、何分久兵

衛を始網子中共落合兼候由に而其儘に相成居、近頃久右衛門より度々落着之義被<sub>レ</sub>申出候故、尙又右之内熟之所友右衛門を以諭し方に爲<sub>レ</sub>及候得共、何分熟談相整不<sub>レ</sub>申候に付、何等御裁許被<sub>レ</sub>成下<sub>一</sub>度候伺出も有<sub>レ</sub>之、色々及<sub>二</sub>評議<sub>一</sub>候得共右十分一之處者、何故差出來り候と申義も不<sub>二</sub>相分<sub>一</sub>候得者、仕榮とは乍<sub>レ</sub>申元來小内にて之定に候得者、表立候時者何等ケ様と申趣意不<sub>二</sub>相分<sub>一</sub>候而は、取極而之御才許にも難<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>及、殊に久兵衛網と申而も外同様の本網にて、網役等も脇並に相勤居候得者、其上に十分一を庄屋え指出候者迷惑之筋にも可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之と存候、然共右網久兵衛乘出候以前より十歩一者立來り、又久兵衛引受候節は駈と證文も指出來候得者、今更爲<sub>二</sub>相止<sub>一</sub>候筋は無<sub>レ</sub>之義には候得共、前頭之通趣意不<sub>二</sub>相分<sub>一</sub>候而者表立候時は其通に難<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>事故、兼て貞五兵衛より及<sub>二</sub>指圖<sub>一</sub>候通、是非内熟之場を以取治不<sub>レ</sub>申而者不<sub>レ</sub>工合にも存候間、此度御奉行業へも相伺候處、貴様方御兩所え及<sub>二</sub>御沙汰<sub>一</sub>、乍<sub>レ</sub>御苦勞川名津浦え被<sub>レ</sub>罷越<sub>一</sub>候而、委細友右衛門へ御尋合御相談之上程能及<sub>二</sub>内熟<sub>一</sub>候様御取計可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候、右等之次第呼出之上可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>御沙汰<sub>一</sub>筋に候得共、遠路之義故荒々以<sub>二</sub>書中<sub>一</sub>申達候、右之趣被<sub>レ</sub>得其意早々御取計可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候、此段申達候以上

五五

寅閏七月七日 兵頭官右衛門 毛利又左衛門  
 垣生浦 伊藤儀左衛門殿  
 有立浦 五右衛門殿

貞五兵衛より及<sub>二</sub>指圖<sub>一</sub>候内熟之次第  
 一十歩一之義者先年より仕榮之義に候得者、今更相改可<sub>レ</sub>相止<sub>一</sub>義には無<sub>レ</sub>之、乍<sub>レ</sub>然先年より全引立の十分一に相當文指出來候と申にも無<sub>レ</sub>之、年々漁事模様によつて五十目七十目又は百目と申様受取來候敷、然者御庄屋手許にも全挽徳に拘り候義には無<sub>レ</sub>之、仕榮之相崩候處嘆ケ敷事に可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候得者、豊ヶ年三拾目宛二十ヶ年之間指出、二十ヶ年より以前之通十歩一を無<sub>レ</sub>異義<sub>二</sub>相立可<sub>レ</sub>申と申向に、證文爲<sub>二</sub>指出可<sub>レ</sub>申旨及<sub>二</sub>差圖<sub>一</sub>候よし、然る所三十目宛二十ヶ年指出候義は、久兵衛を始網子中にも落合候得共、證文を指出候義不得心にて熟談調兼候由、右之都合

に候間貳十ヶ年と年を不<sub>レ</sub>定、三十目づゝ以來永代指出と申様に<sub>レ</sub>成共、何等工合之宜敷様御勤辨次第程能御取計可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候  
 一御庄屋よりは網代之義も申出有<sub>レ</sub>之候得共、是亦不<sub>レ</sub>工合之義も有<sub>レ</sub>之候間、矢張十分一之方と落着可<sub>レ</sub>然事

一上泊浦より川名津塚久兵衛網代之磯築出義に付、是又内熟に及兼候義も有<sub>レ</sub>之、是亦友右衛門久右衛門御尋合之上、程能御取計可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候、此段申達候以上  
 閏七月七日

五六

差上申一札之事  
 一當浦小網株之義、先々御庄屋庄右衛門様御勤役の頃より、嘉永二酉年迄引高十分一御庄屋方へ指上申來候處、同年小網株故障筋之義有<sub>レ</sub>之御伺申上候處、久兵衛網株に相定申候に付而者、右十歩一得差上不<sub>レ</sub>申段申上候處、此度垣生浦御庄屋伊藤儀右衛門様、有太刀浦御庄屋五右衛門様、御取扱被<sub>レ</sub>成下<sub>一</sub>村君始

網子中共熟談仕左之通  
 一高銀札五十目

拾 匁 是者村君久兵衛より出銀  
 四十目 是者引高之内にて四歩六歩村君網子中より出銀

メ元合  
 右員數是迄之十歩一之替りに、永々無<sub>レ</sub>滞指上可<sub>レ</sub>申候、爲<sub>レ</sub>念村君、網子連判仕一札指上候上者、及<sub>二</sub>後年<sub>一</sub>違亂申上間敷候、爲<sub>二</sub>後日<sub>一</sub>依如<sub>レ</sub>件  
 嘉永七寅年閏七月十一日 小網村君

久兵衛  
 網子 六右衛門  
 外貳拾四名連印  
 御庄屋  
 久右衛門殿

前書之通承届候所相違無<sub>レ</sub>御座<sub>一</sub>候以上  
 上泊浦庄屋 友右衛門  
 川名津浦組頭 彌左衛門

横目	紋左衛門
小頭	多七
	茂助
	與平
	治

五七

安政二卯年正月

網方定法改正之事

- 一 網方仕成向網并船等は不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>申、大引繩類、苫、たがひ等に迄迄、不<sub>レ</sub>殘網方構之事
- 一 御網俵前々網子中構之處、此度より網方構、仕成向は網子ども可<sub>レ</sub>致事
- 一 漁事高之内壹歩水魚にて計渡之事  
但糞等相濟候得ば網方へ相渡可<sub>レ</sub>申事
- 一 高引 是迄之通
- 一 歩分け之義は七步網方へ、三步網子中へ割渡可<sub>レ</sub>申事
- 一 ぬれ魚、小廻、たま取として、高引に殘高壹貫目に三拾目づゝ可<sub>レ</sub>相渡之事

但拾匁 ぬれ魚

拾匁 小廻

拾匁 たま取

- 一 網藏屋根替、網舟等圍候節は、葦茅網子中構之事
- 一 網舟、手舟、たて修理網子中可<sub>レ</sub>致事、尤たて草網子構也
- 一 風雨之節船潔、朝夕沙掛け、無<sub>レ</sub>油斷可<sub>レ</sub>致事
- 一 漁事之節放しもの者、三步之菜計分け遣し、三步は不<sub>レ</sub>相渡之事

但網乘本人諸役に參候而放候節は、三步可<sub>レ</sub>指遣、家内にて諸役に參若網乘本人不<sub>レ</sub>參之時は放に可<sub>レ</sub>致事

右之外是迄仕榮之通可<sub>レ</sub>相心得之事

安政二卯年正月十一日

庄屋所

所方

網子中へ

- 一 表書之通申渡候、是迄仕榮之義相變り候而も如何敷儀故、以來は握菜并酒等吞候儀も考辨可<sub>レ</sub>仕候間、何様是迄之通致吳様再度斷出に付、格別之以<sub>レ</sub>簡<sub>レ</sub>を當壹ヶ年左之通相定段申聞候處、一統承知之旨正月十九日横目半兵衛より申出る

一 引高之内にて雜用引、殘高壹貫目に付貳拾目小廻相渡、全殘六步網方へ受取、壹歩菜三分網子歩分け都合四歩相渡遣し、漁事之節拾盃迄は表柄長壹つ廿ざるにも相成候は、手船に有之<sub>二</sub>升入柄長壹杯づつ、其余は其時々出精次第に而可<sub>レ</sub>指遣、尤是迄之通多分は不<sub>レ</sub>指遣之事、尤一日に壹度限網番數遣候とも決而不<sub>レ</sub>指遣候間其旨可<sub>レ</sub>致承知、萬一心得違のの有<sub>レ</sub>之多分菜等貴度申出候に於ては表書定之通可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>計事

但村君は、七歩に三步に相成候は、壹口半可<sub>レ</sub>指遣之事

一 たまとりは骨折候ものへ、時々見計にて可<sub>レ</sub>指遣之事

五八

安政七年

態と申達候、然ば漁事之節網置方御法之義は前々より度々相達一統承知之處、近來は心得違の者も有<sub>レ</sub>之間間網置論等致、我卒之振舞も有<sub>レ</sub>之哉に相聞へ苦々數事に候、仍て此度御法筋左之通申達候間可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>其意候

一 所網并他所より參り候網、銘々持網代へ置掛候網有<sub>レ</sub>之節、一町も隔て居候所より聲を懸け指留候義無用たるべく、若し一丁内にて間に合不<sub>レ</sub>申、すべの樽を浮候は、古法之通其儘爲<sub>レ</sub>引可<sub>レ</sub>申候、自然道理之懸方有<sub>レ</sub>之候共網引揚候後相糺可<sub>レ</sub>申、其上にも不<sub>レ</sub>譯立<sub>レ</sub>義も有<sub>レ</sub>之候は、拙者可<sub>レ</sub>申出候、萬一我卒之振舞又は理不盡に内網引坏置候は、内網へは過料申付候故日數三日網船爲<sub>レ</sub>繫可<sub>レ</sub>申候

一 網代取申候て、無<sub>レ</sub>人網舟は網代へ懸置候義無用たるべく、若し懸置候は、二三舟番に指置候、若し船番無<sub>レ</sub>之無<sub>レ</sub>人船ばかり懸置候網有<sub>レ</sub>之候共、外網參候之節は右懸置候網に不<sub>レ</sub>相構一勝手次第に引可<sub>レ</sub>申事

但懸置候網船は、おき候網より繫替可<sub>レ</sub>遣候

一 網船繫候節も網代へ不<sub>レ</sub>相障一候様繫可<sub>レ</sub>申候、若し不心得之義有<sub>レ</sub>之候は、村君中越度可<sub>レ</sub>爲候、近來漁事之節、網代數を持もの共一網代を構候上外網代へ手舟等に乗付、網代取等致し候儀も有<sub>レ</sub>之哉に相聞候、以の外之事に候、以來右様之義指留候事

一 他浦へ出引に參候節、所之網代銘々持網代を構居候は、左右最寄之一網代丈は他浦より參り候網は可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>用拾<sub>一</sub>候、譬ば左右之網代と雖も一丁餘も隔

居候場所は構ひ無之事  
右之通此度改申建候條、村君并網子中へ取申付候、  
右様申建候故にも萬一心得違網置論等致候得ば、急度  
違吟味候上綱條等も御取揚可被仰付候間、可被  
得其意候、此段申建候以上

安政七庚申年三月五日

兵頭作右衛門  
毛利又左衛門

五九

文久三亥年

態と申建候、然ば御編献上之義公義御改革に付當年よ  
り御用捨被仰付候間、此旨網持中へ可被申聞候、  
此段申建候以上

右之通申來候間可被得其意、此段申建候以上

文久三亥年五月廿五日

庄屋所

六〇

一浦々網代之義古來定も有之、天保七申年網方不殘

引付改之上相渡有之通之處、右引付にも不相拘

所限り惣打廻し等にて、漁事致來候所も有之趣、  
是等は至極公然之取計と存候、扱網付網代之義古來  
いはれなき事にも有之間敷候得共、不同も有之に  
付ては、此御場合之事故従前渡置候引付被相廢、新  
に本網置帖に付持網代置ケ所宛に可被相定、其  
之網代は惣て輪番に可被相定、哉之御内評も有之  
候之事

一網方の儀浦手第一之家業にて、莫大之御利益に付而  
は、空網代余計有之且村方人数も多き所は、依願  
御開濟も可有之候、御内調之事

右兩條之處は専業民所益、不同無之様との思召より  
相廢候事に付、夫等之處こそ眼目と被致偏頗之論を  
棄捨し、勿論夫が爲め不平之義無之様各得と勘辨被  
致、來月十日頃迄之内一統存寄之次第申出有之度事

明治三年正月廿七日

淺見定省

右様、建候に付、各網付網代置ケ所宛相定候様候相廢、網  
代帖指しも實施には至らざりし由

六一

明治三年

態と申建候、然ば御浦々網代御吟味合之義早春同役よ  
り及御通達候に付、各見込之處被申出候之上、尙  
又御評議有之候處、所詮従前之引付通にては區々相  
成居候て大に不同も有之、扱又漁事邊の義に付ては  
一村人身平日の不和には拘して、沖合論事等時々面  
倒之事ども、誠に以所務不所務之損益は指置、實に一  
毫之行掛より双方共互に不、思隔意をはさみ、爭論相  
成候ては大に上下煩敷事に候は、是迄之掟公平不、成  
よりの義にも可有之候得共、今度彌御改革之上従前  
之引付は御廢相成、惣て網代は一村限り網持中之受網  
代にして、惣輪番と云御處置に可相成、之御沙汰有  
之候、巨細不日御決定被仰出可有之候得共、各爲  
御心得、此段相建候以上

明治三年三月七日

鈴木作一

六二

明治三年

民事局より

浦手網代之義、先頃於三宮の下村浦手分不、殘回り網  
代に致度旨申出候に付聞届、五月朔日より其向取計候  
様申建置候處、浦手に寄彼是申立候趣に付、追て調合  
之上申建候に付、夫迄の處は従前の通相心得可申事  
右之通被仰出候に付被得其意、所中へ可被申聞  
候、此段申建候以上

明治三年四月廿八日

庄屋所

六三

明治四年

當時を(各)網と相唱候建網相用候もの有之候之趣に付、  
兼て相建置候義も有之候處、以來急度指留候、自然  
相犯候もの見當り候は、名元取札其所へ預置速かに  
可訴出候、且字藩にても同様申付有之向懸合有之  
候間、心得違無之様是又可申付置候

明治四年四月廿五日

民事局

六四

明治五年  
罾網所持之者、網代取極相渡有之候處、不殘引揚  
網株新古に不<sub>レ</sub>拘日送惣順番回り曳に申付候事  
壬申五年  
宇和島縣

六五

禁魚公示

本村字是延長田に左記の如く制札を建設しありたり

制札

從<sub>レ</sub>是上元宗村字麥白淵迄、魚鳥共殺生することを禁  
ず

酉八月

野奉行

外  
篇

## 漁具繪圖及漁撈解說

原本には數十葉の漁具並に漁撈の繪圖がありそれに一々解説が加へてあつた、その内今此處には學術的價值のあると思はれる漁具の圖文けを採録する。尙、解説は参考になる點多き故其の全部を印刷に附した。而して採録した繪圖に對する説明の部分には、項目の頭にローマ數字の番號を打つて置く事にしたから参照されたい。

### 1 第一 鰲釣船 (製造代價百五十圓位)

○船惣長さ七尋七合八勺、幅九尺二寸、深さ三尺三寸瓦長さ五尋一尺五寸、幅三尺二寸、厚さ三寸五分、松を用ゆ、とだての肩五尺八寸、厚さ同上、松を用ゆ、みょうし長さ一丈六尺、幅一尺四寸、厚さ五寸、檜の木を用ゆ、かぢきの幅三尺一寸、杉の木を用ゆ、上棚

幅二尺同上杉を用ゆ、ともの持深さより八寸、表の持二尺四寸、床幅五寸厚さ二寸五分松を用ゆ、舟梁檜、根朶杉、簀板杉正八分、ちり楠厚さ二寸幅五寸五分、間取ともの間五尺八寸、脇の間五尺七寸、胴の間五尺六寸、あかの間四尺一寸、表の間六尺二寸、二段九尺、釘、瓦落し一本の目方七十目、下通平目方二十四匁、上通平同廿二匁、はぎ釘同二十目、其他小釘色々を用ゆ。

○梶の長さ一丈四尺五寸、幅二尺、頭六寸角白檜を用ゆ、帆柱二本、内大長さ七尋二尺五寸根元大さ五寸五分角梢三寸五分、替柱同角六尋二尺五寸、檜の木を用ゆ、帆桁長さ四尋、木同上。

○ともろ櫂一位の類にて長さ一丈八尺五寸、幅六寸四分、腕長さ七尺五寸幅一尺二寸五分椎を用ゆ、わきろ前ろ、長さ一丈七尺三寸幅五寸五分、腕長さ六尺幅九寸、大わき、五丁ろ、長さ一丈六尺五寸幅五寸二分、腕幅八寸長さ六尺五寸、かいろ、七丁ろ、長さ六尺三寸幅五寸、腕幅七寸長さ六尺五寸。

○帆、松右衛門幅二尺五寸七枚半、長さ六尋、下り身索麻苧蟬に付目方三ノ目位、胴桶（餌活桶なり）底四尺高さ三尺七寸胴張五寸口の徑三尺、其他道具圖の如きを用ゆ。

○乗組は廿個内外、而して船頭はとも間に居す、給八十圓より百圓（三月より九月迄七ヶ月の定め）、網張船頭同上、給四五十圓、へのりは表、梶の上、共に四十圓内外、二番口、三番口、表三十五圓、とも口四十圓内外、脇の間三十四圓、胴三十圓、表二十八圓、炊手廿圓、中乗の内魚釣上等二十八圓、下等二十五圓、親父三十三圓、添二十七圓、這親父添二名は添舟に乘るなり。

○筒長さ三尺五寸幅七寸五分厚さ三寸五分。

○釣竿、長さ四尋廻り四寸より五寸の竹なり、釣針は三番中三番にて、長さ一寸二三分より四分を用ゆ、釣糸は地苧、針の根元深苧を用ゆるなり。

○釣季節三四月は土佐沖、五六月は縣内、七八九月は瀬潟にて釣なり。

## 2 第二 餌取網

○又餌取網あり、梅雨中は入江の中地方にて漁し、其他は瀬へ流し掛て取るなり、網の製、中央五桁は細目を用ゆ、左右楯は十四ふし大目網を用ゆ、中へ用るは藝州廣島より出す處六十ふし（みそこと云ふ）外に用るは當國東宇和群より出す處、一尺間に十四ふしあるを用ゆるなり。

○添船（並獵船也網を積舟）代價百圓、製法瓦の長さ四尋幅二尺四寸厚さ二寸四分松の木を用ゆ、深さ二尺二寸五分、トダテの肩四尺三寸、カチキ二尺一寸、上棚幅一尺三寸五分杉一寸三分の板を用ゆ、小べり檜の木厚さ二寸幅三寸六分、舟梁檜の木、根梁杉、船床松、簀板杉八分板、舳檣長さ一丈一尺幅九寸厚四寸四分、間取トモの間五尺、ワキの間五尺五寸、胴の間五尺四寸、アカの間三尺、表の間五尺五寸、小間四尺五寸、トモの持六寸、表の持一尺三寸、釘瓦落し一本の目方三十五匁、下通平同十四匁、上通同十三匁、はぎ釘同

○魚を釣るとき、表はとり梶へ並び腰を掛る、足下にふまへ木あり、表の一個は正面に向、船首に股る、體の一名は後面して梶の上に立、是に次ぐもの體の上に立、余は盡く腰を掛るなり、這時釣手は右手に釣竿を持左手に海筥を執、生餌に潮を刎掛、魚の水中に沸體を爲す、魚針に掛れば海筥を右手へうつし竿とともに握り、釣を脱す時は魚を左の腋に挟み、餌を刺て釣を海中へ入る、又始の如し、又活桶の潮をかへるものあり、人疲るれば代り又代りて且て止時なし、又舟中餌を投るものあり、口に雑語を吐て連なり、これ雑語と雖も皆祝言をとる、魚大にして二貫目に餘れば絃迄引寄、釣に掛て採入るなり、船は始終碇を入ず潮に連て流して居るなり、魚獵の時間は大約二時許りにして、海上一里許りを流し、魚一ノ目許りのものを千七八百口も獲るなり、恁而鯉舟歸村の時、漁獲百五十以上あれば、同音によしんよ／＼ようよふへた／＼ようえんや／＼と呼、漁獲百以下にさがれば中の呼聲を除く、是又習なり。

十三匁、かいをれ釘同七八匁の物を用ゆ、尙小釘色々を用ゆるなり、船トモ口檣一位長さ一丈五尺二寸幅四寸八分、船腕幅九寸長さ五尺八寸、前楯、脇楯一丈四尺五寸幅四寸四分、船腕椎の木幅七寸長さ五尺六五、大脇、五丁楯長さ一丈三尺八寸幅四寸四分、腕前に同じ楯長さ一丈五寸幅一尺三寸、頭四寸四分角、柱杉楯類長さ五尋一尺三寸六分角、同小四尋、尺角、同桁一丈四尺帆五反長さ四尋半幅二尺五寸也水寸竿一本、あか取一つを用ゆ、餘に道具なし。

○收穫鯉一萬五六千口（三、四、五、六、七、八、九の七ヶ月）、一口代價平均二十錢なり。

## 第三 鯉魚釣 圖略

○此季節は四月より十月迄なり、就中盛に釣るは六月より九月迄の四ヶ月なり、然れども年に依ては又差違あり、四月の始頃より苗配りと唱へ、多少の小鯉を釣れり、五月頃は東風吹き海面穏なれば魚尤も多し、六月に至りては沖合は浪穩にして只海岸にのみ激波起る



之を暮南風と唱ふ、其節は魚磯邊に寄せ、海岸を離るゝ事大凡十町以内にて釣るなり、七月の頃は入れ吹きと唱へ、南風颯々吹きおろす日と續けり、魚は東海西流して舟舷に近寄らざるが故に、其躍る方を目指し舟を行きて釣る、之を拱釣といふ、八九月の頃は小雨氣と唱へ少々西風吹く、此風吹かねば最上なり、其節は多分に沖合の暗礁或は島々の暮側に寄るものなり尤も魚は大なるが多し、右いづれも鶏鳴の頃より纜を解き、沖合の暗礁の側にて餌魚を捕り、胴桶へ海水を入換々して生かし置く、さて春秋は鰓を最上餌とし、夏はトロメンホ、タレを用ふ、

○而して沖合へ船を出し夫の生餌を海面へ振り播き、餌付けとして舟を流して釣るなり、時としては餌床と唱へ、數萬の鰓魚集集し鰓或は鰓などを水上へ追ひ集る事あり、恰も網をもて引集めたる魚と一般、之を張玉と唱へ坂網の如き網をもて抄取り、之を餌となし釣る事あり、其時は魚能く餌を食むが故に大抵は大漁をすると聞けり、抑魚を得るは天氣の模様と汐往來に

依りて異なるものとす、雨天にもあらず晴天にも非らず、曇天にして風の穩なるを最上とせり、其次は雨天にして、晴天は又其次なり、尤該業は朝晝夕の違ありて、旭の昇る頃を最上とし、夕景之に亞ぎ、日中は大抵悪く、夜中は營業せず、次に汐の模様は、多くは昇汐と唱へ西より東へ行く時大に宜し、尤も場所にも依るべし、沖合より地方へ來る汐は之を入汐と唱へ、日によりては是も随分宜し、之に反して地方より沖合へ往く汐は甚だ悪しとす、又汐の進退にも依るものにて、満干半滿杯の別ちあり、半滿より七八合滿の時尤も宜し、満汐となれば魚多く餌を食はず、干汐は甚だ宜しからず、又苦汐と唱へ海面泥の如く濁りたるは亦甚だ悪しく、數萬群集するとも只の一喉をだに得る事なし。

### 3 第四 鰓釣の餌捕網

#### 第五 鰓釣の餌を捕る圖 圖略

### 第六 右同 圖略

#### 第七 鰓を釣る圖 圖略

### 4 第八 焚寄諸魚釣

○凡焚寄にて釣魚は、鯖、鯉、太刀魚、イサキ、グチ等なり、これを釣糸は四十五尋にして小をそ三つぐりのものを用ゆ、びしは天秤にして、鉛四五十目なり但し日振島外は目方七八十目のものを用ゆ、びし重ければ糸も調て大いなり、てぐすはびし下一尋許にして釣針は大五番の針金、タチウヲ、カマスは長さ二寸、其外は皆一寸許なり、タチウヲ、カマスは鍔鉋を交用す、又てぐすを合せ用ゆるもあり、この具を一人三通り許りを用意す、抑夜釣に出るには並漁船に人四五個より七八個乗りて往くなり、其釣を垂る時五人迄は舟の片がは釣にして、かゞり二挺を用ゆ、六人以上はかがり三挺にして、舟の兩側に居て釣なり、餌はイワシの切餌なれども、鯛なき時は何魚なりとも用ゆ、一夜

の用意肥松十四五目、鯛五六十なり、然れども松に三種あり、上品をコロと云、一斤七十錢、中品をシと云、同四五十錢、下品をドベと云、同二十錢、其品によりて増減あり、魚を釣にはびしを入る深からず、大約七尋許にして時に斟酌あり、舟に活し籠を釣置、釣たる魚をこれに生す、又舟の活間へ入るもあり、活し籠は廻り五尺許にして、長さ二尺餘なり、季節隨五月を以て盛とす、カマスは八十八夜より始む、十月を以て釣の終りとすなり、製造代價絲三十五錢、ピン、針、テグス四十錢、大カガリ一圓八十錢、小カガリ七十八錢、收穫二三百圓許り。

### 第九 一本釣 圖略

○一本釣に用ゆる釣糸は、中まがいの二つよりにして長さ百二十尋にし、多く小びしを付、てぐす三四尋ある末に十四五尺の鉛玉を付、玉より下はてぐす五寸許りにて、五番の針金一寸の針を用ゆ、此釣を垂るには舟碇を入れず始終櫓を操るものあり、これを體練と云

風に向潮に向、進まず退らず舟を一處に居らしむ、これ練磨の功なり、魚の餌は蝦蛄シヤッコを用ひ海底にて釣、其魚針に懸れば一は手操、一はあるべ魚の疲勞するを待、而して後引上、船舷へ来る時タマを以抄ひ取るなり、此釣は只遊獵に用する而已、當地にては營業に爲ナスものなし。

鯖釣

○鯖釣は八月九月（此に云月は皆舊曆なり餘の季節も同様也）の二ヶ月のみ、鹽船一艘に四五個乗て出る、此釣舟は土州柏島より四五里沖を乗り出し、一は流し一はともねりにて釣ものとす、其出るには天氣を見て糧米日用品を用意して往、然れども天氣俄にして變ずれば柏島に碇し、日和を俟、旬日和あらざれば手を空しくして歸る事もあり、又旬日にして僅に一夜釣事もあり、故に當地の漁人多くは好ずして止もの多し、廿ヶ年前には一村に三十の舟出たれども、今は五七艘に過ず、今年は彌不漁なり、鯖釣の具絲も尋常ならず

尤調べて大いなり、麻苧二十目を三つぐり十二三尋に製せしものにて七尋許り下げて釣ものとす、又魚浮たる時は釣竿を用ゆ、長さ五尺、針は圖（第4圖）の如くにて多く曲す、舟へ取入ると自から脱れる様にせしものにて、釣針を脱すに手間のかゝらざる爲にす、其釣する時かがりを焚、圖の如き器を用ゆ、器具製造の代價二圓許り、收獲近年なし、先年は宇和島銀札三百目餘もあり、鯖一口目方七十目位にて代價貳分、此時は白米一升三分位なり、鯖は柏島にて賣捌ものとす。

第一〇 鱧釣 圖略

○此鱧釣は毎年夏秋頃、該魚の多く寄せ来るを見て出漁す、該魚は暗礁に添つて游行する故に、其處に到り潮汐に向ひて櫓を操りて船を登せ、又は櫓を停止し、或は緩めて下り、同一の所を上下して釣なり、最も多數の船全處に添ひ、各船にて鯛の三つ四つに切りたるを蒔餌となす故、次第に鱧集り来るものなり、則ち第一の船は釣を垂れ蒔餌をなすところ、又第二の船は該魚

の喰ひ服せしを取り入れんとする處なり、

○漁具構造は釣の付きたる五尋の絲に二十五尋の苧繩を結び付け、之に又櫻欄繩二十尋分を結び付け、其絲の繫目一方は輪に通し其輪なき方を折返し結びて、端を尙折返し小絲にて結び留め置きたるものを、又二筋織ぎ合せ、船中に設けたる留め木に掛け、左右何れへも延へ安き爲、双方の絲を纏れざる順に手操り、而して双方の釣を海中に垂る事凡二十四五尋の處にて絲を留む、

○數艘の船暗礁の傍を上り下りせば、蒔餌に付き鱧魚來り、釣を喰ひ服して去らんとす、然るに船端に該絲を葉の粗繩にて結び付けあるを以て、引物ハヤり行を見て喰服せしを知り、直に一方繩を急ぎ手操りて、鱧を自在に引き行かしむ、其引く事凡七八十尋にして行く事を止め、左右前後と行戻り逃れんとす、其内に勢力を失ひ勞れ次第に浮む、其浮むに従ひ絲を引き詰め海面に顯る、之を見れば直に打鍵を双方より頭に打込み引き寄せ、又取鍵を打掛け、而して槌にて頭を擲き粗死するを見て船に入る。

○釣元五尋、繩は製法最上の麻苧を撰み、三口にして大さ瑟の絲の少し大なる位にして、其上を極細き合苧にて巻く、なるべく小さきを好とす、瑟の絲を巻きたれば最上と云ひ、右繩の次に結ぶものは、極上の苧二百目を次で三口に立て、長さ廿五尋になる程製出す、其次に結ぶものは、通常の櫻欄皮二百枚を以て三口に立て長さ廿尋になる程に製出す、餌は鱧を最上とす、鱧なき時は小鯖の類にても宜し、但し烏賊なれば最も宜しとす。

○桿絲製法は、其桿絲器を内より前へ運轉せば、次第に繩竿より絲解け本と絲に纏まり、桿絲となる、其桿絲は苧の極上なるものを用ひ來りしが、近來は二十手の唐絲を二筋に合せて用ゆるものあり、又心絲は小なる苧絲五六筋を三口繰りとし、之を水延し、則ち兩方へ引き延し中に重き壓石を掛け曝乾したるものを用ゆるなり。

第一一 めぢか、すま、よこぼの圖 圖略

5 第二二 すま釣、横輪釣、目近釣

○釣竿四寸の竹を用ゆ、長さ三尋、針は(目近、スマ)三番の針金一寸、横輪は大三番一寸二分なり、又打針をも用ゆ、スマの釣竿は三尺、テグスを付、横輪はテグスなし、餌にはキビナゴ、イワシを用ゆ、キビナゴは餌取網を用ひて得れども、鯛は大網を置ざれば得事なし、横輪はチモトなし。

其釣するには碇を入れ、舟の艫の方向者三個、其に次で左右へ立並ぶ、舟の艫の間に活し桶を置、始終潮をかへて居、又時餌をするものあり、玉の小なるものにて抄い出し海中へ投ず、其投ずることに獨語す、其釣方三魚ともに同じ、釣具一切一本分八錢許りなり、收獲二百許り、スマなり、一疋九錢、季節は七月より十月迄、人員は限りなし、七人より下らず、餌取網を引に問ゆるなり。

6 第一三 配繩

烏賊

○鯛、鱒、鰯、鯨、鰒、鰯、等其他も雜魚を釣に配繩を用ゆ、魚は種々の類のものあれども、繩には異なる事なし、他方にては藁索を用ゆる事もある由なれども、當地外海にては然らず、配繩は一鉢分麻苧百五十目を三百尋に製す、鉢は絲を納る器の名にして、地製は底浅き板箱なれども、廣島より出るものは楡曲物なり、これを鉢と云、又右の繩には小枝を付る、枝も麻苧の目方三十目を五尋にして、三十に切これを十尋間に付け、重は百目許の丸石を百尋間に一つ付る針は三番の針金を長さ一寸五分にして、圖の如く内へ曲れるものなり、餌には鰯蝦蛄等を用ゆ、一艘の舟に繩十二三鉢用意す、船は並の獵船なり、凡繩を配るには暗に海底の潮を察して、押舟にて其潮の際へ配入るものとす、これを上るには絲を手繰るものあり、魚をすくい取るものあり、又船を操つるものあり、繩一鉢分を製す代價大約八十五錢なり。

○凡烏賊を釣には木を丸長く削り、白木綿にて包み、大き末に眞鍮針を多く寄て形菊花の如くし、これを絲に付しものなり、絶て餌を用ひず、月夜に釣、又白日にも釣、十月の比はかゞりを焚て釣、これを松烏賊と云、烏賊に種々あり、又木にて魚の形を造りひれには鳥毛を用ひ腹の方に鳥目二三文を付重りとし、魚の反せざる様に拵へ、押船にて細引つる、これを漕烏賊と云、この木の魚にも尾に針を付る事圖の如し、絲はまがい二つよりを用ゆ、長からず、十二三尋にして末にてぐす八九寸許あはせて付るなり、松烏賊を釣には三人乗内一人はともねりなり、季節は八月一と月にて、一夜の松代五十錢許り、收獲二三十斤、一斤代廿二三錢なり、烏賊に數品あり、する目、てしま、こふい、か、もいかなり。

鱒釣

○鱒を釣には針に餌を付ず、赤き絲又白き絲を用ゆるなり、針の長さ寸許り、夜松火を焚て釣、これを焚寄

せと云、たきよせは諸に有り、重の上に一寸八九寸の眞鍮竿を付る事圖の如くし、重りは目方二十目許りの鉛及鐵を用ゆ、又さほに竹を用ゆるもあり(とんばくあぢ其他小魚を釣ものは形少にして針圖の如し)、此の釣も專業にせざれば收獲未詳。

7 第一四 配繩拾遺

(繩一切六七十錢なり、活籠は一圓五十錢位)

○凡繩を配るには地方を二里許も離れ、蒼海中の形へ(形は海中石なき泥沙の所を云なり)、配るものとす、舟一艘四人乗にて出過失て瀬にかゝり繩を亡ふもの儘これあり、故に左右前後にある山島を目標にして、瀬なき所に配るなり、山島を目標にする事漁人皆然り、配繩のみにあらざるなり、配繩の季節は冬十二月より春正月二月の三ヶ月にて、繩の餌鯛を活し籠に生し置用ゆ、又蝦蛄も稀なるが故に、ゆうと名くる蟲を用ゆ然れどもこのゆう(蟲名)外海邊には取てなきものにて、藝州廣島よりも来るものにて、一疋の價三厘位一日分の餌五十錢許りも用意すると云、鯛も大網にて

引されば得ぬ故に出ず、偶大網にて引ば生餌を買て出、  
鵜代地方の相場より一錢の魚に五厘程賣し、一日二三  
十錢分の用意をするなり、收獲魚百口許、代價十四五  
圓なり、先年は收獲三四百口もありし、一疋宇札二匁  
位、此時白米一升宇札五分位也、其時はいげ(地名今  
治領)、又下つより活船來りし故、是に賣、今は舟來  
らず、以是魚代もやすし。

8 第一五 による網

○此の網の製は、先のり口ちへ八ふしの網長さ十尋、  
横二十六反を置、これに次に十四ふしの網同十尋、幅  
同、これに次に廿ふしの網同十尋、幅同、又これに次に  
三十ふしの網同十尋、幅同、又これに次に三十ふしの  
網同十尋、幅同、きものを圖の如くいせて圓形に製す  
るなり、この網は先に布て魚を俟、若魚來れば建切の  
舟濱へ乗付て、三んがいを張置し而、後船三艘にて漸  
次に相迫りて魚を取るなり、この網は横輪、すま、目  
近、其餘諸魚を引なり、製造代價百七拾一圓八拾錢位

收獲なし。

9 第一六 による網(小しき網といふ是なり)

○此の網の製、網底は二十四ふしの網長さ十尋にして  
横に九反を引、其に次に大引二十三かけの繩網長さ二  
十五尋横に三反を引、左右二ヶ所に六つがけ十二どめ  
のくびを入、又これに次に大引二十二かけ長さ十尋  
横二三反なるものを次、周圍三方あばにして、木碇を  
四ヶ所に入れてこれを鎮す、沖の方大引を張るもの六  
十尋にして陸に至る、これをかなあみと稱す、舟乗口  
の左右にありて、上網を取もの一葉二筋、又一葉は網  
の中央に屬、漁人六個中一の魚見あり、其形狀大敷網  
に彷彿たり、故に小しきと名する乎、其魚を取るの體  
又大しきの趣あり、製造代價網の分十五圓、大引分六  
圓、あば三圓なり、收獲すま六百許(一疋十錢)、目近  
五千許り(一つ五厘なり)。

10 第一七 大敷網

○這網を布には三方碇を以て止め、一方を開き魚の來  
る口とす、口の中央三の大碇あり、左右之角を見付のあ  
ばと呼、こゝに獵船二艘づゝを置、舟に四人の人あり  
舟一艘に網口の央より網二筋づゝを取、これを取網と  
云、又臺より第四のあばの邊りに魚見舟あり、其舟に  
は柱を立、上にわくを組、人これに上りて魚の來るを  
見るなり、又陸の山にも魚を見ものあり、共に魚を見  
れば見付の番船に知らしむ、番船急に取網を手繰りて  
中央へ到り、網を引上、其より締漸次に陥の方へ追詰  
魚陥へ入れれば小魚は玉を以てすくい、大魚は打鈎にて  
取、魚又來れば亦始の如し、製造價三百四十圓なり、  
收獲鹽二三百許り一本價一圓二十錢位なり。

10 第一八 右同

○陥の際大浮を臺と號す、臺あばは長さ四間杉の木の  
丸太据口一尺五寸廻りなるものを二本並べ、中へ尺竹  
三本くゝりたるものを三把入てくゝり付たるものなり  
第二のあばは三尺五寸廻り、餘のあばは皆三尺廻り、あ

○大敷網の製は、其形狀物をさびる箕の如し、魚を取  
る處を陥しと云、陥の方杉丸太を二つ並べ、其二貫を  
通じ尺竹を三本くゝり、三把をくゝり付し物を台と號  
したり、これ第一のあばなり、このあばに碇を入る事  
十四、繩は七筋なり、網の長さ百尋、このあばを以て  
基とす、これに付處のあみ、兩端をくびにて、四寸目  
五つ起り五尺間に三目を増、長さ十尋三十目にて止、其  
次は織子にて又をくびなり、一尺五寸に起り三尺五寸  
に止、長さ十尋、其次幅三尺五寸長さ一尋、中央陥し  
の上幅三尺五寸に長七尺なり、陥の下幅三尺五寸に長  
さ五尋なるもの一枚あり、先これを以て第一段とす、  
これに次第二段は四寸目にて五尺間に三つの目をまし  
三十八にて止、三十三起なり、長さ十尋なるものを十  
枚綴合す、第三段は六寸目一尋間三つの目を増、二十  
五起りにて二十七に止、長さ五尋なり、第四段は八寸  
目にて二十二起り二十五に止、長さ十尋なり、これよ  
り上三段は大引の網にて、第一の段のみ機柵索の網な  
り、以下二段は大目繩を以て製する事圖の如し。

ばのかず沖の方十三地方十一なり、臺付の網左右端の  
をくび、機欄索の網にて四寸目にて五つ起り五尺間に  
三つの出し目長さ十尋三十目に留、其次をりこをくび  
起り一尺五寸にて長さ十尋三尺五寸に留、其次に一尺  
五寸長さ十尋、其次三尺五寸十尋、陥の上下は下二  
はゞにて五尋なり、臺付の碇七つ、網百尋繩一筋にび  
く二つづゝ付、目方百メ許り、尤海底の浅深によるべ  
し、第二段は四寸目五尺間に三つの出し目三十八に留、  
第三段は六寸目尋間三の出し目五尋、第四段は八寸目  
二十二起二十五留三尋三目出す。

第一九 大敷網引上げの圖 圖略

11 第二〇 鯛網船 (製造代價二百六十圓但二艘分  
十二丁代六十圓)

○船の長さ八尋三尺、胴張九尺四寸、尾長さ五尋三尺五  
寸幅三尺二寸厚さ三寸五分松を用ゆ、カチキ三尺三寸  
杉、上棚一尺五寸厚一尺八分、トダテの肩五尺二寸厚  
二寸松船首長さ一丈五尺二寸幅一尺四寸厚五寸五分松  
の木を用ふ、下り長六尺五寸棕櫚皮なり。ヨコガミ楡

幅一尺四寸厚二寸大立の胴付二尺八寸幅六寸五分厚一  
寸八分長八尺、トコ松、ろどこ五本四寸に二寸五分  
角、船梁楡の木十一本、根梁木杉楡を用ゆ、簀板杉厚  
一寸七分、深さ三尺三寸、トモの持三尺五寸、表の持  
二尺三寸、筒の長六尺五寸、幅七寸厚四寸、臺長四尋四  
尺幅五寸厚二寸五分、釘瓦落し一本の目方七十目、下通  
平二十四匁、上通同二十二匁、尙小釘を用ゆ、はぎ落  
し廿二匁、かいをれ六七匁より十二匁迄を用ゆ、外に  
小釘かすがいを用ゆるなり ○ともろ長さ一丈八尺幅  
五寸八分、四丁ろうで幅一尺長さ六尺三寸、四丁大わ  
き長さ一丈六尺五寸幅五寸二分、うで幅八寸長さ六尺  
二寸小脇ろ長さ一丈六尺幅四寸八分、うで幅七寸長さ  
六尺、二丁強棒二本長さ一丈三尺と二尺一尺一尺三寸  
廻りなり、杵の木を用ゆ、碇二丁目方十四メ目、小いか  
り二丁目方五メ目づゝ、しゆるろなわ七十尋、藁槍索は  
かぎりなし、大碇は五圓小碇は二圓なり、皆一丁の代  
價なり ○網船一艘の乗組二十名、手船二艘、手船は  
並獵船にして網船の副船なり、網船出るときは必らず手

船添、此の手船乗組三員内二名は船を操り一員は船首  
に居て魚を見る、これを村君と稱す、村君は網の將に  
して手に魔を採り網船を指揮す、其招く處縦横進退手  
足の如くなり ○沖に鯛見ゆる時は一は呼(呼聲應々  
と云)一は竹貝を吹なり、其組の人員これを聞ときは  
耕す者鎌を荷、耨る者は鎌を収めて走歸り、手毎に玉  
を持って(玉はさでなり木を曲げて柄とす)船に乗、其迅  
速なる事云許りなし、網船出に及べば手船斥候して魚  
を見る、網船は網置場に臨みて靜に其時機を俟(網置  
場は海底に障りなきところ、是をあじろと云、あじろ  
は何の謂乎不考)、魚あじろにかゝれば村君魔を振りて  
應と呼、網船の内其魔別るゝを見る時は二艘の船右左  
へ颯と別れて網を入るなり、其船左右へ聞く事數丁に  
して機を見て海岸へ漕付岸石へ索を掛而後、船岸を距  
事二三十間にして網を曳、此時衆人の勢の恰も軍陣の  
如し、魚手前へ來れば棒を海へ投入して追、手前は索  
而已にて網なければなり、この棒をテン棒と呼(テン  
棒は轉棒歟、是棒手元小く先太し、網を付空へ投轉じて

海へ入故テンと云歟、又魚をして轉せしむるの名歟、  
狩棒と云處もあり)網を曳者の掛聲始はヒヨイ／＼と  
云、其よりホウヘイホウハリヤエイ／＼ヲウホウハン  
エイヘヤホウヨヤネイヘヤホウヤラヘイエヤホウと幾  
遍も繰返し而後、浮樽残り二つになればハリヨヤツサ  
／＼／＼ヤリヤ／＼と云て曳上るなり、其網袋に至れ  
ば大いなる玉を入れて魚を抄ひ船へうつす、魚舟上に躍  
りて鱗を飛す事雪の如く、満の中人身器械悉銀色に變  
じ、其景光實に人目ををどろかす、海濱一層の賑なり、  
恁而魚百桶以上ある時は網船歸るとき船聲を立、ホンリ  
ヨエ／＼ヲウエイヤ／＼／＼ホンリヨヘ／＼エイヤ  
／＼／＼と云て續かへるなり(右のあみ聲にも所によ  
り異同あり、これ所謂外海浦の聲なり)、○鯛網置時は  
魚貫船須臾にして雲の如く集り、其網曳を助け而後魚  
を貫歸、これ又風習なりて魚貫の助勢肝要なる處あり、  
鯛地方へ寄事多ければ網置事稍繁、網使屢なれば網曳  
する者大に疲勞して曳に勝へず、此時右の魚貫多き時  
は助多きゆゑ、網を曳揚る事最速かにして收獲多し、

これ其力なり。

### 第二一 鱒網つかひの圖 圖略

#### 12 第二二 鱒網

○鱒網を製造するには、先貫四の網(貫四は藝州廣島より出す處、網一枚の長さ七尺にして幅四尺、但一尺の内目數百六十あり、この網十反の目方一貫四百目、これ貫四也。)四尻を用ゆ(四尻は方言なり、此網三十枚を一尻となす、四尻は即ち百二十反なり)四尻を以て横十枚堅十二反づゝとす、これを中央に置、これに次に七尺切横三枚堅二十反を以圖の如く、下の中央を廉と唱へ上あば際より下廉迄縫付、これに次に東宇和郡より出す處二十ふしの網横五尋堅四十五反を以す、又これに次に十四ふしの網横五尋堅三十一反を以す、又これに次に同十四ふしの網横五尋堅三十二反を以す、又これに次に八ふしの網横五尋堅二十三反を以す、又これに次に同八ふしの網横五尋堅二十四反を以す、又これに次に七ふしの網横五尋堅十九反を以す、又これ

に次に七ふしの網横五尋堅二十反を縫合し、左右の緋會合處又縫合し、圖の如くなるなり、これより底左右へ別れ又圖の如き枉を入、而して後これに次に三つ十三反以て神となす、左右相同じ、此處に至つて底入九十尋あり、これ網の目漸次に大になるによりてなり、此網の間は桐の木長さ八寸横四寸なるものを以て浮となす、是をあばとよぶ、あば際四尺通に棕櫚繩の網を付、其より長手と云ものを付、長手は三つ五反引三十尋にして下へ藁繩網を付、此藁繩網は繩の大き凡小指位にして目の大き四尺なり、これを大引と云、この長手を過て又大引を付、底入目數三十三目にして六十九尋なるもの二百十尋を付、これより上下二筋の大綱となり又合て一綱となる、此綱の長さ百五六十尋なり、大引の分左右二十四の浮樽を付、又いには目方二目許りの丸石を付、其數大引の間三十五、長手の分六つ、左右同じく中に付る處三つなり、以上是當地の製なり、他方は海中底の浅深により差異あるなり、網仕入の代價廣島仕入の分一尻十五圓四尻にて六十圓、東宇和郡

仕入の分九十圓、なほ分二十五圓、棕櫚網とあばとの代價四圓、浮樽四圓八十錢合金百八十三圓八十錢なり、當明治十五年の收獲鱒十四五桶に過ず(一をけ二斗五升入にして五十錢位)、昨明治十四年の收獲同六七百桶なり(メザンに製す、一桶七把都合四千九百把許り、一把の代價三錢位)、四千九百把にて百四十七圓なり。

#### 13 第二三 鱒地引網

○此の網の製たるや沖引の網に異なり、沖引は網を底へ布、地引は袋而已にして餘は左右へ引別て造る事圖の如し、先二十通りの網十五丈を折返にして百九十二枚を用て袋とし同六枚を用て枉となす、これに次に廿ふし廿五反横五尋のものを以し、又これに次に十八ふし三十反横五尋のものを以し、又これに次に十四ふし二十五反横五尋のものを以し、又これに次に八ふし十八反横五尋のものを以し、又これに次に八ふし十八反横五尋のものを以し、又これに次に七ふし十五反横五尋のものを以し、又是に次に七ふし十六反横五尋のものを以す、これより長手十反五十尋其下は二尺目の大

引を引、又長手を過て又大引二百四十尋(五尺目)を引なり、大引を過て繩二百尋を次なり、これ一方なり、加之浮樽三十四、いは百四十を用ゆるなり、これを用ゆる網船に乗るもの二十六人あり、手船二艘一艘三人のり内二人の村君あり、手船の要は沖引網もかはる事なし、網は置て後地方にありて曳ものとす、故に此の漁場陸地まで障りなき所にあらざれば敢て用ひざるなり、其これを用ゆる沖引に勝れて漁獲多しとす、製造代價網の分五百四十一圓八十錢、大引分三十七圓九十六錢、樽の分十圓、繩の分十圓合計五百九十九圓七十六錢なり、收獲六十桶代價二十七圓(一桶四十五錢なり)、昨年同三千桶七百五十圓(一桶二十五錢)利は網師引子二つ分とす。

#### 14 第二四 餌床鱒捕獲網

○此を餌網と云ふ、是は鯨又は鰹及び鰯の類大魚鱒魚を追ひ來り(餌床)「方言」を上ると唱へ、右大魚鱒の集來せし中を横行せば、鱒は驚駭に堪へず、騒然度を

失ひ集聚して中入せんと周囲より群集す、依て恰も炊飯の釜中に沸騰するが如くなりたるを見て用ゆる網の故に餌網と云ふ、則ち圖上に記するは鯨の餌床にして其鯛の集合したるを見て網を置き回し鯛を捕獲するなり、間には鯨魚餌床に來り喰せんとするを見て投網せば、鯨魚は其網に恐れ其儘に堅になりて沈み逃る、又鱈は鯨魚の如く溫和ならず、素より鱈は逃れて他に出ると雖も、鯛を引き上げんとするの際、該網に引寄せたるを見て大口を開き其の網と共に喰服し、魚と網とを喰ひ去る事あり、甚だ危険なる事あり、又鱈の如きは船到れば逃れ去りて他處に至り、又餌床を上る者なり、季節は秋に多し、僅の時間にて小人員乗組の小船にても數十石の捕獲を得るなり、網の置方は其餌床に到れば、網の一方四尋の手繩を船の體に結び付け直ちに他の一方より投入す、其手繩十八尋ある其の端を一人持ちて船の表に立ち、其手繩を伸べながら船を急がせ、其網にて餌床を包き回す、其船の回る夾に至れば表のものは繩を順次右へ打たせ、之と網を投入せし處

へ回終せば、兩方より其網を引き上げ引き寄するに従ひ、「いは」手を速に引き上げて魚を網の中央袋の處に至らしめて引き詰め、船中に捕收するものなり。

#### 15 第二五 鯨網 (引網なり)

○此の網の製は、西宇和郡皆田産の網十四ふし六千七百七十反を長さ百三十尋幅五尋餘と十九尋餘に造りしものにして、上あばと下をもあばありて、をもあばより上あばの間は網を浮せし形あり、をもあばより下は網水底へ入なり、この網を置ところ圖の如く三山に村君在り、網手は小家に居り、其合圖を俟、凡鯨は山縁を傳ふ魚なれば、先づさき山の村君魚の來るを見る時は聲を發していくぞと叫ぶ、尤魔を以て魚の舉動を示す、一度魔を上るを魚百喉とし二度を以て二百とす、如此約束を定めて其多少を分別す、中山の村君先山の合圖により魚の來るを知り、而して其魚増減する時は又其魔を増減していくぞと叫ぶ、この合圖により網手は船にのり準備をなす、とり山の村君は中山の合圖に

よつて其意をさとり、無聲にて魔を振り其進退を指揮す、其法頭上左右に振るは船の止るを示す、胸前左右に振るは其進むを示し、其横振急なるものは其疾を示すなり、この合圖にて網を緩急進止す、其舉動靜なるを要す、其網を投入する時網に短縮あれば地のあばとりこれを直ぐし、沖のあばとりは直に沖の浮だるある處に至りて俟、網舟目標へ來れば地のあばとりに代りてあばをとる、地のあばとりは陸へ返り網もけに力を添ふなり、恁而魚あじろへ入れば網舟置廻して直に陸に上、人員を別て網を引上るなり、魚網代に入又引返すあり、又來れども又返す、如此魚は全く網代に入ざるものとす。

#### 第二六 鯨網 圖略

○網積船は、通常之漁船造の大形一艘、櫓押四人網入三人、此船は網主の仕入とす (大形船造費四十圓、中形同十五圓、小形同八圓)。○あばとり船は傳馬造一艘、地のあばを取る、通常船の小形漁船一艘沖のあば

を取る、各乗組一人充、之は網子の仕入とす。○魚の分配は引子と網主折半、引子分の内とり山見二人分、外二ヶ所の山見一人半分充。○とり山見二人分 (内引子より一人半分、網主より一人分) 外二ヶ處の山見は三人分 (内引子より二人分、網主より一人分) あばとり船は二人分 (引子より一人分、網主より一人分) ○網の代價は金四百九十八圓貳拾五錢、同反數六千七百七十五反、産地同國東宇和郡 (一反の長さ五尋、幅七尺五寸、目板八あなるもの) ○いはの代價金五圓貳拾錢、同個數千四拾個、産地播州明石一個五厘 ○あばの代價金四十四圓 (をもあば六百二十、うはあば二百六十) 惣個數八百八拾個、産地伊豫國南宇和郡、一個五錢。○仕立人夫二百拾人、賃金六拾三圓、内百二十人いは網仕立より網付迄四十人、あば仕立より網付迄五十人一人三十錢 ○□□の入高十六貫目を百三十尋とし岩繩とす、代價金四圓八十錢 ○椽網皮入高四千枚、繩百三十尋としてあば繩とす、代金拾二圓 ○網遣ひ季節は、立春より始まり清明の頃終る、晴雨に拘らず漁

業すと雖も、少しく風立ある日を上とす。○使用高は立目即ち中央角の内は一ケ年貳度取替、其余は半分位年々取替、三分の一位残るは次年不用の處に用ゆ、一日に兩三度充使用す。○網の手入、最初一番遣ひ一日干し其後は五日又は十日等漁の都合によりてす、尤も十日以上手入せず遣ふを得ず、之損じ強き故なり。○鱈の仕成は生の儘賣却す。○網の染入方、椎皮を槌にて打割り細片となし、之を釜に入れ一斤(十六目)に付水三石貳斗を加し焚く事、薪は松の大束を用ゆ、六時間三度沸騰せしめ、而して桶に汲出し、二番を水同上焚方同上、此の兩汁を一纏めとして放冷し、天氣の能き日該汁に網を投入し、漬濕したるを桶又染船上に横木を置き、該木上に取り上げ水分を滴下し、網干場(此濱は日光適射の地へ小石を散布したるもの、又天然小石海濱をも用ゆ)にて曝乾す、尤も網百反に付椎皮六十七斤七合五勺(一斤二十目、代金は當時一圓十錢内外也)該汁は十日位は適用するを得ると雖も其餘は用をなさず、濕漬するの度数は四十度一日に付

三度位とす、古網の分は水中に漬け潮出しての上染るなり。○漁業の多寡は大漁年は一萬五六千噸、不漁の年は三四千噸。

### 16 第二七 鱈子網

○此の網の製法は、網底廣島網にて中央の上堅五丈横十五枚のものを置、其下へ堅三丈横七枚のものを以し、これに次に堅三丈横六枚を以し、又これに次に堅三丈横五枚を以す、又これに次に堅四丈横四枚を以す、又これに次に堅三丈横三枚を縫合す、其狀胸張なり、又左右に三十四の網横五丈堅十五枚を次、又三十四の網横五丈堅十五枚を付、又貫四の網横五丈堅十枚を付、これに二十四の網横三丈堅十五反を付、其より大引三十尋を付る事左右同じ、いはゞ一メ目の石五十を付、又大引の處左右一つ宛樽を付るなり、季節は夏月より冬に至る、製造代價廣島網の分九十圓、東宇和郡製及網共二百十圓なり、本年收獲五十桶煎子に製す、一桶五十錢なり。

### 17 第二八 鱈立網 (鱈地引網なり、スマ横輪網も是を云ふなり、餘あるに非ず)

○此の網の製、先麻苧百目を七十掛にして網一尋をすく、これを三尋六反を中へ置、其下へ三尋五反を次、左右へ又三尋四反づゝを次、それより左右大引三十五尋を付、繩一方五十尋一方二十五尋を付るなり、又残らずあばを圖の如く付れども、いわ石は網の間に三百目許り、石七つ網下の大引へ付る而已なり。

○用方これを好所に張置、陸に小家を造り人十二三個をり魚を待、魚網の内へ入れば急に網を引、網を寄せ鱈は鉤に掛、目近、スマは玉を以て抄取なり、季節、目近は七月より九月迄、スマは九月より十一月迄、鱈は四月より九月迄、製造代價網の分廿四五圓、大引分八圓、繩九十錢許りなり、收獲鱈二百本(一疋五十錢)スマ千許り(一疋九錢)、目近魚二萬許り(一疋六厘)合計三百十圓なり。

### 18 第二九 鱈地曳網全圖

### 第三〇 鱈地曳網立て懸けの圖 圖略

### 第三一 鱈地曳網立切り魚を待つ圖 圖略

### 第三二 鱈地曳網圖にて魚をとる圖 圖略

### 19 第三三 鱈内引網

○本網は、海灣内へ鱈魚湊入したる時、數帖の罾大網を連続し以て灣口を建切り、而して該灣内にて内引をなすものなり、其附屬船等も別に平常より設置せず、右罾網船を以て使用す、其方法も又罾網遣ひに異なるなし、網海丈四十尋、同長二百尋、内中央百四十尋は苧の四あ廻りの繩の四寸目兩方三十尋充棕桐の同繩にして八寸目、あば長一尺六寸厚三寸幅五寸尋に一個を付く、いわ二貫又は三貫位の石を三尋に一個を付く、右の外に兩端へ二百尋充大引網を付く、是は罾網の大引を解きて付るものなり、故に該網解説書に詳細なるを以て茲に略す、季節は夏秋なり。



20 第三四 鯰子打網

○此の網の製は上一尋半二百六十かけ(かけは貝數なり)、下同八十かけのものを以袋とし、左右貫四の網、底入二反半十二尋宛を用ゆ、あば桐にして、いわ焼物なり、凡そこの網を引くは舟を用ひず、夏月人水中に持行引くものなり、故に水浅き所にて用ゆ、製造代價二十三圓三十二錢なり、收獲三桶一桶三十錢位なり。

21 第三五 鱸網

○鱸網の状ちは、鯛地引網に似て胴短く袖長し、其製廣島網あがみ底(あがみ底は貫四といふもの)三十六枚を以て袋とし、左右に東宇和郡製十八ふしの網二百反長さ百尋のものを續、又これに次に十四ふしの網に百反ながさ百尋なるものを付るなり、中央より左右の端に至るまで桐浮を付、いはは備前焼にして圖の如く長圓なるものを以てするなり、其網を置や必ず乗船浮際に付、每舟さでを以て魚を七ふ背後に一船あり、後へに碇を釣人手に

網を掴み其袋を張しむ、其網引舉るに至れば乗船は退き残舟に魚を汲なり、製造代價十四ふしの分三百二十圓、十八ふし分三百六十圓、あがの分三十圓二十錢、小をそ代二十四圓、染代七十五圓、あば百七十六圓、いは百二十圓合金千五百圓なり、收獲近年なし、明治十二年には四百桶引しなり、其代價一桶八十錢にて三百二十圓なり、このしる鹽にするなり。

22 第三六 手操網

○手操網は其形状恰も頭巾に似て、上あご五分の目百八十長さ四尋、下あご同目二百にて長さ四尋、三尋づつの枉を入れ左右へ八尋づつの袖を付け、而して左右へ又二百尋づつの網を付るなり、この網は舟三名乗沖中に帆を掛け曳くものとす、この網も專業にするものなし、故に季節の收獲あることなし、製造代價十六圓五十錢なり、季節十一月より二月まで近年不獲なり。

23 第三七 鰯網

れを持し、一艘は網を張行一艘は其先を狩りて洩れざるを要す、村君は山にありて方向を示すなり、網引上に至れば袋を解放し魚を中に生し、手舟二艘袋を釣て漕て活簀舟の所に至り其まゝ生し置なり、製造代價袋廣島網百二十九反九十六圓(五尋一反八十錢)、東宇和十四ふし四百四十七反(十尋一反一圓三十錢)五百八十一圓十錢、同八ふし百四十五反百四十五圓、あば五十四圓七十錢、いわ十圓五十錢、なわ二十一圓六十一錢、以上袋の外方なり、前張の網三十九圓九十六錢、いわ三圓、なわ十三圓五十錢合金千八百七十四圓〇八錢なり、季節十月より三月まで、收獲鰯二千本代價百六十圓(一本八錢なり)。

24 第三八 鯨網

○此の網の製は、先中央へ廿ふしの網長さ二十尋なるものを廿二反置、これに次に前後十四ふしの網十五尋なるものを二十反絨付、其左右へ又十四ふしの網四反長さ三十尋を次、其又前後へ八ふしの網十枚長さ十尋

○此の網の製は、廣島網二十ふし三十反を折反し百二十反を以て袋とす、これに次に東宇和郡産十四ふしの網へ行廿二反引百尋のものを以す、其間に一反の枉を入るなり、又これに次に同十四ふし二十一反引五十尋のものを以す、又これに次に同十四ふし廿反引五十尋のものを以す、又これに次に八ふし十一反引五十尋のものを以す、又これに次に八ふしの網十反引五十尋のものを以す、尙これに次に八ふし八反引五十尋のものを以し、其より大引五尋を次、この百尋の上に同十四ふし二十二反引十尋のものあり、左右同じあば二千百箇、いわ焼器にして目方五十目のものを用ゆ、加之いわの外にさへなわを付(さへなわはそへなは敷)、さへなわに又石のいわを付、石目方七百目あり、片あば長さ二百七十三尋半、いわ同二百六十二尋半、これ鰯網の製なり、其これを用ゆる獵船二艘十六人乗にして置廻し、これを曳時は八十個の人を用ゆ、又手船三艘あり、一艘四人のる、又前張と云ものを用ゆ、八ふし網長さ百五十尋あり、圖の如き所に手船一艘ありてこ

なるものを次、其前後へ同八ふしの網十枚長さ二尋半なるものを次、其左右通しに八ふしの網五枚長さ五十五尋づゝ次合すなり。

○用方は鯉船一艘に八十二三個乗組もの九艘内二艘はかゞり船なり、場所は卯來島又土州姫島の兩所にして、沖の方に舟四艘地の方に三艘にて網を布、二艘の舟には圖の如くかゞりを焚魚を寄せ、漸次に相迫り終に舟二艘にて網を引上魚を取なり（此の海邊は浪荒くして舟多く近寄可らず、故に漸次に船を退け打當らざる様すると云）、此の網を布する時は毎船網より二筋の索を取、鐵碇四挺目方五メ目なるもの本碇三本を入れて居るなり、獵に出る時は日數七日分の料米を用意す（此の網間に曳なり）、製造代價は二十ふしの分八十八圓（二十ふしは一反九十錢）、十四ふし八ふしの分百八十四圓、縁繩十三圓五十錢、又船に三百尋づゝの索あり、代三十一圓五十錢、鐵碇四十二圓、木碇同六十錢、かがり臺方三尺惣丈八尺代十三圓、同小七圓なり、又柄の長さ五尺廻り六尺なる玉九本を用意す、松代二十圓

なり、季節は二月より五月迄なり、鯉は鹽物に製す、近年獵に出ざれば收穫なし、かゞり臺は鯖釣に用ゆるものゝ大なるものなり。

### 第三九鯉 網敷し體 圖略

引揚の處は波浪荒きがゆへ、衆船は退ぞき二艘の舟にて魚を取なり。

### 25 第四〇 八た網（魚赤ムロ一丈五六寸）

○此の網の製、先二十ふしの網十反十尋なるものを置、左右下共に十四ふしの網四十反三百尋なるものを圖の如く付、あばの方長さ十八尋いわの方長さ二十尋左右二十二尋にして其形上狭く下弘し、又これに圖の如く繩を付るなり、この網を引は姫島卯來島にて舟二艘に八十八個のりて到り、魚の群れ白むを見て置、沖より陸地の方へ漕なり、季節は五月六月の比、闇夜に網引す、製造代價廿ふしの分廿圓、十四ふしの分五十四圓なり、皆廣島網なり、收穫今年不漁、昨十四年には二

百桶引、一桶七十錢、干物に製す、又取高の内二分は島税に出し來るなり。

### 26 第四一 鰯刺網（又かけ網とも云）

○此の網は、鰯網に用ゆる十四ふしの網をも用ゆれども、別製を好とす、別製は十二ふしにして節をがり又に結ぶなり、底入八尋を四尋にてつぎたるもの十尋より五十尋に至る、其絨様十分の二をいせるなり、重りは焼物又鉛をも用ゆ、十尋許の手繩を付て端に水一升を入る許の浮樽を付るなり、其用方舟一艘に二人乗にて置ものとす、此の網二つ三つを用意し舟にかゞりを焚て魚を寄るなり、網を三つ許り用意するものは、一つの網を引擧て目を刺魚を取る時、余の網を入置んが爲なり、又網の中をつぐものは中損じ強きがゆへ、其損じたる時上下を緘かへん爲なり、此の刺網は漁場一里外に非ざれば入るを許されず、故に多く遠きに獵ると云、季節は四月より十月までなり、製造代價五十尋のもの七八十圓、收穫二三百圓より四五百圓、毎舟に

同じからず、一ざるの價三四十錢、一ざるの鰯其數二百許りなり。

### 27 第四二 鱒懸網

○此の網の製は、投網竿を用て六分目にすく、底入二尋にして長さ百尋許、限りあらず、其人の好みによるなり、此の網を張は鳥を取る網の如し、人六個にして引、其魚網の目を刺すをとるなり、製造代價三十圓許り收穫近年なし、先年は食料許り引と云。

### 28 第四三 目近網

○目近網の製、其形狀扇の地紙に似て上弘く下せまし、先中央上に二十四の網七枚を置、これに次に同網六枚を以し、又これに次に同網四枚を以す、又これに次に同網二枚半を縫付、其左右へ十四の網四反長さ十尋づつなるものを次、其より大引四十尋を次、左右同じ、凡この網は舟二艘人六人あれば引ものとす、舟二艘の内一艘は岸にあり、一艘にて置廻し陸へ網を取而後二

艘の舟にて曳、此網も大網の間隙にあらざれば出る事なし、製造代價十四五圓許り、收獲四百程ログイメジカ但一疋八厘。

29 第四四 ぶり手繰網（ぶりはくりのなまりなり）

○此の網の製は、恰も財布の如く上あご九反長さ六尋下あご十五反長さ七尋にして、兩腋にはすかいを二反づゝ入、又圖の如き袖を付、左右共に十二尋にして二百目位のいわ石四十を付、其に長き網を付るなり、これを引には舟二艘にて碇を入れ、舟の脇の間へ六尺廻りの籠を立、網を掛て繰引なり、故にこれをかり手繰と云歟、今ぶりとなるなり、製造代價網の分十五圓、繩の分二十五圓なり、本年の收獲三圓許り。

この網は水底を曳ものゆへ、多く繩のみなれば船に圖の如き籠を立、横に棒をさして繰曳にするなり。

30 第四五 鰯網（製造代價八十一圓五十三錢）

○此網の製は、残らず十四ふしの網にて、船に三筋の

繩を取れる方を乗口といふ、これ魚の入来る口を云なり、先乗口の上の桁に横六反に堅十尋なるものを置、

其下へ堅に十八反を次ぎ、又これに次に同様なるものを以す、如是なるもの凡四桁五桁目に至つて一布を減し、其次にて二布を減らし畢、只十六反を以て圖の如くじ、又乗口下の方へ小をそと云最細き苧の絲にて十四ふしの網を四桁目迄二反通り入て縁とす、凡この網を布には獵船十二艘人三十餘人にして布なれども、平日布あるにはあらず、一人山にありて魚を見るものあり、鰯來れば聲を立て呼、この聲を聞て衆人舟を出し魚の来る先へ廻りて好所に網を布、船中に伏て待、鰯は始縁を傳ふ魚なれば山に在るもの魚に付て網を布所に至れば魔を揺す、舟に在るものこれを見る時は急に起つて網を揚、其網をあぐるには前後相迫り兩翼縁を上、遂に中に至つてこれを取なり、揚繩シュロウ三筋にて二百尋、ヘリシュロ百四十尋、下縁苧繩六十尋、小をそ一メ五百目を以て製す、鰯五六寸許り收獲二百位（一本三錢）、十五年分、先年は二千許りも引しこと

あり、此時は米價宇札にて三メ目位でありしと云。

31 第四六 はりメ網

○此の網の製は、先中央に三枚に四丈を置、左右にまた貫四三枚長さ七丈を續なり、此のはりメ網は獵船一艘にて置廻し、人四五個にて引、其體スマの餌取網の如し、これも大網の間隙にあらざれば引事なし、この魚は食料にせず、肥しに爲のみなり、故に本年獲處二斗五升入の桶にて五六桶に過ず、製造代價三十五六圓許、魚一桶を米七升に換るなり。

32 第四七 打網

○打網を製造するには、目の大き二寸の網七枚を縫合す、長さ四十尋、いわの數七十位、最小石にて五十目許りなり、凡この網專業には爲さず、大網（鰯網を云）の間隙に出るのみ、抑打網は餘の網の如く置廻して引ものにあらず、沖間へ立切の如く入置、魚に網の目を刺せ而してとるものなり、此網獵船一艘四五人乗て曳

ものとす、この網にて漁する魚は坂東イガメと號す、製造代價金十圓許なり、收獲金二圓（十五年分）。

33 第四八 餌取網（キビナゴを引なり）

○此の網の製、中に三十ふしの網堅に三反置、左右と下へ四十八反を引、長さ十八尋、底入中四尋端二尋にして一方に五十尋の繩を付、一方は繩なし、製造代價四十五圓、此の網を用ゆるには一人岸に在りて繩の端を持、舟沖へ押出、網入地方へ寄に随ひ岸の者繩を手繰りよするを舟へ取て引時に、三人は竿を取り水中を交て魚の手元へ寄するを防ぐ、而して網のいわを取上れば魚を追ふを止、網を引上直に活桶へ移し入るなり。

34 第四九 鯨網

○鯨網は平日製しあるものにあらず一布々々解放して收め在るものにして五分目横四尋底入六尋なるものを以て一人持とす、故に三十人持寄て一網を製す、この網も大網の間隙にあらざれば出す事なし、其時を得て

軒見ゆれば俄然として網を出來り、毎手に縫合せて網を製し獵船五艘に取乘、魚の居處に到りて網を置まはし磯へ網を掛けて後舟をさし出し十人にて曳、網曳の舟は只一艘にて餘船は網を立廻し付て居のみ、製造代價二百十圓許り、外に坐網五百四圓、袋網百圓なり、尤麻苧六七百目を以て手製にするなり、近年不獲にして收獲あらず、抑軒網は先一人持の網を以て魚を圍、漸次に曳寄せ終に網二三枚程に至る、其時圖の如き網の中央外面袋を布、大網の中の絨目を解放し左右へ開かせ、小石を積たる内へ押入一時に石を投じて追ふ、魚急に脱て去らんとし思はず袋へ逃入るを急に引揚て取なり、季節は五六七八四ヶ月の間にして、今年に收獲あざれども、明治六年には百四五十桶引と云、一桶の代價六七十錢位、軒は干物に製す、右の網は舟九艘人四十人にて引と云。

#### 第五〇 飯網 圖略

○此の網引揚には網の袋を解放し手舟二艘の中に釣、

漕で活簀舟ある所に往、七入て活し置なり。

#### 第五一 かぐら山にて網を巻き寄せる圖圖略 第五二 鯨抄 圖略

○これに用ゆる玉（纏網なり）は、鐵輪一丈廻り柄の長さ五尺網尺間に廿四の目あるもの長さ五尺許りなり又助玉は木を曲て造る、三尺廻りなり（又大玉の柄三尋なるものを用ゆと云）、用方は舟一艘に人七八個乗、鱸の者は鱸を繰り抄ふものは表にあり、船中鍋に湯を沸し置、鯛を小き玉へ入其を沸湯中へ浸して生煮にし、其を又木盤に置二丁の魚切庖丁を以て握き、それを抓寄て抄ひ手に渡す、抄手受取りてこれを海中へ投し、玉の金輪を以て突交るに其魚肉水中にひろまる、其魚肉を食はんとして鯨群て颯と來るを抄ふもの速く七い取、閃然と玉反して舟中移すに玉網表裡及覆魚舟中へ放下さる、然れども魚の群多くして一玉一斗に餘る許なれば、助玉を呼、助玉を持もの、助玉を大玉の底

へ助け力を併して取入るなり、この魚を抄ひ舟へ移す業實に瞬息の間にして人目を驚かしむ、製造代價金輪一圓五十錢、染網六七十錢なり、季節は八月九月十月の三ヶ月なり、收獲一艘四五百桶なり、一桶代四十錢、一村廿艘許り出、漁場地方より五十間許の處にて抄へども、又潮に寄魚に寄潮に舟を立て抄ふなり。

#### 三五 第五三 鮫突 續突といふものなし、鮫かけあり

○鮫突に用ゆる具は、圖の如くなるものにして金突と號す、長さ五寸鐵を以て造る、これに三尋の竹を付るものなり、鮫かけ鉤は又圖の如く曲り、五寸許りにしてこれにも三尋の竹の柄を付、鮫平面の所に居れば金突にて突て取、其巢に居ときは鉤にかけて取なり、製造代價三十錢なり、季節十一月比。

#### あか龜捕

○あか龜を捕るは全體を用ひず、只腮を切とるのみ、この龜は廣き沙濱にあらざれば上らず、故に夜に沙濱

に至て龜の卵を生に上り來るを窺て、急に出て刃こかし其腮を切取りて龜は放ちやるなり。

#### 三五 第五四 龜突

○凡龜を捕るの具はぐゆみの木を長さ四寸に切、もりを付る處を割、もり長さ四寸二分なるを二寸木の内へ入、絲を以て繁く巻留、其木の中程へ苧索にて緒を付け、又其に長さ百尋許の網を付、此網麻苧二百五十目をみつぐりに製す、このもりに長さ七尋の柄を付、柄はもり龜に立ば脱る様切込を淺く七しものなり、柄は樫木にて重さもり共五メ目あり、七尋一本、四尋一本、二尋半三本を用ゆ、もりに付る繩もり共四箇を用意す、舟一艘五人乘なり、漁場は四國殘らず、中國長州より上へ泉州迄至る、用方はもりを持者船首にあり、押舟にて龜に近付ば龜水底に沈むを見て第一のもりを打、龜愕然として水中を逃る、暫時にして水の上に浮で息するを追付て、又第二のもりを打、爾後捕獲す、其長短の柄を用ゆるものは固り、水の淺深によるなり、龜

漁具繪圖

は皆生捕にて死龜は用をさず、龜は甲を取り肉及腹腸は煮て食ふなり、又脂をも取るものなり、漁具製造、もり柄とも一本二圓許、短きものは一圓五十錢、繩一圓五十錢許りなり、收穫近年出ず、明治五年の比には一艘百疋許りも獲たり、大なるもの長さ三尺許りにて代價二圓。

36

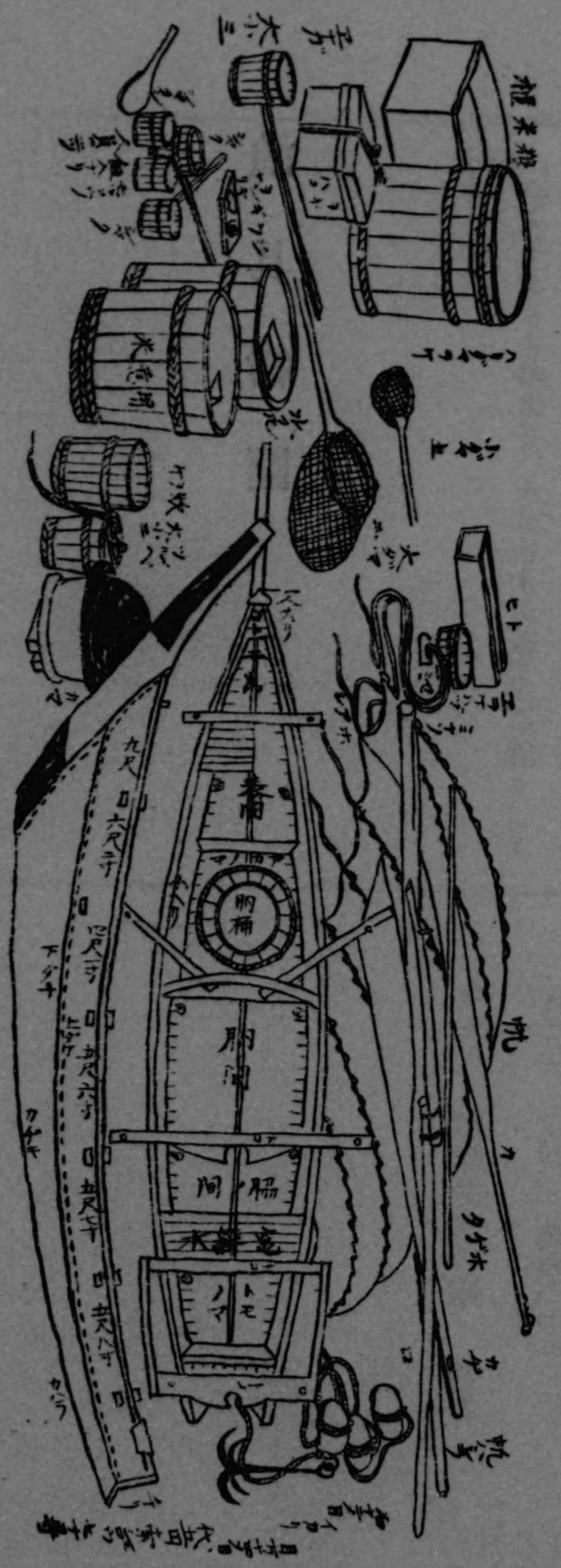
第五五 珊瑚採網の圖

第五六 珊瑚採の圖 圖略

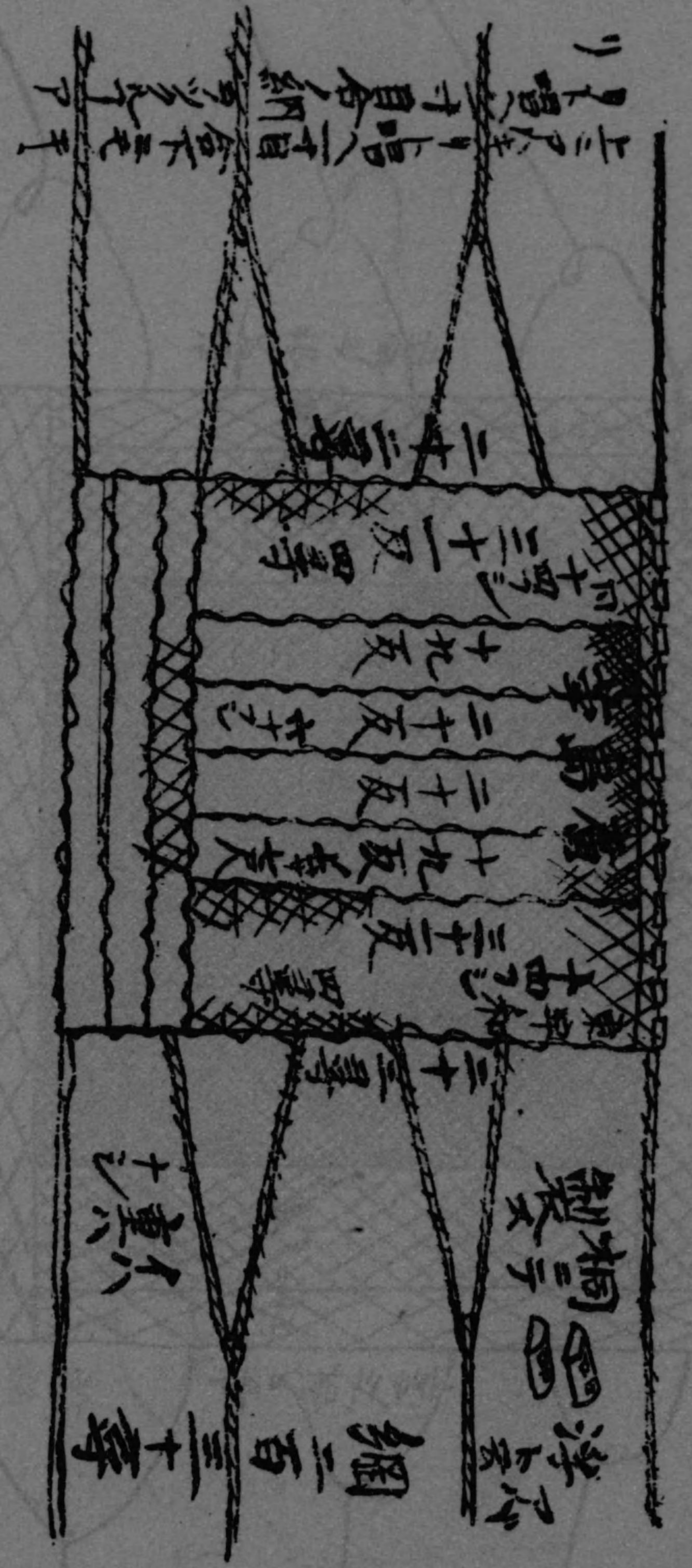
第五八 右同 圖略

第五八 珊瑚生立の圖 圖略

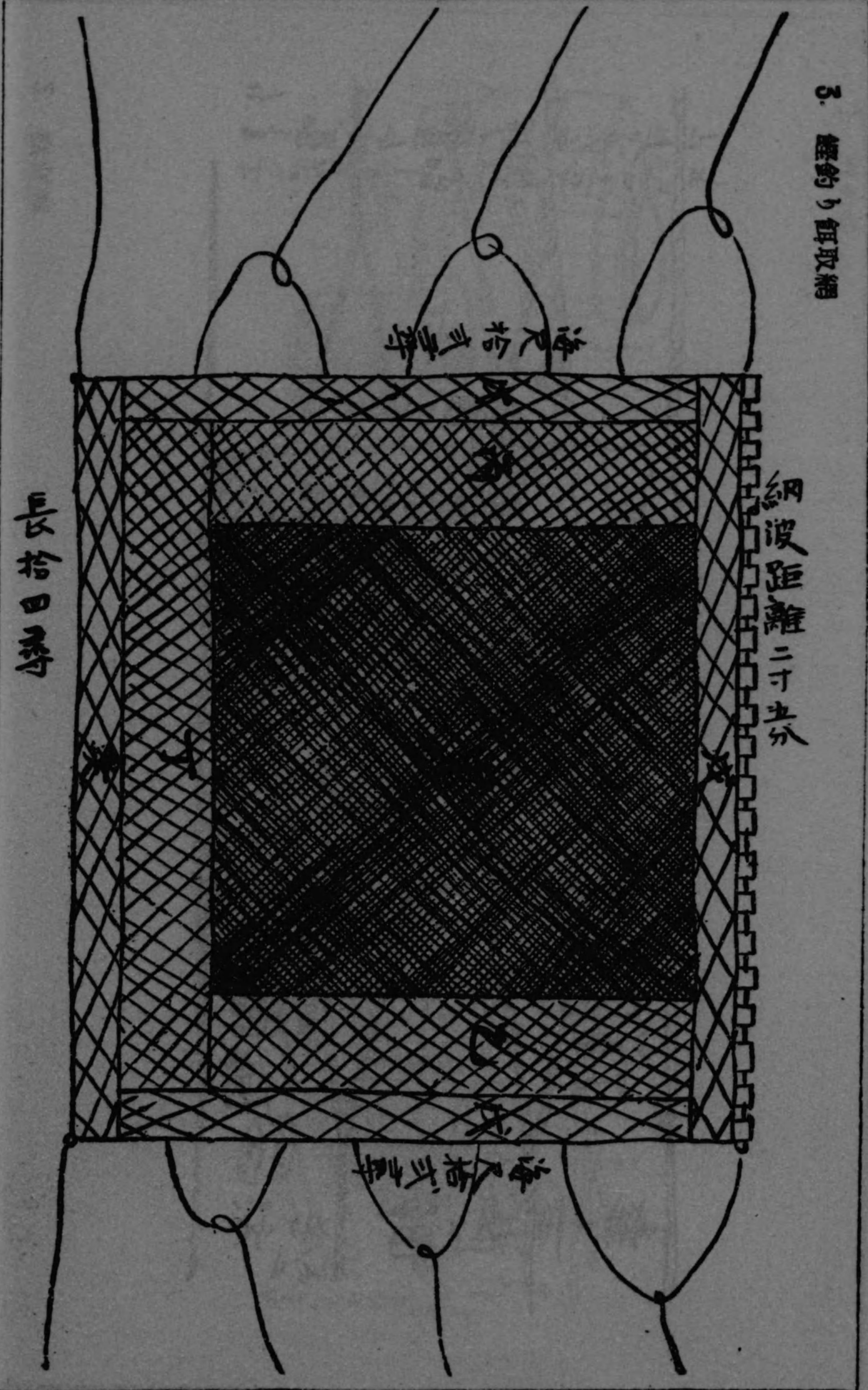
1. 輕釣船



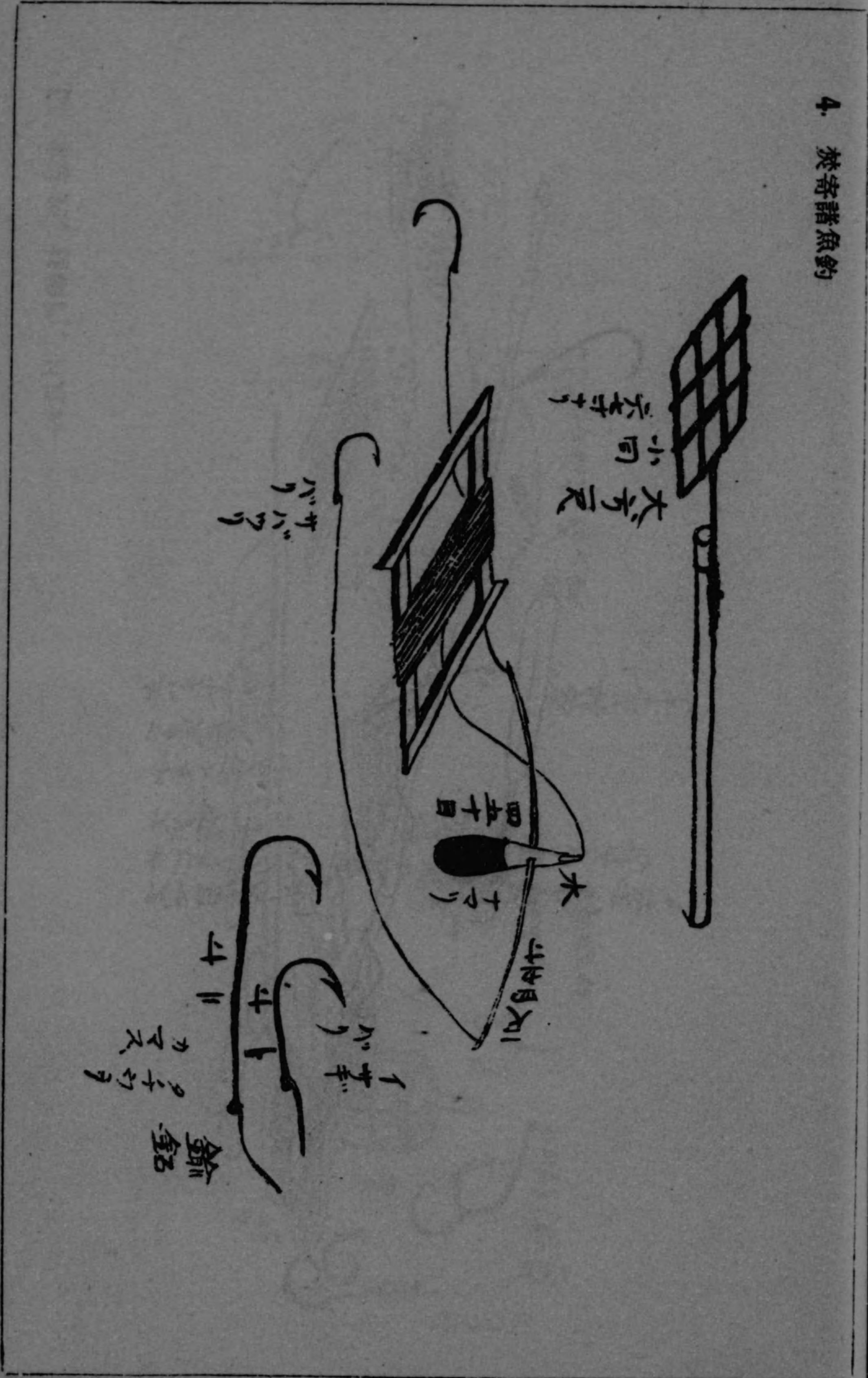
2. 餌取網



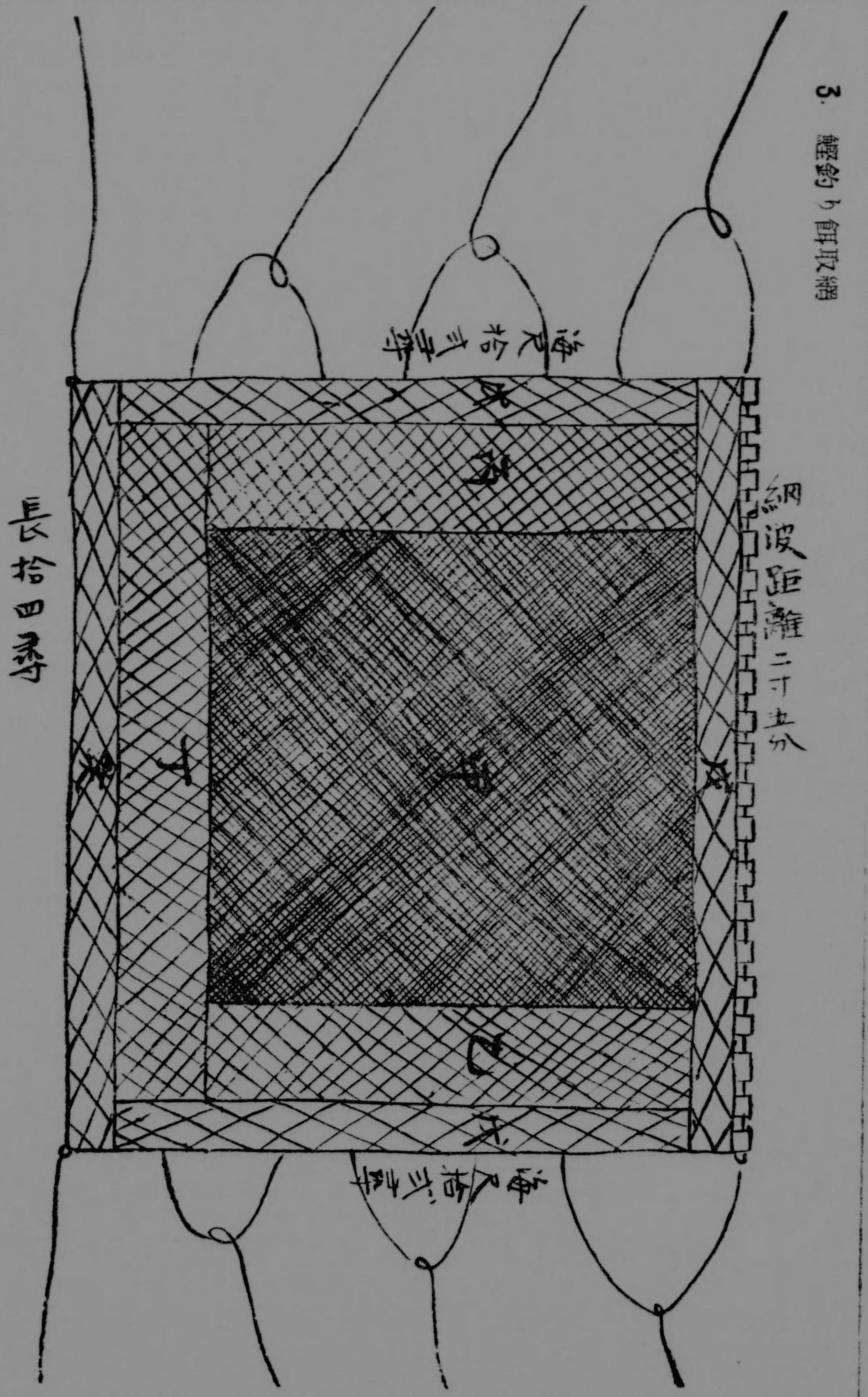
3. 煙釣り餌取網



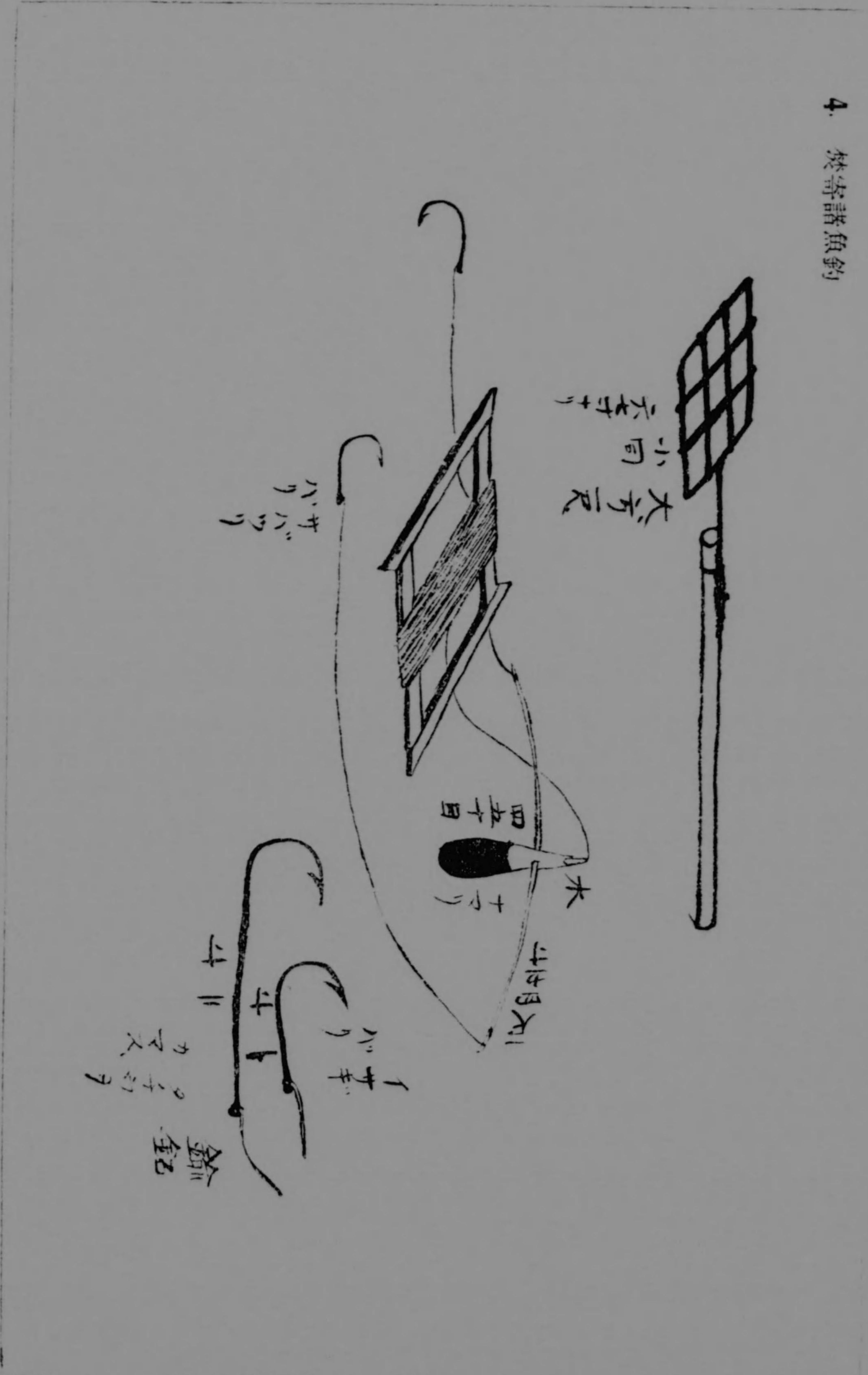
4. 焚寄諸魚釣



3. 輕釣り餌取網



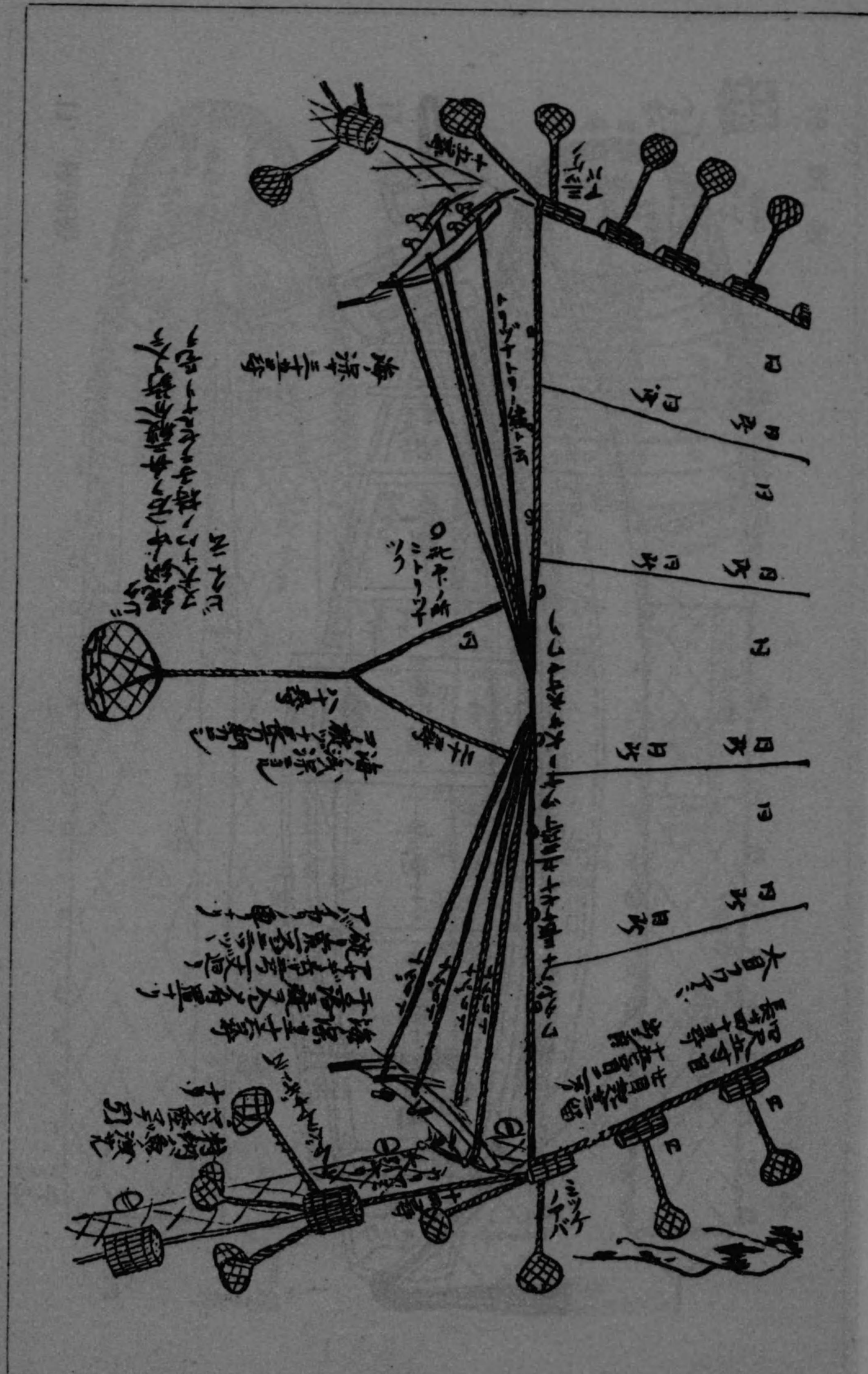
4. 焚寄諸魚釣



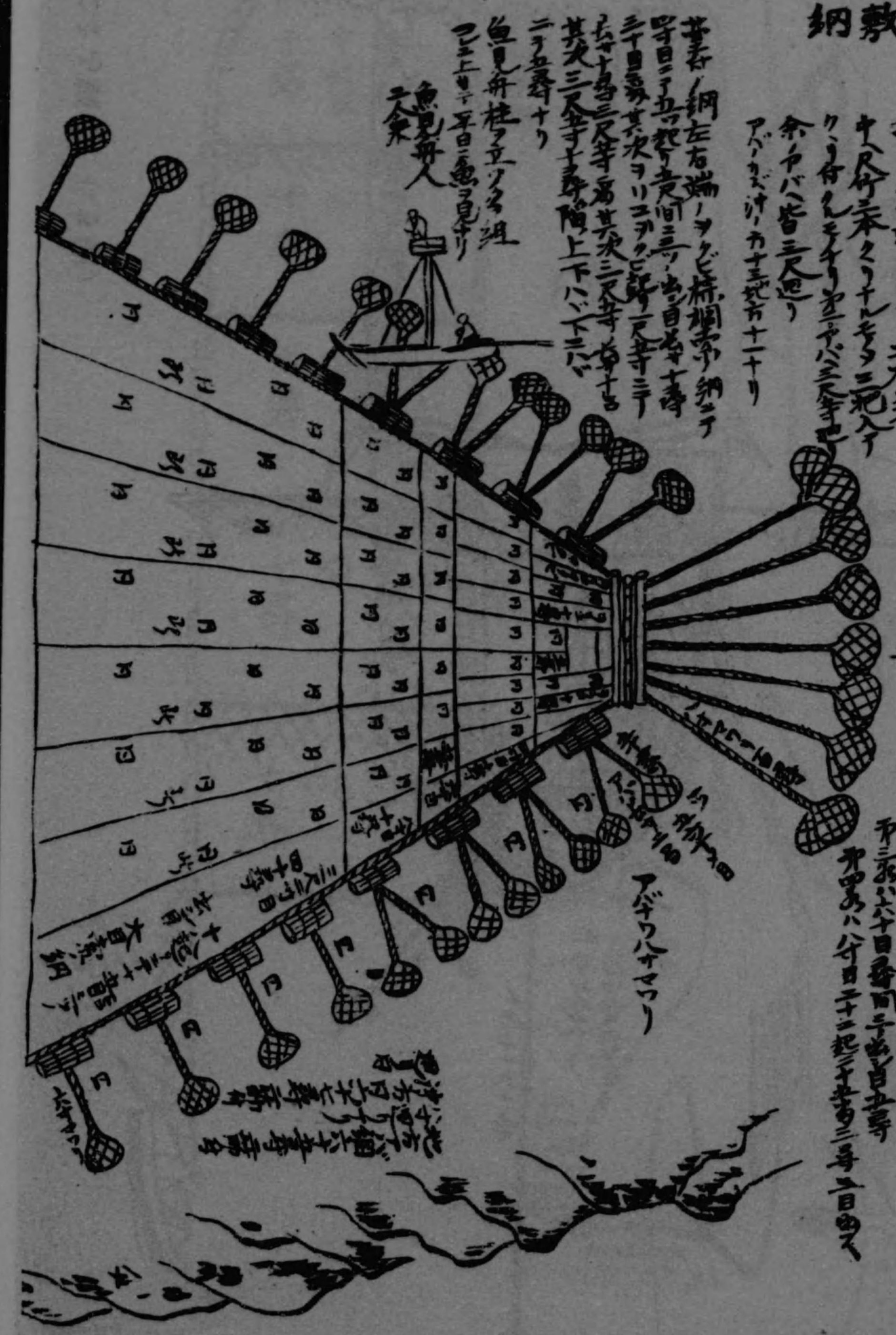








10. 大敷網  
網敷大



海濱大浮き上号  
北所  
大敷網

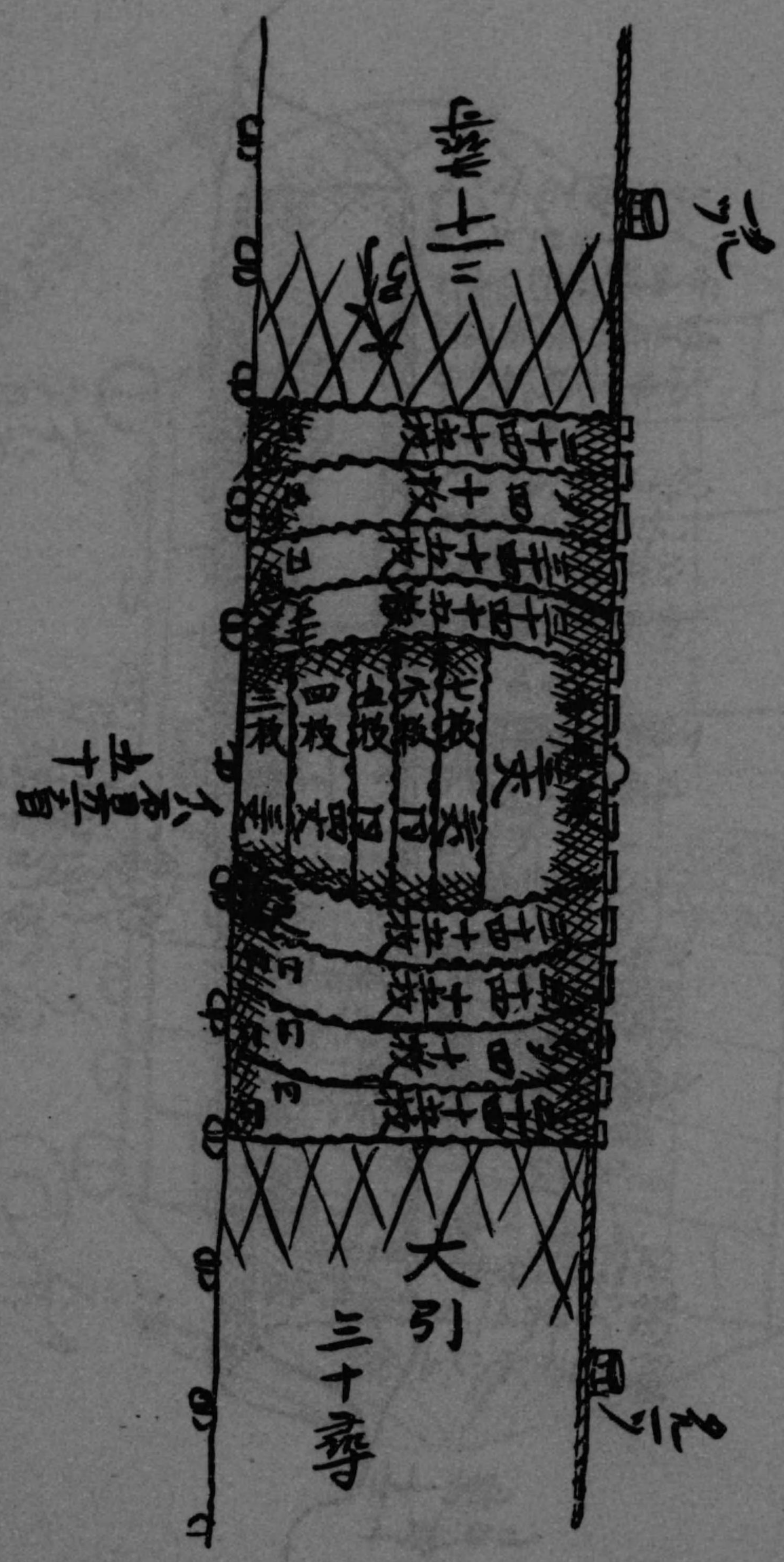
其有...  
海濱大浮き上号

其有...  
海濱大浮き上号

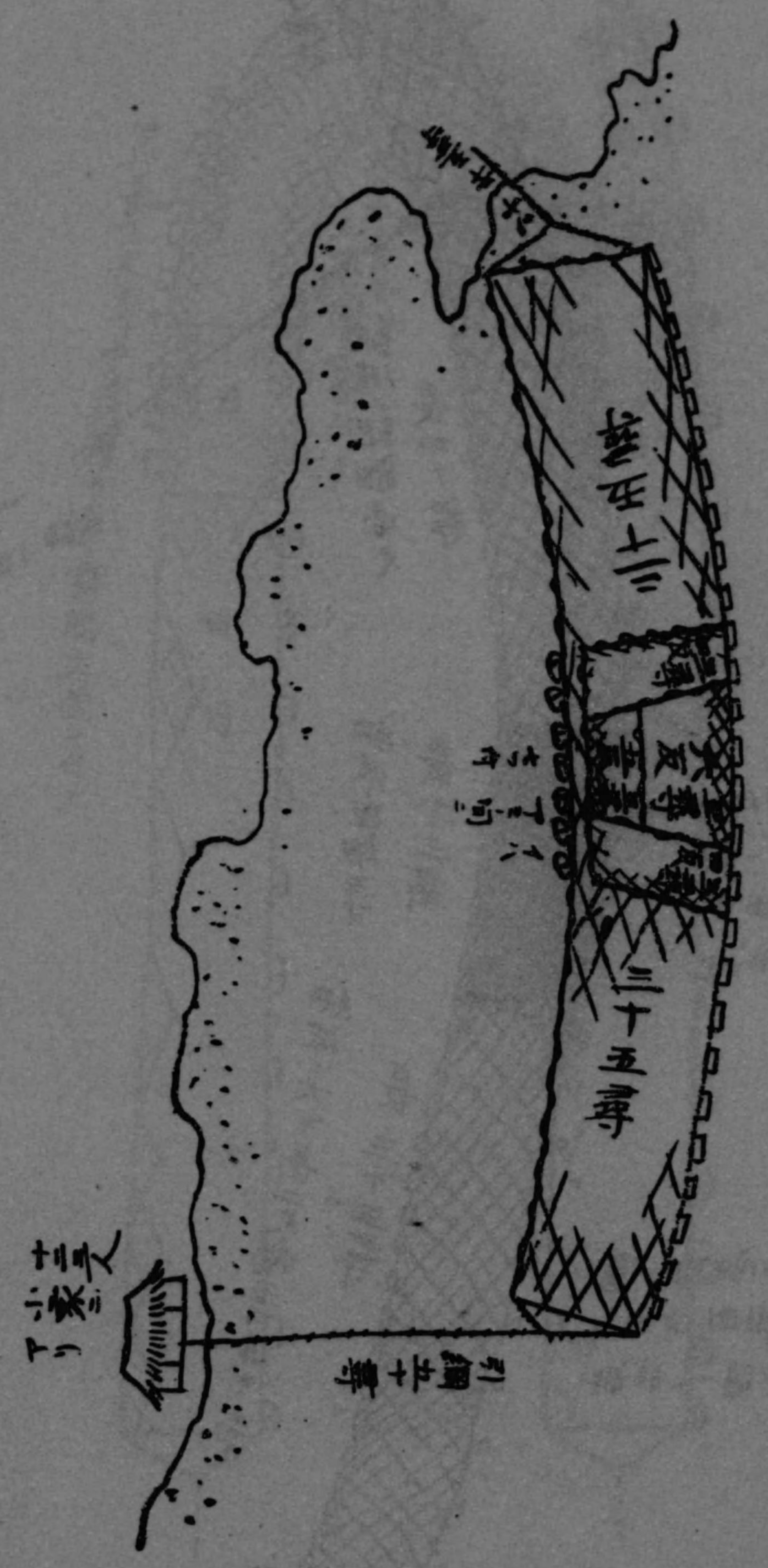




16. 銀子網

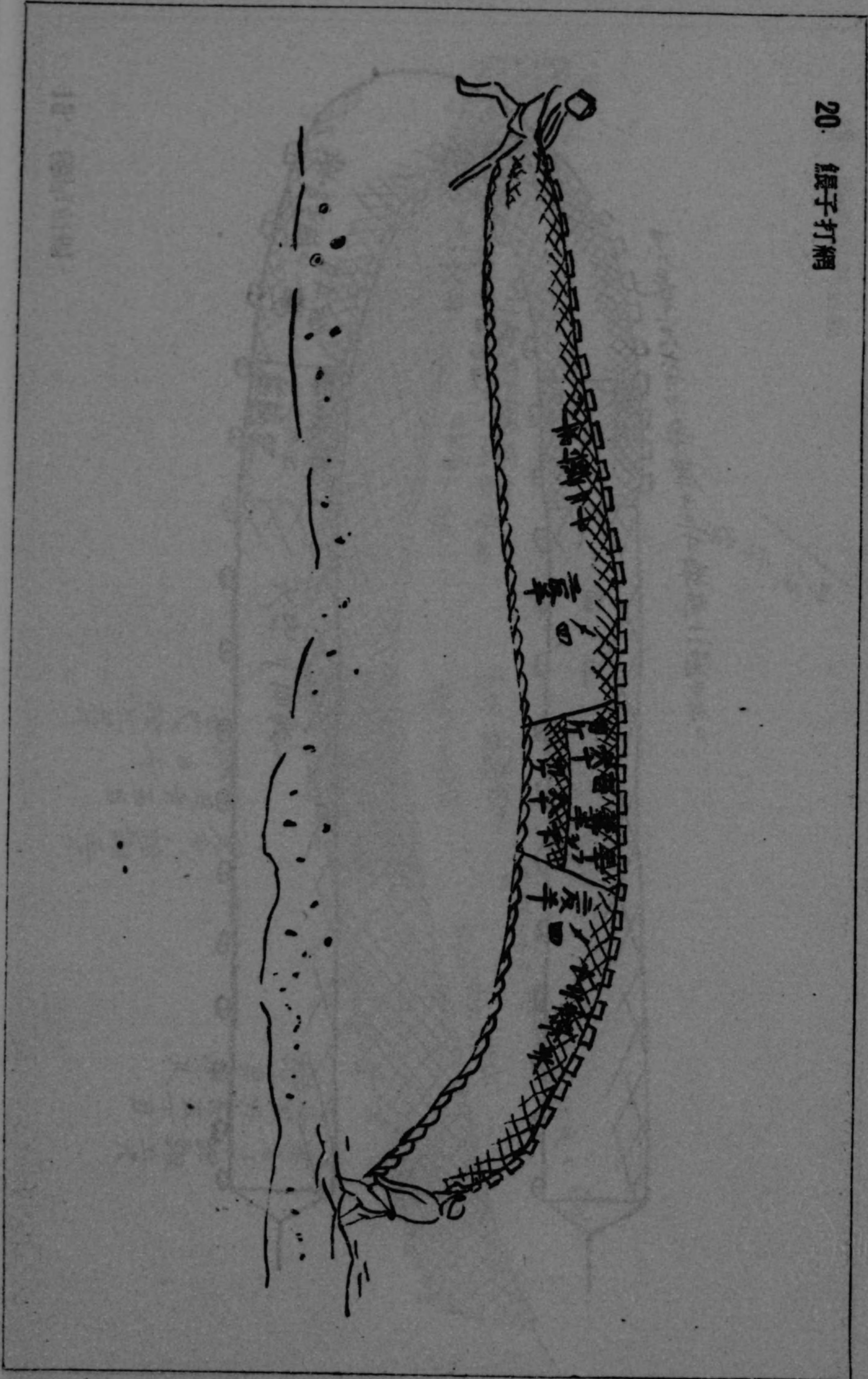


17. 銀立網

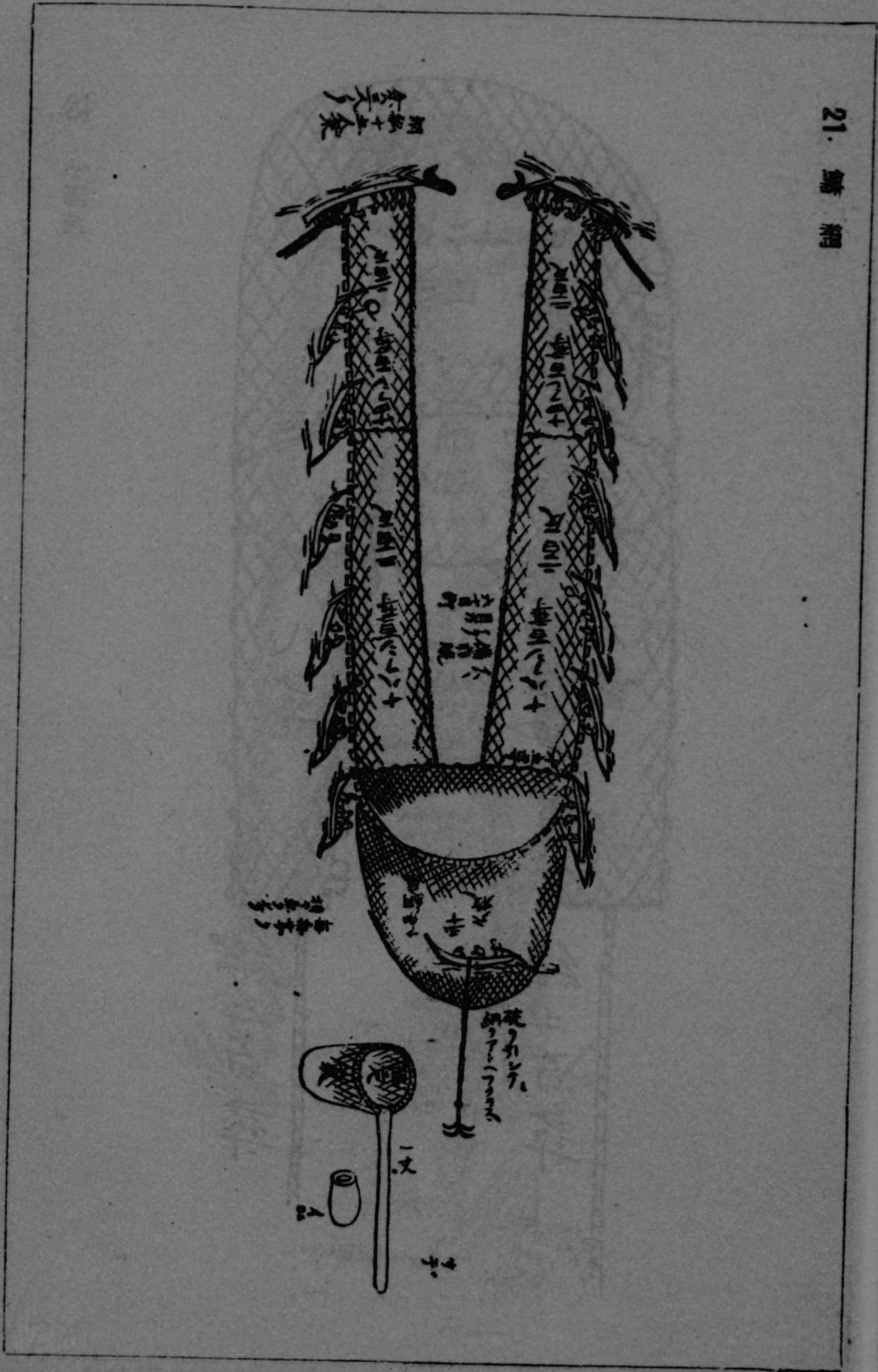




20. 罾子打網

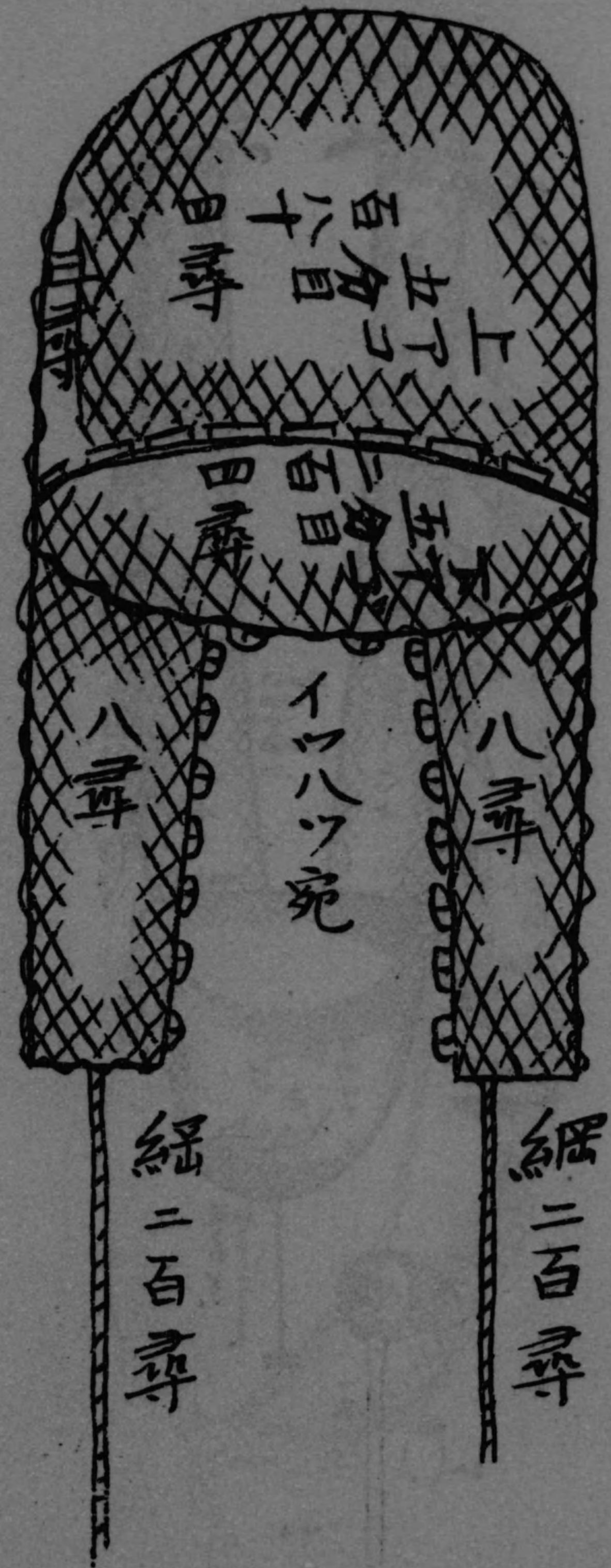


21. 罾網





22. 手操網



23. 飯網

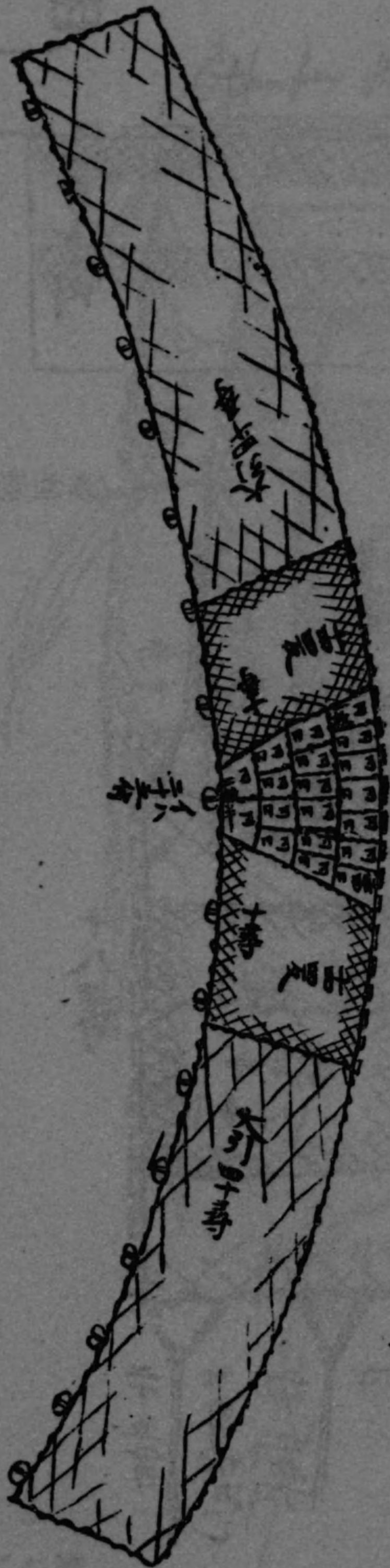




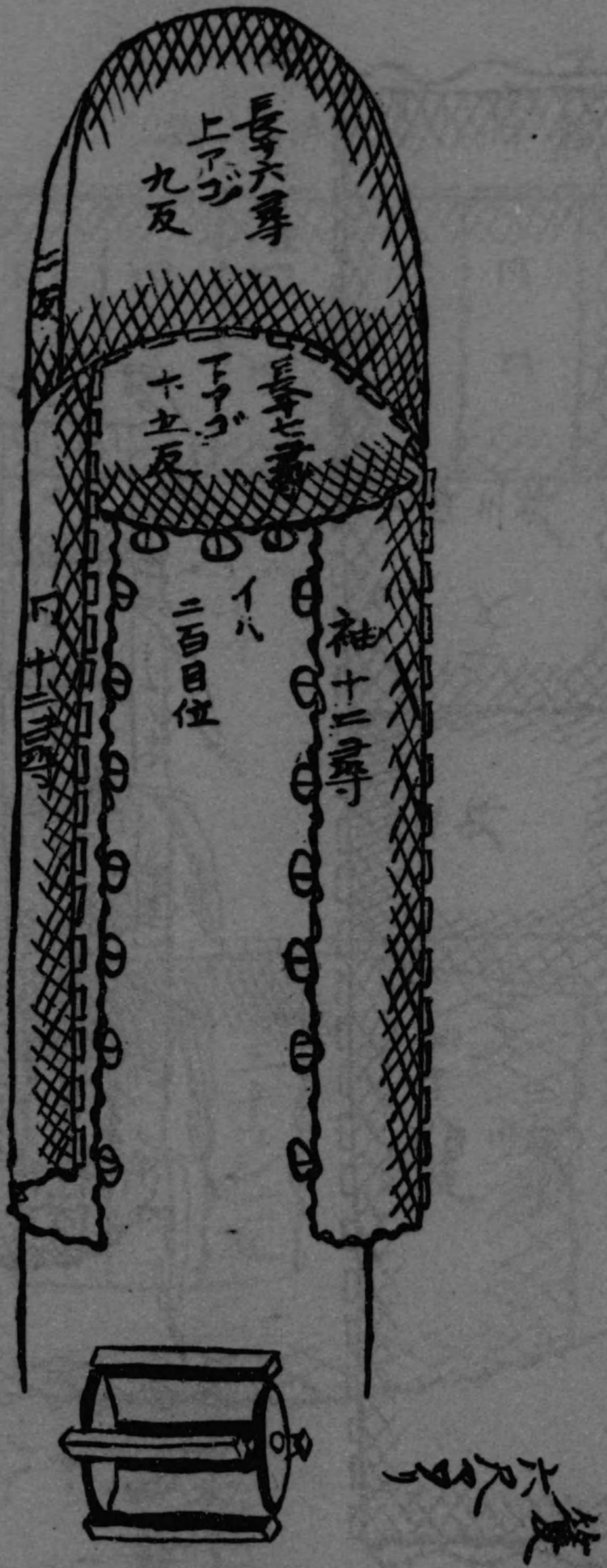
27. 鱗懸網



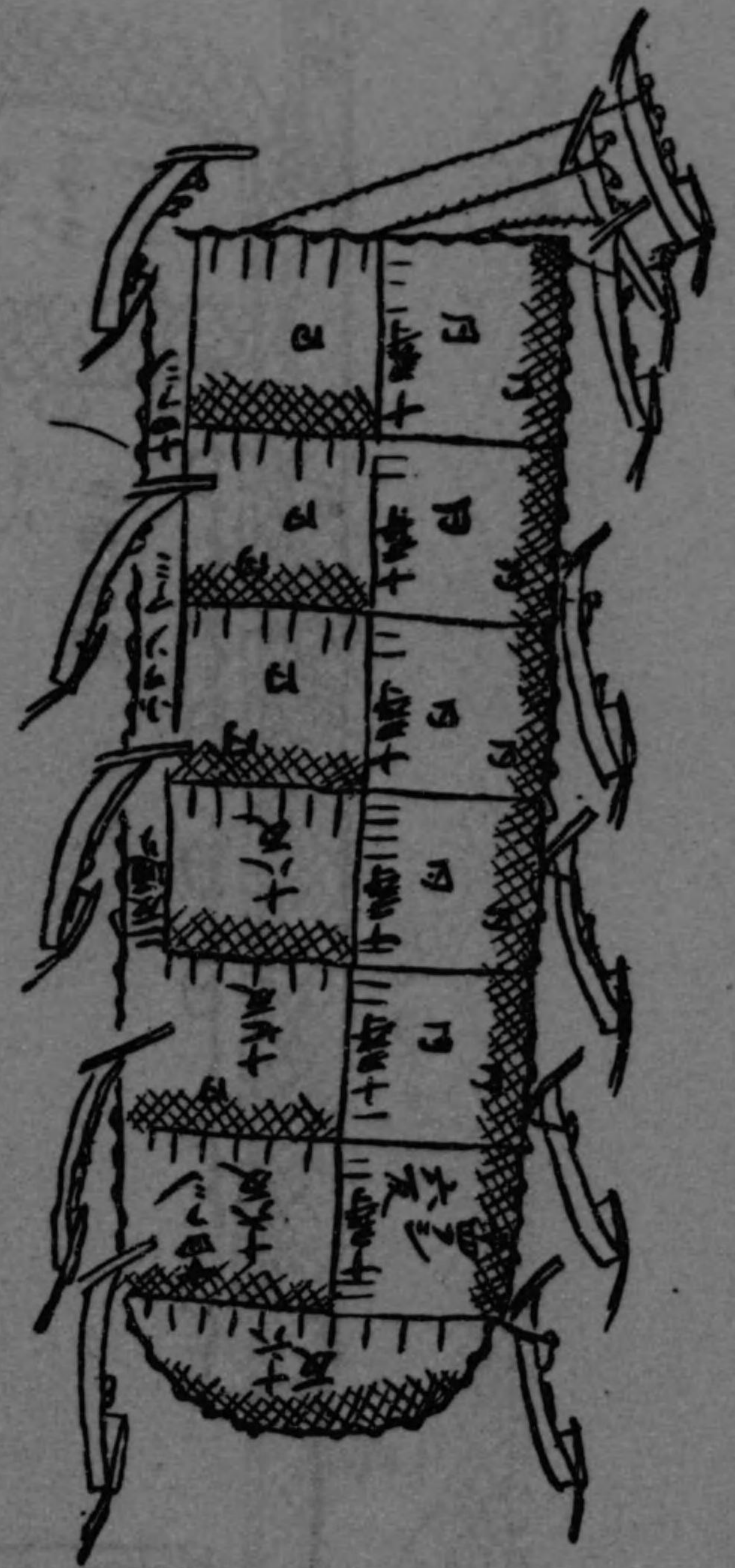
28. 目近網



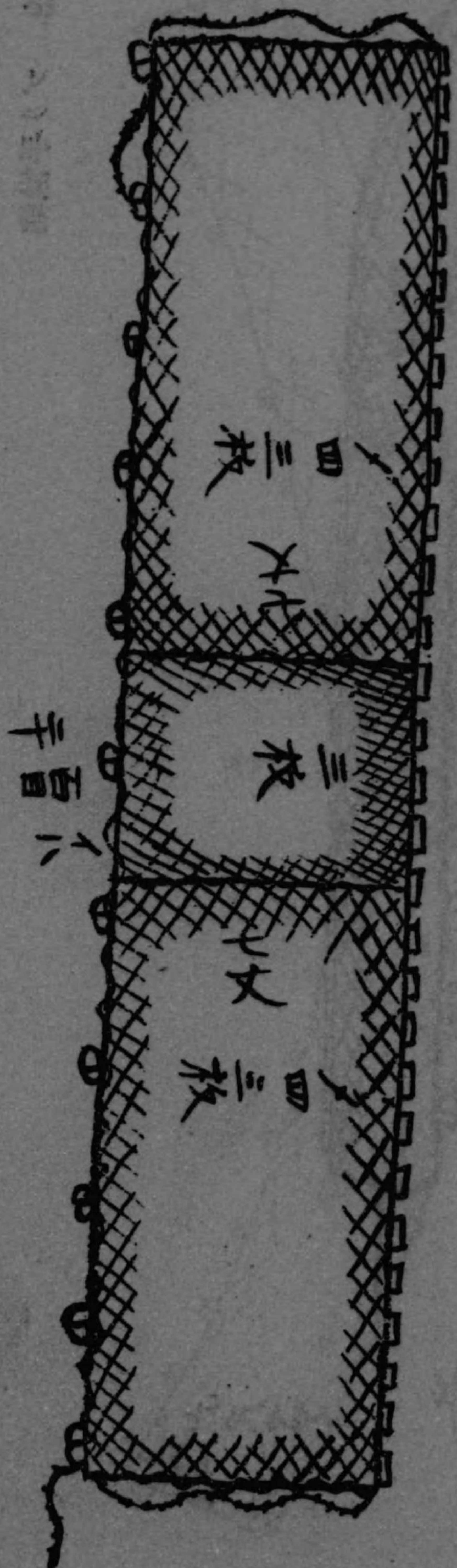
29. ナリ手操網



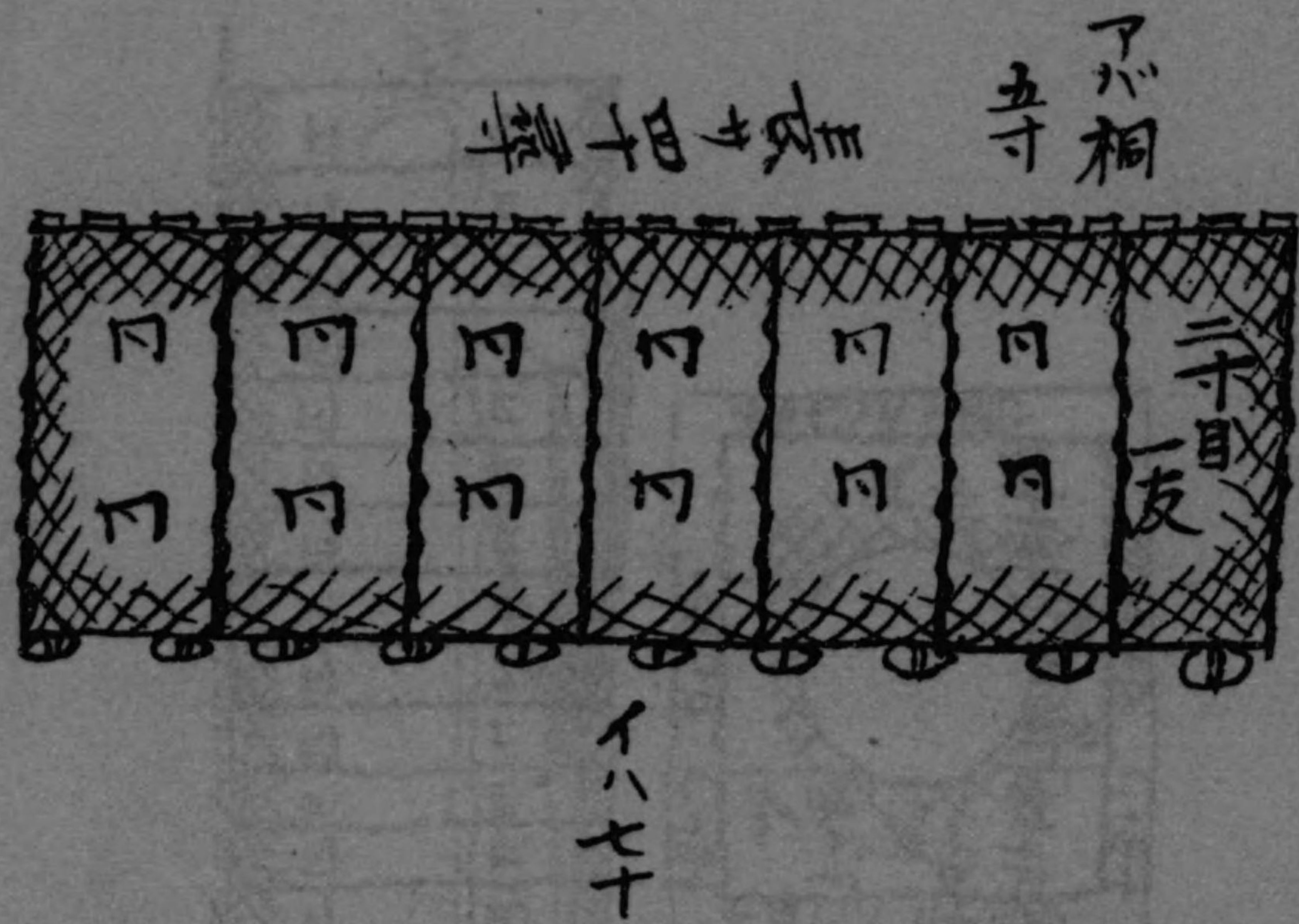
30. 鯨網



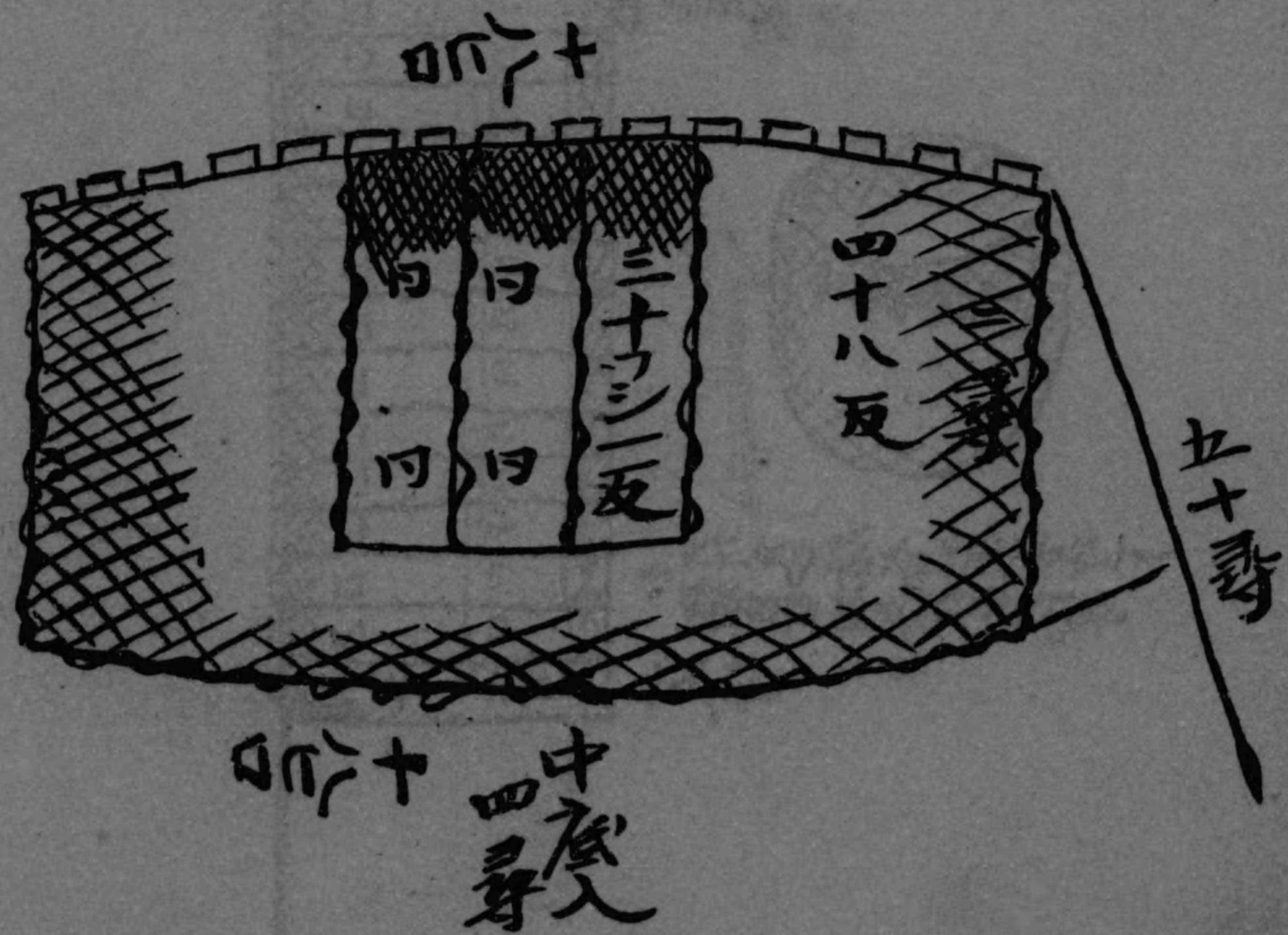
31. はり網



32. 打網

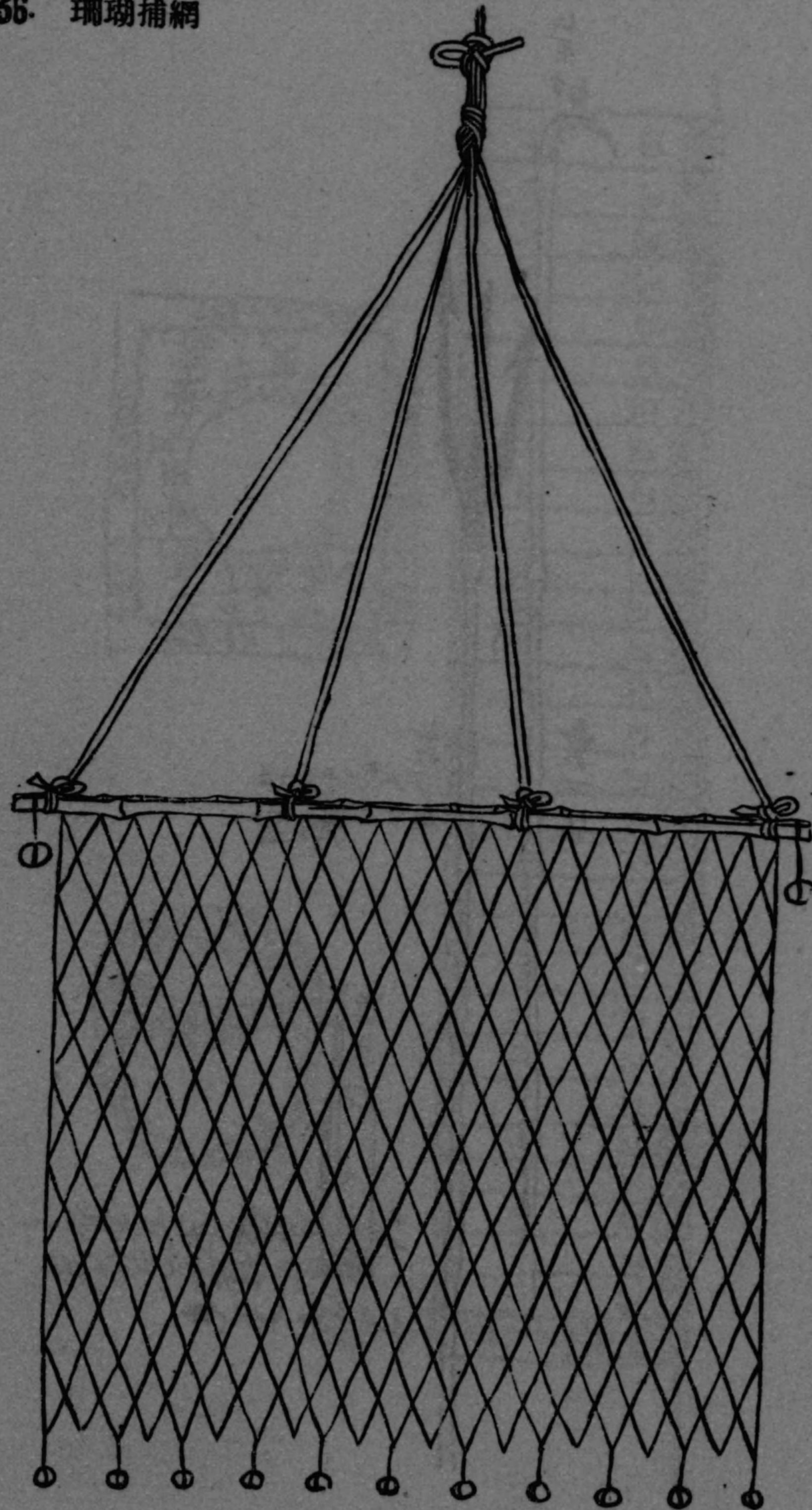


33. 餌取網





36. 珊瑚捕網



昭和十三年十月十日印刷  
昭和十三年九月十日發行

吉田 漁村經濟史料  
定價 金貳圓也

版權所有

編者	小野武夫
發行者	東京市芝區三田十番地 高木一夫
印刷者	東京市小石川區久堅町一〇八番地 君島源
印刷所	東京市小石川區久堅町一〇八番地 共同印刷株式會社
發行所	東京市芝區三田十番地 アチツク ミニージェアム 振替東京七八四七〇番

發賣所

東京芝區三田三ノ一  
丸善株式會社三田出張所  
電話三田(45)一九二六  
振替東京一一八五二七

中島製本

アチツク ミュージウム 刊行書目

○アチツク ミュージウム彙報

〔一第〕 早川孝太郎校註  
愛知縣北設樂郡下津具村

村松家作物覺帳

〔本文菊版一六八頁・圖版及  
圖表一七圖・地圖・索引〕

定價 壹圓五拾錢  
送料 拾四錢

〔二第〕 竹内利美編  
小學生の調べたる

上伊那川島村郷土誌

〔本文菊版二一〇〇頁  
圖版七三圖・地圖・索引〕

定價 壹圓八拾錢  
送料 拾四錢

〔三第〕 武藤鐵城著  
羽後角館地方に於ける  
鳥蟲草木の民俗學的資料

〔本文菊版三七〇頁  
圖版二圖・地圖・索引〕

定價 壹圓八拾圓  
送料 拾四錢

〔四第〕 吉田三郎著  
男鹿寒風山麓農民手記

〔本文菊判一八二頁  
圖版二四圖・地圖・索引〕

定價 壹圓五拾錢  
送料 拾四錢



〔五第〕

高橋文太郎著

武藏保谷村郷土資料

〔本文菊判二〇二頁  
圖版四七圖・地圖・索引〕

定價 貳圓五拾錢  
送料拾四錢

〔六第〕

内田武志著

静岡縣方言誌

分布調査 第一輯 動植物篇

〔本文菊判二七〇頁  
方言分布地圖・五葉  
〔動物六二項目・植物二八項目〕〕

定價 參圓八拾錢  
送料拾四錢

竹内利美編

小學生の調べたる

上伊那川島村郷土誌續編

〔本文菊判二二五頁  
圖版二三圖・地圖・索引〕

定價 貳圓八拾錢  
送料拾四錢

〔七第〕

知里眞志保著

アイヌ民俗研究資料 一

〔説話第一〕

〔内本文 原文一三頁  
菊判 譯文二七頁〕

定價 七拾錢  
送料參錢

〔八第〕

アチツク ミューゼウム編

所謂足半(あしなか)に就いて

(近刊)

〔九第〕

〔〇一第〕

稻塚和右衛門著

木實方祕傳書

雲藩榎樹植林製蠟手記

〔本文菊判一五四頁  
圖版一七面・地圖・語彙〕

定價 壹圓七拾錢  
送料拾四錢

〔一一第〕

宮本常一著

周防大島を中心としたる海の生活誌

〔本文菊判三〇六頁・圖版  
四一圖・寫眞三葉・地圖・索引〕

定價 貳圓八拾錢  
送料拾四錢

〔二一第〕

山口和雄著

九十九里舊地曳網漁業

〔本文菊判三三五頁・圖版  
十七圖・地圖・索引・別表  
菊判全紙大一半裁大二〕

定價 參圓  
送料廿二錢

〔三一第〕

進藤松司著

安藝三津漁民手記

〔本文菊判三三八頁・圖版  
寫眞二二圖・凸版三〇圖  
索引・別刷地圖四葉〕

定價 參圓  
送料廿二錢

〔四一第〕

内田武志著

静岡縣方言誌

分布調査 第二輯 童幼語篇

〔本文菊判一九六頁  
方言分布地圖二葉  
〔童語篇一八・幼語篇一〇七・童戲篇六〕〕

定價 貳圓參拾錢  
送料拾貳錢

[五一第] アチツク ミューゼウム編  
狩獵古記録 二篇

(近刊)

[六一第] 吉田三郎著  
男鹿寒風山麓農民日録

〔本文菊判四七〇頁  
寫眞五〇圖附録一〇〇頁〕

定價 參圓六拾錢  
送料 拾四錢

[七一第] 知里眞志保著  
アイヌ民俗研究資料二

謎・口遊  
び・唄

〔本文菊判一三五頁  
謎以下十八項目〕

定價 九拾錢  
送料 拾錢

[八一第] 祝宮靜考註  
江州野洲川築漁業史資料

〔本文菊判二三八頁・圖版  
一三圖・地圖・語彙〕

定價 貳圓五拾錢  
送料 拾四錢

[九一第] 佐藤三次郎著  
北海道幌別漁村生活誌

〔本文菊判二二二頁  
寫眞二一圖・索引〕

定價 貳圓五拾錢  
送料 拾四錢

[〇二第] 澁澤敬三編著  
豆州内浦漁民史料 上卷

〔本文菊判五六四頁  
圖版二四圖〕

定價 八圓  
送料 貳拾貳錢

[一二第] 復刻 船遊亭扇橋著  
奥のしをり

〔本文菊判一〇二頁附  
録四〇頁・圖版・地圖〕

定價 壹圓九拾錢  
送料 拾四錢

[二二第] 丹田二郎著  
越後三面村布部郷土誌

〔本文菊判二四六頁  
寫眞二〇圖・地圖・索引〕

定價 金貳圓參拾錢  
送料 拾四錢

[三二第] 宮本常一著  
河内國瀧畑左近熊太翁舊事談

〔本文菊判三〇六頁  
圖版二二圖〕

定價 貳圓六拾錢  
送料 拾四錢

[四二第] 澁澤敬三編著  
豆州内浦漁民史料 中卷之壹

〔本文菊判六八四頁  
圖版一〇圖〕

定價 七圓  
送料 貳拾貳錢

內田武志著

〔五二第〕 靜岡縣方言誌

〔本文菊判三八六頁  
附圖二葉〕

〔近刊〕

分布調査 第三輯 民具編

小野武夫編著

〔六二第〕 吉田藩 漁村經濟史料

〔本文菊判一四三頁  
圖版三六圖〕

定價 貳圓  
送料拾錢

愛媛縣北宇和郡役所

〔七二第〕 宇和島藩漁村經濟史料補遺

〔本文菊判二〇〇頁〕

定價 貳圓  
送料拾錢

拵嘉一郎著

〔八二第〕 喜界島農家食事日誌

〔本文菊判一四六頁  
附錄五〇頁・寫眞六圖〕

〔近刊〕

アチツク ミューゼウム編

〔九二第〕 社會經濟史料雜纂

〔本文菊判一二一頁  
寫眞六圖〕

定價 八拾錢  
送料拾錢

〔內容〕 靜岡縣・小野武夫・舟橋元・吉田藩・宇和島藩・喜界島農家食事日誌・靜岡縣立博物館・靜岡縣立民俗資料館・靜岡縣立歴史資料館・靜岡縣立資料館・靜岡縣立資料館・靜岡縣立資料館

鹿野忠雄著

〔〇三第〕 臺灣紅頭嶼寫眞帳

〔菊倍判アト紙五〇〇頁  
寫眞千二百餘枚收輯〕

〔近刊〕

山口和雄著

〔一三第〕 越中灘浦臺網漁業史

〔近刊〕

アチツク ミューゼウム編

〔二三第〕 社會經濟史料雜纂

第二輯

〔近刊〕

澁澤敬三編著

〔三三第〕 豆州内浦漁民史料

中卷之貳

〔近刊〕

アチツク ミューゼウム編

〔四三第〕 鹽俗資料

〔近刊〕

○アチツク ミューゼウム ノート

〔一第〕

アチツク ミューゼウム編  
民具問答集

本文別三一九頁  
項目一二〇。各項毎ニ寫  
眞ヲ附ス。地圖・索引  
附録民具蒐集調査要目

頒布價

金貳圓五拾錢  
送料拾四錢

山口和雄著

〔二第〕

明治前期を中心とする  
内房北部の漁業と漁村經濟

上本文菊判六二頁・地圖  
不本文菊判五〇頁・寫眞  
二頁・索引

頒布價

各 金五拾錢  
送料各六錢

櫻田勝徳・山口和雅著 (隱岐調査報告一)

〔三第〕

隱岐島前漁村探訪記

本文菊判一八三頁  
寫眞二圖・地圖・索引

頒布價

金壹圓五拾錢  
送料拾錢

櫻田勝徳著 (隱岐調査報告二)

〔四第〕

糸満漁夫の聞書

本文菊判三十二頁  
寫眞一頁・糸満語彙

頒布價

金參拾錢  
送料三錢

櫻田勝徳・山口和雄著

〔五第〕

美保關・廣島三  
津・伊豫大三島  
漁村探訪記

本文菊判二二頁  
地圖

頒布價

金參拾錢  
送料三錢

〔六第〕

岩倉市郎著  
喜界島調査要目

〔本文菊判一二頁〕

(非賣品)

〔七第〕

アチツク ミューゼウム編  
民具蒐集調査要目

〔本文菊判一六頁  
圖版四面〕

(非賣品)

〔八第〕

櫻田勝徳著 (土豫漁村探訪旅行報告一)  
伊豫日振島に於ける舊漁業聞書

〔本文菊判六四頁  
地圖〕

頒布價

金五拾錢  
送料六錢

〔九第〕

櫻田勝徳著 (土豫漁村探訪旅行報告二)  
土佐四十万十川の漁業と川舟  
土佐漁村民俗雜記

〔本文菊判五五頁  
地圖・送料〕

頒布價

金五拾錢  
送料三錢

〔〇一第〕

伊豆川淺吉著 (土豫漁村探訪旅行報告三)  
土佐鯉漁業聞書

〔本文菊判五三頁  
地圖〕

頒布價

金五拾錢  
送料三錢